
家庭教師ヒットマンREBORN! ～二人の転生者～

???

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ ～二人の転生者～

【Nコード】

N0121X

【作者名】

???

【あらすじ】

とある中学校に通う本作の主人公 飛川 とびかわ 椿 つばき は、寝ている間に家に忍び込んでいた泥棒に殺されてしまった。

そして、本作のヒロイン篠村 しのむら 楓 かえで も、登校中に交通事故で死んでしまった。

しかし、二人は神様の粋な計らいにより『家庭教師ヒットマンREBORN！』の世界に転生することになった！

こうして、REBORN！の世界で二人の第二の人生が始まった！

※アニメとまったく同じの部分は、飛ばしていきます。

登場人物紹介1 オリキャラプロフィール（前書き）

はじめまして！

この作品の作者の???です！

初めての小説なので、かなり読みにくいとは思いますが、よろしく
お願いします！

登場人物紹介1 オリキャラプロフィール

飛川 椿 とびかわ つばき

性別 男性

年齢 13歳

誕生日 7月14日

身長 160cm

体重 42kg

性格 物静かで思いやりのある少年

容姿 目は大きめで、色はエメラルドグリーン

顔は女顔

髪は短めで、薄い茶色に少し黄色を混ぜたような色

篠村 楓 しのむら かえで

性別 女性

年齢 13歳

誕生日 6月27日

身長 153cm

体重 40kg

性格 元気で活発な少女

容姿 目は大きめで藍色

顔は可愛い美少女

髪は肩ぐらいまでの長さで藍色

神様

性別 男性

年齢 不明

誕生日 不明

身長 173 cm

体重 56 kg

性格 めんどくさがりで、テキトーな性格

容姿 目は細く、黒

顔は美少年

髪は椿と同じくらいの長さでボサボサ

標的1 神様に出会う

「ふああゝゝ・・・よく寝たなあ・・・。」

今起きたのが、本作の主人公の飛川 椿である。

「・・・ここ、どこだろう？僕、家で寝てたはずなのに・・・。」

椿は、今、真っ白な空間にいた。

「つ、椿君？」

今の声が、本作のヒロインの篠村 楓。

「何でここにいるの？」

「何でって・・・僕は家で寝てただけだけど・・・。」

「えっ！ここは、あの世のはずよ！だって私、交通事故で死んでここに来たんだもん！」

椿は驚いた。家で寝ていたはずの自分が死んだなんて、信じられないのだ。

「僕、何で死んじゃったんだろう？」

「教えてやろう！」

「「!?!?!」」

突然声がした。そして、二人の前に一人の男が現れた！

「あんた誰？」

「俺はお前らの世界で言う神様だ！」

「嘘つけ！」

「嘘じゃねえよ！」

「「・・・・・・」」

二人は信じていなかった。神様なんてこの世にいないと思っ
っていたからだ。

「お前ら疑ってるだろ！そこまで疑うならお前らを転生させて俺が
神だってことを証明してやるよ！あと、お前は、家で寝ていたとき
に泥棒に殺された。」

「あはははは…。」

「笑い事じゃないでしょ、椿君。」

「そうだね。」

「おい！お前ら！」

神様がいきなり声をかけた。

「転生するところはどこがいい？お前らに決めさせてやる。」

「一つ質問があるんだけど。転生って、漫画の世界にも行けるの？」

楓が聞いた。

「ああ。どこでもいけるぜ！たとえお前らの考えた架空の世界でもな！」

「架空の世界とかどうでもいいから、REBORN！の世界に行きたい！」

「僕も！」

二人は同じREBORN！の世界を選んだ。

「よし！んじゃあ今から転生させるぞ！」

神様が二人に手をかざすと、二人は目の前が真っ白になった。

標的1 神様に出会う（後書き）

初めての投稿で緊張しました！

グダグダな文章でしたが、どうだったでしょうか？
そのあたりも含めて、感想をお待ちしております！

標的2 REBORN!の世界

「いてっ!!」

「いたっ!!」

謎の部屋の床に椿と楓が落ちた。

「ここ、どこだろう?」

「さあ…。」

部屋には、机とベッド、クローゼットなど、一般的な家具が置いてある。

「そこは、REBORN!の世界のお前らの家だ!めんどくさかったから、お前ら同じ家に住んでくれよ。」

天井から神様の声がした。

「あと、机の上に並中の制服と生徒手帳、あと、10億円ぐらい置いてある。困ったときは、その金でなんか買え!」

「テキトーだなあ」

のんきな声で椿が言った。

「って言うか、今何時?それに、原作のいつごろの時期なの?」

楓が天井を向いて言い放った。

「今は夜7時、明日並中に転校だ！あと、まだ原作が始まる前だ！ちなみにお前らは、獄寺隼人と一緒に並中に転校生として1－Aに入る」

「楽しみだなあ」

「椿君はのんきね…。」

楓が呆れた声で言った。

「まあ、頑張れよ！俺とはこれでさよならだ！」

「「えっ!?!」」

「じゃあな！」

神様の声が消えた。

「とりあえず、家の間取りを確認しようよ。」

「そうね。」

「何でこんなに広いのよーー!!」

家の中に楓の声が響き渡った。

ちなみに、家の中には、部屋が40個、台所が3つ、お風呂が普通の家にあるようなものが3つ、大浴場が1つ、露天風呂が1つ、トイレが7つ、三階建てで、地下もあり、森の中にポツンと1つ豪邸が建っていた。

「本当に広すぎるね。それにしても、今何時だろう？」

時計を見ると9時を回っていた。

「もうこんな時間だし、お風呂に入って寝ようよ。」

「そうね。早く寝よう！」

その後二人は、それぞれ違う風呂に入って寝た。

標的2 REBORN!の世界(後書き)

書いている途中に色々考えて書いたら、こうなっていました。
今回も、グダグダな文章ですみません。
感想をお待ちしております。

標的3 並中へ転校

まだ夜が明け始めたばかりの午前4時：あの豪邸の台所で食事をしている二人がいた。

「でも、この家本当に広すぎるよね。僕らだけじゃもったいないくらいだよ。」

「誰か呼べばいいんじゃないの？」

「誰かって？」

「みんなと仲良くなったところにみんなを呼んでお泊り会的なことをしたり。」

「あははは：確かにそれくらいしか使い道ないよね。」

「それは置いといて、並中ってどこにあるんだろう？」

「なんとかなるよ。神様だってそのくらい考えてくれてるって。」

「そうだといいいけどなあー。」

その後二人は食事を終えて、制服に着替えて午前七時ごろに家を出たのだった。

並中への道は、椿の言ったとおり、家から森の中へと道が出来ていて、その道を通って森から出てすぐに、並盛町の地図が掲示板に張ってあった。

そして並中：

「見事についたね。」

「椿君は超能力者か何かなの…？」

「ただの勘だよ。とりあえず職員室に行こうよ。」

「そうね！」

二人は職員室に向かった。

コンコン

「失礼しまあーす。転校生の篠村楓と飛川椿何ですけど、私達のクラスって何組ですか？」

何組にはいるか知っているが、知らないフリをする楓。

「二人とも1ーAだ、俺が担任だ。ついて来い。」

そしてクラスの前。

「今日は皆に転校生を紹介する。3人とも入れ！」

獄寺、楓、椿の三人がクラスに入る。

「獄寺隼人だ」

「篠村楓です」

「飛川椿です」

3人が自己紹介をし終わると、

「あの男の子カッコいい」

「あの子可愛いなあ」

「あの男の子も可愛い」

などの感想が飛び交う。

「じゃあ3人とも席につけ」

椿は普通に席についた。

獄寺は原作通りツナの席の隣まで来てツナの机を蹴った。
しかし机は倒れずもう一人机の隣に立っていた。

「獄寺君、君の席はここじゃないよ。ちゃんと席に座りなよ。」

「ケッ」

獄寺と楓は、席についた。

そしてチャイムが鳴り、それと同時に椿と楓の周りに人ばかりが
来た。

獄寺の周りに行こうとした者もいたが、獄寺の目つきがあまりにも
怖かったため、誰も寄り付けなかった。

その後も原作通り球技大会が行われ、原作通りツナの活躍でA組みが勝った。

標的3 並中へ転校（後書き）

やっと原作にかかわってきました。

これからもかなり原作にかかわっていくと思います。

間違いなどがあれば指摘してください。

感想もお待ちしております。

標的4 獄寺との和解と椿の能力

ツナたちが球技大会で勝利の余韻に浸っているところだった。

「まだだ。俺はお前をみとめねえ。10代目にふさわしいのはこの俺だ。」

（何で知ってるんだ）

「お、やっとか。」

そう言って、椿と楓は校舎裏に向かった。

「い、一体何のようなの？ 獄寺君。」

「お前みたいなカスを10代目にしちまったらボンゴレファミリーは終わりだ」

原作通りに話は進んでいた。

「何してるのー？」

「誰だ！？」

椿と楓が歩いてやってきた。

「私だよ！転校生の篠村楓。」

「僕もいますからね。」

「何しに来た！？」

「たまたまこのあたりを歩いていたら、ダイナマイトなんて物騒なものを持っている獄寺君を見かけて、興味がわいたから見に行こうなんて楓ちゃんが言うから来たんだよ」

「今のうちに逃げよう！」

ツナが逃げた。

しかし、獄寺がそれを見逃すはずもなくツナの行く先にボムを投げた。

そしてボムの嵐がツナを襲った。

そこへ山本がやってきて、ボムを拾った。

そしてリボーンが死ぬ気弾をツナに撃った。

「わぁ、初めて死ぬ気のツナ君見たよ。」

原作通りにボムの火を消していき、獄寺が3倍ボムをなんとか放った時、10個ボムを足元に落としてしまった。

ツナは放たれたボムの火を消していて、獄寺の足元の火を消そうと向かうが間に合わず、爆発すると思ったとき、10個のボムが消えて、樁が火の消えたボムを10個持っていた。そしてツナの死ぬ気タイムが終わり、

「えっ、何が起こったの!？」

消えた10個のボムを椿が持っているという状況がいまいち理解できない。

「何をした!」

椿に獄寺が言うと、

「ただ拾って火を消しただけだよ」

そう言った。

「ただ、僕もともとはとても弱くてね、喧嘩をしても10秒立たないうちにやられるほどだった。それがただ悔しくて、トレーニングをした結果こんなに早くなって、前の学校じゃ神風の椿って通り名がついちやっただ。あ、この話はクラスの皆には内緒だよ?」

「おまえすげえのな!」

山本が言った。

「それより、お見それしました、沢田さん。あなたこそボスにふさわしい」

原作通りの話をした後

「おい椿!」

「何? リボーン君?」

「お前もファミリーに入れ！」

「まあ別にいいけど、使い物にならないと思うよ？ただ動きが早いだけだし…。」

椿が残念そうに言う

「ならまた鍛えりゃいいじゃねーか。」

「リボン君は鬼だね…。分かったよ。」

「じゃあな。」

「バイバイ。」

そう言うとき椿と楓は帰っていった。

「何だあいつ！」

「ダッセーあのパンツ男！」

「「ハッハッハハハ！」」「」

三年の不良がツナを笑っている。

「早速お役に立つときが来たようです。こっぴどみに消し去って見せます。」

それから数秒後、校舎に3人の悲鳴が響き渡った

標的4 獄寺との和解と椿の能力（後書き）

今さら改めて思いましたが、自分の書き方は結構適当な書き方ですね。

「原作通り」という単語がかなり多いです。すみません。

間違いの指摘、感想お待ちしております！

標的5 沢田家での出来事

とある朝、空港に一人の女性が歩いていた。

（今度こそ、逃がさないわ。）

そして女性は歩いていった。

荷物の中に紛れていた子供も荷物の中から抜け出して走っていった。

所変わって昼ごろの沢田家。

ピンポン

「はあい！」

奈々が玄関の扉をあけるとそこには椿が立っていた。

「はじめまして。綱吉君の友達の花川椿です。暇なんで遊びに来たんですけれど綱吉君いますか？」

「ツー君なら上にいるわよ。」

「じゃあ、おじゃまします！」

椿が階段を上がりツナの部屋に入ると
ドカーン

「過激だねリボン君。」

「チャオツス椿。これが俺のやり方だ！」

「まちがってるよそれ。」

ツナの部屋は爆発のせいで倒れていたツナが起き上がって言った。

「3人も部下が出来たんだボスとして恥ずかしくないようもつと頑張れ。」

「そうだよ。ツナ君ならきつといい十代目になれるよ。」

「って、え！？椿君、何でここにいるの？」

ツナはぼろぼろの状態で聞いた。

「暇だから遊びに来たんだ。」

「あ、そうなんだ。あとリボン！部下って、椿君と獄寺君と山本のこと？3人はただのクラスメート。部下なんていらなしマフィアなんかにならないよ！」

爆破スイッチのところにいたりボンに言い放った。

「僕は部下でもいいけどね。」

「椿もこういつてるじゃねえか。では次の問題。」

「そういう問題じゃないよ！」

椿はこの二人、漫才のコンビみたいだなあ。と思っていた。

「はあ、何だってこんな赤ん坊に勉強教わらなくちゃいけないんだろう。」

そしてツナは窓の外を見た。

すると木の上に、武器を沢山身につけている牛柄の服の子供がいた。

「ここではこの公式を使う」

「ちょっ…おいリボーン、あれ」

子供がリボーンに拳銃を向けた。その時木の枝が折れ子供は落ちた…はずだったが、椿の手によって助けられた。

「ちっ、余計なことを」

「まあまあリボーン君、あんなところから落ちるのは子供には痛すぎるよ?」

「おいリボーン! おれっちだよ! ランボだよ!」

ランボは椿の手から飛び降り、言った。

「リボーンの知り合いか?」

「この公式は覚えておけよ!」

怒りのあまりランボがリボーンに殴りかかった。

「こらぁ！無視すんなぁ！」

しかしリボーンの手で壁に飛ばされた。

「何：かに：つまづいちゃった。イタリアから来たボヴィーノファミリーのヒットマン、ランボさん五歳は、つまづいちゃったー！大好物はぶどうと飴玉あ！リボーンとは宿命のライバルのランボさんはつまづいちゃったあ！」

鼻水をたらしながら言って、最後は笑った。

（泣きながら一生懸命自己紹介してる…。）

「ってことで、改めてようリボーン！」

「今の公式でこいつを解いてみる。」

「えー！無視すんのお？」

リボーンは完全にランボを無視した。

「が：ま：ん、あらこれ何かしら？じゃーん！」

ランボが髪の中から爆弾を出した。

「死にさらせ！リボーン！」

ランボはリボーンに爆弾を投げたが、椿がそれを外へはじき、ラン

ボに飴玉を渡した。

「綱吉君の勉強を邪魔したらダメだよ。それ上げるからおとなしくしててね？」

「ありがとう。椿君。あと、俺のことはツナでいいよ。」

「うん、分かった。」

「おいちー、じゃねえよ！死ね、リボーン！」

今度は数十個の爆弾を投げたが、リボーンの飼っている形状記憶カメレオン、レオンを鞭に変形させて、その全てをランボに向かってとばし、窓の外にとんでいった。

ドカーン

「やっぱりかわいそうだよりボーン君。」

「次の問題行くぞ。」

リボーンはそんなこと気にせず勉強を続けた。

「な、何もあそこまでしなくても、知り合いなんだろう？」

「あんな奴しらねえぞ。どっち道、ボヴィーノファミリーっていったら中小マフィアだ。俺は、格下は相手にしねーんだ。」

「か、かっちょえー。」

そして夕方

「じゃあ僕そろそろ帰るよ。」

「あ、うん。バイバイ。」

「チャオチャオ。」

「おじゃましました。」

こうして椿が外に出たとき、一人の女性が沢田家の前にいた。

「この家に何か用ですか？」

「いえ。」

女性は去って行った。

「あれビアンキさんだね。明日はツナ君と一緒に学校に行こうかな。」

そして椿も家に帰った。

標的5 沢田家での出来事（後書き）

今回は、原作通りという言葉を使わず書きました。

どちらにしても、グダグダな文章だけは変わってませんね。

これからもっと頑張ります。

間違いや感想などお待ちしております！

標的6 学校にランボが来る

次の日の朝、午前6時30分

「今日は僕ツナ君と一緒に学校に行くよ。」

「うん分かった！じゃあ私は京子ちゃんと一緒に行こうかな。」

「もう仲良くなってたんだ。」

「うん、獄寺君がツナ君と戦ったあとに、一緒に帰ったでしょ。そのとき椿君がトイレに行っているときに京子ちゃんと花ちゃんが来て、そのときに仲良くなったんだ！」

「へえ、じゃあそろそろ行くよ。」

椿と楓は家を出て、森を抜けてすぐのところまで分かれた。

そして椿は沢田家につき、インターホンを鳴らそうとしたらツナが出てきた。

「いってきまーす。」

「おはよう。」

「椿君！おはよう。」

「一緒に学校に行こう。」

「あ、うん、じゃあ行こうか。」

そして学校まで走っているとき、前から自転車に乗った女性が来た。

「よかったらどうぞ。」

缶ジュースをツナに投げたが、ツナはそれを落としてしまった。

「ああ、落としちゃったよ。」

ツナがジュースを拾おうとしたとき、

「ツナ君、それは気にしないほうがいいよ。変な煙が出てる。」

「えっ？」

椿の言うとおり、こぼれたジュースから謎の煙が出ていて、電柱に乗っていたカラスが気絶して落ちてきた。

「あの人…なんだったんだろう？」

「そんなことよりツナ君！学校に遅れるよ。」

そして二人は走って学校に行った。

二人が教室のドアを開けると

「おはようございます！10代目！で、何で椿もいるんだ？」

獄寺が普通の友達のように椿に聞いてきた。

「一緒に学校に来たからだよ。」

「あの、獄寺君、10代目って呼び方やめてくれない？」

ちよつと小さい声でツナが言った。

「いえ、10代目は10代目です。」

「でも…。」

すると後ろから

「お、まだやってるのかマフィアごっこ？楽しそうだなあ！俺もそのファミリ―ってやつに入れてくれよ！」

「もう入ってるよ山本君。」

少し呆れた様子で椿が言うと

「そうなのか!？」

「山本！お前、10代目の右腕の座を狙ってやがるな？そうはいかねえ、10代目の右腕はこの俺だ！」

今度は少し怒った様子で言う獄寺

「いや、そういう部下とかボスとかやめようよ。」

「そんなこと言わずに仲間に入れてくれよ。遊びは大勢のほうが楽しいだろう?。」

「山本…。」

そんな会話をしていると

「ちょっと、邪魔よあんた達。」

「おはよう、ツナ君」

「みんなおはよう！」

京子と黒川と楓だった。

「き、京子ちゃん！おはよう！」

（今日も可愛いなー京子ちゃん）

そんなことを考えていると

「それでこの子、ツナ君の弟？」

京子はツナの足元を指差した。そこにいたのは、昨日の物騒な子供、泣きかけのランボがいた。

「うわぁ！いつの間に！」

「何ですかこいつ？」

「お、可愛いな！」

すると京子がしゃがんで

「ぼくいくつ？お名前は？」

とランボに聞いた。

「まずいんじゃない？学校まで連れてくるなんて。」

「い、いや、この子は違う！」

ツナが焦って離そうとしても、ランボは足にしがみついたまま離れず泣いていた。

そして、廊下には風紀委員長の雲雀恭弥が立っていた。

「すみません。すぐに返しますから！」

そういつてツナは雲雀のいるところとは違う方向に走っていった。

「10代目！」

「ツナ君！」

獄寺と椿がツナを追った。

「授業始まる前に戻って来いよー！」

そのあと生徒達が色々いっていると、

「いつまで群れてるの？咬み殺すよ。」

そうして生徒達は教室へと入っていった。

ツナたちは渡り廊下の隣の水道の前にいた。

「えーと、ランボだっけ？ どうしてここへ？」

「リボーン…探してた。」

ランボが泣きながらいった。

「迷子になっちゃったのか。」

すると獄寺と椿が走ってきた。

「十代目！」 「ツナ君！」

「こいつ何者なんですか？ リボーンさんを知っているなんて。」

「リボーン君の知り合いで、ボヴィーノファミリーのヒットマンのランボ君だよ。」

すると水道の一部が開いて、リボーンが出てきた。

「ツナ！ もう授業が始まるぞ。早く教室に戻れ。」

「って、どっから出てきてんだー！」

ツナがびっくりしていると

「学校中の秘密基地は秘密通路でつながってるんだぞ」

「勝手に作るなよ！」

ツナがそう言っていると、ランボがツナの頭の上によじ登ってきた。

「かかったな！リボーン！今までのはお前をおびき寄せるための演技だったのだ！」

「いや、本気で泣いてたと思う。」

ランボは、そんなこと気にせずに

「覚悟、リボーン！」

そういつて、リボーンに武器を向けた。

「下がってください10代目！ここは俺が。」

そういつて、獄寺はボムを構え、ツナの前に立った。

「だめっ獄寺君！」

ツナが止めるものの、獄寺はボムを放った。

そのボムが見事にランボに命中して、ランボは泣いてしまった。

「ああ、泣いちゃった。」

「こいつ…弱すぎる。」

「さすがにやりすぎたんじゃないかな獄寺君。」

そんなことを言っていると、ランボが髪の中から10年バズーカを出した。

「一体そんなものどこから出したの？」

ランボは10年バズーカの中に入った。

そして、あたりに煙が舞った。

すると煙の中から、謎の青年が出てきた。

「やれやれ、お久しぶり、若きボンゴレ10代目。それにあなたは、ボンゴレ最強の若き飛川椿さん？」

軽く挨拶をした謎の青年。

「誰？」

「こいつどこかでみたような…。」

「ランボ君だね。」

椿が笑っていった。

「えー!!！」

「こいつが、さっきのガキ？」

二人がびっくりしていると

「さすが椿さん。分かってらっしゃる。過去の自分がお世話なつて
ます。泣き虫だったランボです。」

「本当にあのランボなの？」

「はい。」

「十年バズーカか。」

リボーンが知っているかのように言った。

「何、その十年バズーカって。」

「ボヴィーノファミリーに代々伝わるという武器だ。」

「十年バズーカに撃たれたものは、十年後の自分と入れ替わりこと
が出来るんです。ただし、五分間だけです。」

ランボが説明し終わると

「嘘？このカッコいい兄さんが10年後のランボ？」

するとランボはリボーンのいる前まで歩いていき

「ようリボーン。間違えちゃっただろう？俺がお前にしかとされ続
けた、ランボだよ」

しかしリボーンは、しかとした。

「やれやれ、こうなりゃ10年間で俺がどれだけ変わったか見せてやる。」

「サンダーセット!!!」

大人ランボは角を頭につけ、雷に撃たれた。

「俺の角は100万ボルトだ!」

「ありえねえ!」

ツナが驚く。

「死ねリボーン! エレットウリココルナータ!」

ランボはリボーンに突っ込んだ、しかし、リボーンはレオンを杖に変形させ、ランボの頭をたたいて止めた。

「が…ま…ん」

そういうと、泣きながら走り去っていった。

「10年たっても変わってなかったね。」

そしてツナたちは教室に戻った。

標的6 学校にランボが来る（後書き）

少しオリキャラが空気化していたような気がしましたが、気にしないでいただきたいです。

これからも感想や間違いなど、お待ちしております！

標的7 ビアンキと獄寺の過去

ランボが学校に来た日のお昼時、ツナと獄寺と山本と椿が一緒に屋上で昼食を食べていた。

「あーあ、朝から散々だったよ。授業には遅れて起こられるし。」

弁当の包みを開けながらツナが言った。

「迷子を送っただけなのにな！」

すると獄寺が不機嫌な顔をして

「何でお前まで当たり前のように来るんだよ野球野郎！」

「いいじゃないか！青空の下で食べるお弁当ってうまいから。」

「うん。そうだね。」

ツナがそう言いながら弁当をあけると…

「ツナ君、その弁当変だよ？」

「えっ？」

弁当から出る煙でカラスが落ちてきた。

「こ、これは…。」

「そいつは食わないほうがいいぞ！一口で天国行きだからな！」

上からリボーンが声をかけてきた。

「リボーン！」

「やぁリボーン君！で、ドアの向こうに隠れている人はリボーン君の知り合いですかー？」

椿が屋上に行くための扉に向かって言った。

キキィィ

扉が開くとそこには、今朝ツナに缶ジュースを投げた女性がいた。

「うわぁ、今朝の！」

「姉貴…。」

獄寺が気分が悪そうに言った

「え、あ、姉ー！？」

「久しぶりね、隼人。」

そして女性はリボーンの方を見た。

「チャオッス、ビアンキ。」

「リボーン！」

ビアンキは頬を赤くしていた。

「迎えに着たんだよ、リボーン。また一緒に大きい仕事しようよ。あなたがいるべきは、もっと危険でスリルな闇世界なのよ。」

ビアンキは髪をいじりながら言っていた。

「言ったはずだビアンキ、俺にはツナを育てる仕事がある。」

「かわいそうなりボーン。この十代目が何か不慮の事故で死なない限り、リボーンは自由の身になれないってことだね。」

「えー！」

「待っててね。十代目を殺…十代目が死んじゃったら、また迎えに来るね。」

ビアンキは悲しそうに去っていった。

（俺、もしかして狙われてる？）

「ツナ君、これからも学校一緒に行っていいいかなあ？ちよっとツナ君一人じゃ心配で…。」

「あ、うん、ありがとう！」

「獄寺の姉さんって美人だなあ」

三人が獄寺の調子が悪いことに気づき、保健室へ運んだ。

「あれ？保健の先生いないなあ。俺、探してくるよ！」

「うん、お願い。」

山本が保健の先生を探しに外へ出て行った

「リボーン！何なんだよ、あの人が獄寺君のお姉さんって、それにあの料理。」

「あいつは毒サソリビアンキって言うフリーのヒットマンだ。得意技は、毒入りの食い物を食わせる、ポイズンクッキングだ！」

「また変なの来たー！」

ツナが頭を抱えて言う

「ちなみに俺の愛人でもある。」

「お前意味分かって言ってるのかー！！」

そして椿が

「ツナくーん？その変なのの中に僕は入っているのかなあ？」

椿の後ろから黒いオーラが出ていた。

「い、いやっそんなことは…。」

ツナがあせって答えた。

「そういえば椿、お前ちゃんとトレーニングしてるのか？」

「もちろん！家に帰って休憩してから、腕立て伏せとか色々一万回ずつやってるよ。」

椿が笑顔で言った。

「じゃあこれからは二万回ずつやれ！」

「本当にリボン君は鬼だね…。」

あきれた顔で椿が言う

「これも愛情って奴だ。」

「どっちかという、いじめに近い気がするんだけど…。」

「なんか言ったか？」

「なんでもないよ。」

そんな話をしていると獄寺が起きて言った。

「すみません、10代目に椿。」

「大丈夫？獄寺君。」

すると獄寺は目を瞑って言った。

「みつともないところを…お見せしてしまつて…俺姉貴の顔を見ると…。」

「どういふこと?」

ツナが聞くと、

「あれは、俺が六歳だったとき…うちの城で、盛大なパーティが行われたんです。」

「城ー!? 獄寺君って実はお坊ちゃん?」

獄寺は話を続けた。

「俺は、みんなの前でピアノを披露することになったんです…その時、姉貴が初めて俺のためにクッキーを焼いてくれました。後で分かったんですが、姉貴は、作る料理が全てポイズンクッキングになる才能の持ち主だったんです。」

「どうなつてんのそれー!」

「すごいねー。」

ツナがびっくりしているときに、椿は関心していた。

「もちろん、そのときの演奏は、この世のものとは思えないものに…。ところが…みんなすばらしいとか言つて拍手をしていたんです。気を良くした父は、発表会をさらに増やし、『ビアンキ、隼人のために、またクッキーを頼む。』と言いました。姉貴は、『はい、お父様。』とか言つて、その後も、発表会のたびに、姉貴のクッキー

を食べさせられました…。その恐怖が体に染み付いて、今では、姉貴を見るだけで腹痛が…。」

「悲劇だー!!！」

その後、ツナたちは、山本が呼んできた保健の先生に獄寺を任せて、教室に戻った。

標的7 ピアンキと獄寺の過去（後書き）

今回の話、椿が設定上の性格と少し違ってました。

物静かなはずの彼が黒いオーラを出すのは明らかにおかしいですよ
ね。

これからは気をつけなければ…。

これから、間違いや感想等お待ちしております！

標的8 家庭科実習

ツナたちが教室に戻ると、教室内の机が教室の隅に運ばれていた。

「あ、そういえば今日は家庭科実習の日か、みんなどんなケーキを作ったんだろう？ ツナ君は誰からもらうつもりなの？」

「そ、それは…。」

「しかし獄寺もついてないよなあー！こんなときに腹痛なんて。」

二人が話している途中に山本が言った。

「うん、そうだね。」

すると教室のドアが開きそこには女子が大勢立っていた。

「今日は家庭科実習で作ったケーキを、」「」「男子にくれてやるー！！！」「」「」「」

「」「」「よっしゃー！！！！」「」「」

「うまそう！」

「俺にくれ、俺に！」

男子はそんなことを言っていた。

「獄寺君居ないのー？」

「吉本君にあげよつと!」

「山本君受け取ってくれるかなあ?」

女子もそんなことを言っていた。

「ツナ、誰にもらうか決めたかあ?」

「え、そ、そりゃあ…」――（京子ちゃんのがほしいけど…。）

その時、京子と黒川の後ろにビアンキがいて、京子のケーキと自分のケーキを取り替えようとしたが、椿がビアンキを連れて、屋上まで神速の速さで行った。

「何するのよ!」

「ツナ君が君のケーキを食べるのは、あまりにもかわいそうだからね。」

そう言い残すと、また教室へと戻った。

戻った時には、ツナが幸せそうに京子のケーキを食べていた。そして、一斉に回りに女子が押しかけて来た

「飛川君、私のケーキ食べて!」

「私のを食べてもらうのよ!」

「ダメ、飛川君は私のを食べるの! っていうか、飛川君自体私のもの!」

みんな殺気だつて無茶苦茶なことを言っている。
そんな中椿が…

「僕昼ごはん食べてお腹いっぱいになっちゃったからケーキは食べれないよ。」

「「「「えーーーーー!!!!!!」」」」

こうして、女子のケーキを全て男子が食べ終わったころ…

「ランボさんにもケーキくだちゃいな。」

ランボが教室前にやってきた。

「ランボ! 残念ながらケーキはなくなったよ。」

ツナがランボに言った。

「ケーキ…ないの? ……が…ま…ん、出来な…い!」

そういつてランボは10年バズーカを使った。
そして、大人ランボと入れ替わった。

「出た…大人ランボ!」

そして、廊下から先ほどのケーキを持ったビアンキが来た。

「絶対ボンゴレ10代目にこれを食べさせてやる!……ロメオ……あなたはロメオ!!」

「え、ロメオって誰だ?」

状況の理解できないツナが言った。

「あの女の人の元カレとかじゃないの?」

「篠村さん!?!」

「楓でいいよ。」

「あなたがち間違いじゃないな、あいつはビアンキの元カレによく似ているんだ。」

どこから入ったのかツナの横にリボーンがいた。

「リボーン、いつの間に!」

リボーンは自分の持っていた写真をツナに見せた。

「ってそっくり!っていうか、何でこんな写真持ってるんだ!?!」

「ロメオ……生きていたのね!食らいなさい!ポイズンクッキング!」

先ほどのケーキで大人ランボの顔が埋め尽くされ、倒れてしまった。

「えー！！」

「ビアンキの元カレ、分かれる寸前、仲が悪かったらしいぞ。」

「でもさすがにあれはやりすぎでしょ。ビアンキさん…だっけ？そんな分かれ方をしたならきっぱり忘れちゃえばいいのに。」

ビアンキは帰り、ツナたちは倒れた大人ランボに駆け寄った

「おい、ランボ大丈夫か？しっかりしろ！」

「十年後の医療なら助かるかもな。」

そして夕方：

「ただいまー。」

「お、おじゃまします。」

「おじゃまします。」

「おじゃましますね。」

沢田家に、ツナと獄寺、椿に楓が来た。

「お帰りなさいツー君。新しい家庭教師の先生が二階に来てるわよ！」

四人が二階に上がると、そこにはビアンキがいた。

「おかえり。」

獄寺が腹痛により倒れた。

「あ、獄寺君！何でここに！」

「愛のためよ。」

「仕事のためだぞ。」

「リボーンには、私がいなくちゃダメなのよ。」

「ビアンキには、お前の家庭教師の一部を担当してもらう。」

（会話がかみ合っていない…）

ツナがそんなことを考えている中椿が聞いた。

「何でまた急に？」

「ビアンキが俺と一緒に居たいみてえだからな。そのついでだ。ちなみにビアンキには家庭科と美術を担当してもらう。」

「ビアンキの家庭科に沢田君はついていけるのかなあ？」

「ツナでいいよ。楓ちゃん。」

「ちょっとそれどう意味？」

そう言いながら、ビアンキはポイズンクッキングの井を開けた。

「ほらツナ君にはビアンキさんみたいな才能が無いじゃない？だから大変だろうと思ったのよ。」

「ビアンキが家庭教師だなんて、絶対嫌だあー！」

ツナの声が家中に響いた。

標的8 家庭科実習（後書き）

地味に中途半端なところで終わってしまいました。
今回は出来るだけ楓も出してみました。

最近出番が少なかったので…。

これからも間違いや感想等お待ちしております！

標的9 神の空間での出来事（前書き）

僕の小説ってアニメの会話とかがほとんどですね。
もっとオリジナリティというものを入れなければ…。

標的9 神の空間での出来事

椿はビアンキがツナの家庭教師になった日、自分の部屋で寝ていた。しかしまた、神様のいる空間にいた。

「神様、何の用ですか？」

「お前には、今以上に強くなってもらいたいんだ。」

「何故ですか？」

「ちょっと理由があつてな。後これをお前に渡しておく」

神が渡したのは、刃のない日本刀だった。

「神様、この刀刃がないんですけど…。」

「ああ、お前が人を斬る必要は無いからな。」

「なるほど。」

「お前にはこれから俺が設定した空間で、毎日鍛えてもらう。その空間にはお前の部屋の奥に作った扉から行ける。」

「用件はこれで終わりですか？」

「ああ、まったくお前らのせいで俺がどれだけ苦労してると思ってるんだ。ま、たいしたことはしてないんだがな。」

この人が神様で僕らの住んでる世界は大丈夫なんだろうか？そう椿は思った。

「あと、校内でも武器を持って置けるようにしておけ。そうしておかないと、いざって時にお前の仲間を助けることができないぞ。」

「はいはい。」

「じゃあな。」

こうして椿は目覚めた。

標的9 神の空間での出来事（後書き）

今回は、神様の空間での話でした。
かなり短かったですね。

これから間違い、感想等お待ちしております。

標的10 初めての実戦

時刻は午前五時、朝ごはんを食べ終わった椿は、自分の部屋で考え事をしていた。

椿は神の空間で校内でも武器を所持できるようにしておくように言われて、どうすればいいか悩んでいた。

「やっぱり雲雀さんに頼むしかないかなあ。」

結局この方法しか思いつかなかった。

「でも、そうなるともっと強くないと話すら聞いてもらえないかもしれないなあ：神様の言っていた空間で修行するしかないか。でも、校内で何か事件があることなんて、アニメには無かったはずだから

別に大丈夫か。まだ登校するまでに時間があるからとりあえず奥の空間に入ってみようかな。」

そして、椿は自分の部屋の奥にある扉の前に立った。

「さあ、入ってみるか。」

椿が部屋の奥の扉を開けると：そこはただの白い大きな部屋だった。入り口の近くに機械が置いてあり、Lv1からLv100までの100個のスイッチがあった。

「Lv1ってなんだろう？」

椿がLv1のスイッチを押した。

すると、機械が動き出して、部屋の中央に幻覚のツナが現れた。
そして、部屋の天井から神の声がした。

「もうその空間を使ってるのか。まあいい、一応その機械の説明をしてやる。その機械は、幻覚で戦う相手を作り出す装置だ。その機械のLvって言うのは、幻覚で作り出す相手の強さのことだ。今の雲雀の強さはLv14くらいLv1だけは極端に弱い奴になっている。じゃあ頑張れよ。」

神の声が消えた。

そして、ツナが椿に突っ込んできた。
椿が軽く刀で攻撃しただけで倒れた。

「ツナ君ってこんなに弱かったんだね。」

そう呟いて部屋から出て行った。

標的10 初めての実戦（後書き）

椿の初めての实戦相手は、幻覚で作り出されたツナでした。
かなり短めでしたね。

これから間違いや感想等お待ちしております。

標的11 ハル来襲!?! 椿が風紀委員に入る。(前書き)

この小説を読んでいただいております、作者の?..?..?
です。

これからは、この小説をもう少し面白くするために、原作を出来る
だけいじっていいこうと思います。

標的11 ハル来襲!?! 椿が風紀委員に入る。

この日も椿とツナが一緒に登校していると、塀の上に一人の少女が歩いてた。

その子が、ツナたちの近くまで塀の上を歩いてきて、ツナたちと一緒にいたりボーンに声をかけた。

「こんにちは。」

すると椿が呆れた顔で、言った。

「挨拶をする前に、塀の上から降りたほうがいいんじゃない?」

「チャオッス!」

椿の言葉を気にせずに、リボーンが言葉を返した。

「私、三浦ハルと申します。」

ハルが足をさせながら言った。

「知ってるぞ。学校に行くときによくついてくるな。今日は何のようだ?」

「あの、お友達になっていただけませんか?」

ハルが顔を近づけて言った。

「いいぞ。」

リボーンがそういったとたん、「はひー！」と叫びながら塀の上から落ちそうになったが、アクロバットな動きをして、見事に着地した。

「さっそくなんです、こう、ぎゅーってさせてもらえませんか？」

ハルがそう言った。

「意味が分からないよ？もうちょっとちゃんとした日本語で：「気安く触るな。俺はヒットマンだからな。」」

リボーンが椿の言葉をさえぎりながら、レオンを銃に変形させていった。

「リボーン君、人が喋っているときに喋るのはよくないよ。」

「すまねえな、椿。」

二人がそんな会話をしていると、いきなり

パシイン

という音が響いた。

「何で僕？」

ハルにビンタされても微動だにしない椿が、頭の上に？マークを浮かべながら言った。

「赤ちゃんに何てこと教えてるんですか！？」

「このこは元々こんなことを覚えてたんだよ？僕は何もしていない。本人に聞いてみなよ。」

椿がリボーンを指差しながら言った。

「そんなわけ「あるぞ！」…へ？」

ハルがまぬけな顔をしていた。

「俺は本当のヒットマンだ。嘘じゃねえぞ？第一、椿は銃も何も持っていない、そんな奴が赤ん坊に銃を持たせると思うか？それに、この銃は、俺の相棒が変形したものだ。」

リボーンは淡々と語っていった。さして最後にレオンが元のカメレオンに戻った。

「そうなんですか？そうとは知らず、すみませんでした！」

ハルが深く頭を下げた。

「別にいいよ。たいして痛くなかったし…それより早く学校に行かないと…じゃあね。さ、ツナ君行こう！」

そして、二人は学校に急いだ。

学校についたころにはもうすでに十時…二人は完全に遅刻した。

「とりあえず入ろうか。」

椿がそういうと、ツナの手を掴んで門を飛び越えた。すると、学ランを来た一人の学生がやってきた。

「君達：何してるんだい？僕の学校で遅刻なんていい度胸だね。」

そう、雲雀恭弥だ。

「ツナ君先に行つて。ここは僕が引き受けるよ。」

笑顔でツナに言った。

「え、でも。」

ツナが躊躇しているとどこからカリボーンが出てきた。

「椿がこう言つてんだ。さっさと行け。」

そう言つて、ツナの背中を蹴った。

そしてツナは学校に入つていき、リボーンは消えた。

「君、僕をなめてるのかい？」

「いや、そういうことじゃなくて、あなたは僕に追いつけないと思つただけですよ。」

椿は自信げに言った。

「へえ、じゃあ君の速さを見せてもらおうか…。」

そういうと雲雀はトンファーを構え、椿に突っ込んでいった。それを椿は高速でかわし、雲雀の後ろに回った。そして両手を掴んで雲雀に言った。

「これは僕の勝ちで良いんですか？」

「そんなわけじゃないか。」

雲雀はそう言いながら、椿の手をほごうとした。しかし椿の手が離れることはなく、そのままトンファーを地面に落とした。

「僕の負けだよ、君：強いね。風紀委員に入りなよ。」

雲雀が不敵な笑みで言った。

「嫌で：「君に拒否権はないよ。」：嫌です。」

椿は雲雀の言葉を見殺してそう言った。

「入らないなら、どんな手を使ってでも入ってもらおうよ。」

また不敵な笑みで言った。

「：これは、入ると言わない限り解放してくれそうにないな。分かりました、入りますよ。」

椿はあっさり諦めた。

そして二人は応接室についた。

「僕が風紀委員に入る代わりに、校内での武器の所持を許してもらえませんか？」

「別にいいよ。」

椿は簡単に武器の所持を許してもらえたのでびっくりした。

「じゃあこの紙にサインして。」

雲雀が一枚の紙を渡した。
それに椿はサインした。

「これで君も風紀委員だね。校内ではこの腕章を制服の袖につけていてね。」

雲雀と同じ風紀委員の腕章を渡された。

「つけないとダメですか？」

「もちろんだよ。ついでに君は副委員長ね。」

当たり前のように雲雀が言った。

「あの、いきなり副委員長ですか？副委員長は草壁じゃなかったんですか？」

「別に副委員長が二人いてもいいだろう？あと、君の仕事は町内の見回りと書類の整理だからね。」

雲雀はそう言って、書類を出した。
ざっと見ても1万枚はあるだろう。

「これをどうしろと？」

「今すぐやりなよ。終わるまでは教室には行っちゃダメだよ。」

そして椿は、目にも止まらぬ速さで、1分かけて終わらせた。

「ハア、ハア」

さすがに一分間素早く動き続けて椿も疲れていた。

「君、やっぱりすごいね。もう教室に行っていよいよ。」

椿は腕章をつけて、教室に向かった。

ガラガラ

「遅いぞ飛…すみません風紀委員さん！」

椿がやつれて教室に入った瞬間、教師の視界には風紀委員の腕章が入り、とっさに土下座していた。

「風紀委員って本当にすごいんだな…。」

そう椿は言った。

「今テストを返していたのですが…飛川さんのテストはこれです。」
教師に渡されたテストは96点だった。

「ありがとう。」

そう言って椿は席についた。

そして、授業が全て終わり、帰宅時間になった。

標的11 ハル来襲!?!椿が風紀委員に入る。(後書き)

やっと書き終わりました。

なんだかんだで風紀委員に入るしか武器の所持は許可してもらえなさそうなので、こういう結果になりました。

これから間違いや感想お待ちしております。

標的12 問7

ツナと山本と椿と楓が一緒に帰っていたとき。

「ツナ、一緒に宿題やらね？一人より二人の方がはえーだろう？」

「するする！」

二人が会話している中、椿が言った。

「宿題って何のこと？」

「そっか、椿君は遅れてきたから知らないんだよね。今日のテストの成績が悪かったから、課題として出された宿題があるんだ。全問正解しなかったら落第なんだよ…。」

ツナが説明し終わったところ…

「宿題ならうちでやれ。」

どこからか声がした。

二人が声の主を探していると、近くの家の植木からリボーンが出てきた。

「よう！」

「チャオッス！」

「何でお前が俺たちの宿題の場所決めてんだよ！」

ツナが慌てて言った。

「別にいいんじゃないの？ツナ君の家広いじゃん。」

楓は笑顔で言った。

「そうだぞ。あと、ここにいる四人は来いよ？獄寺も呼んである。」

リボーンが話している中椿が言いづらそうに言った。

「ごめん…僕今日は風紀委員の仕事でもう一回学校に行かないといけないから、宿題には参加できないな…。」

「そうなんだ…それじゃあしょうがないよね。バイバイ。」

そして椿は残念そうに帰っていった。

そして、沢田家に着替えた来た獄寺と山本と楓が来た。

「「「おじゃまします！」」」

そういつて三人は二階へ上がった。

「いらっしゃい。」

ツナは座って待っていた。

「さあ、早速始めましょうか！」

楓ははりきって座った。

「すみませーん。」

下から誰かの声がした。

「誰だろう？俺ちょっと行ってくるよ。」

ツナが下に降りてくると、玄関にハルがいた。

「何で君がいるのー！」

ツナがびっくりして聞いた。

「朝のお詫びをしようと思ったんです。リボン君がここに入っていくのを見かけまして、椿さんもいるかと思って…。」

ハルが少し頬を赤くして言った。

「残念ながら椿君はいないけどリボンならいるよ。上がってく？」

「はい…。おじゃまします。」

ハルは少し残念そうに、二階に上がって行った。

ツナの部屋に入るとすぐにみんなから「その子は誰？」と聞かれた。

「この子は三浦ハルって人だよ。」

「はじめまして！」

ハルが深く頭を下げた。

「さあ、ハルちゃんも加わったことだし、早く問題を解いちゃいましょうよ。」

ツナと山本は頑張って問題を解いていた。

山本は問7以外全て出来、ツナは獄寺に教えてもらいながら何とか問7以外全てを解いた。

ハルはリボーンと話して、楓は二人の勉強両方を見ていた。

「二人とも問7だけは出来てないのね。これどうするのかしら？ 一辺11，5cmの正方形の紙100枚を3mの高さから同時に落としたりするとき、全ての紙が寸分変わらず重なることを証明せよ。この紙を糊とかで引っ付けるしか方法が思いつかないんだけど…。」

楓がそんなことを呟いた。

「正解だ。楓、すごいな。」

リボーンが言った。

「え？ 嘘！」

「間違いじゃねえ。それくらいしか方法はねえんだ。」

「楓ちゃんすごい！」

「サンキューな！楓！」

二人が関心していた。

「じゃあこれで終わりね。そろそろ帰るわ。」

時計は5時をさしていた。

「じゃあ俺も帰ります。さようなら十代目！」

「じゃあな。ツナ。」

「さようなら。」

四人は帰っていった。

標的12 問7（後書き）

ハルはツナ君ではなく椿に恋をしてしまいました。
これからの話に支障がないか心配です…。
これからも間違いや感想等お待ちしております。

標的13 校庭爆破！雲雀と対決

次の日の学校。

いつも通りにツナと椿は一緒に登校していたが、椿はしっかりと腕章をつけ、腰には刀を携えていた。

「何で刀を持ってるの？」

「雲雀さんからの許可があったからだよ。」

当たり前のように椿が言った。

「いやいや答えになってないよ。」

「そうだね。理由はいつでも皆を守るようにだよ。」

笑顔で椿が言った。

「別に刀なんか持たなくても…。」

そんな会話をしていると目の前に犬が現れた。

「うわぁ！」

びっくりしていたツナの前に子供が現れ、超能力のようなものを使って犬をどこかへ飛ばした。

「すごいなあ。」

そんなことを行っている間に子供はどこかへ行ってしまった。

「なんだったんだろう？」

そんなことを言いながら歩いていると目の前に男の人が現れた。

「沢田ツナ！ボクシング部に入れ！」

「は？って、あなた誰ですか？」

ツナが聞いた。

「並盛中学校ボクシング部主将、笹川良平だ！」

「はあ、そうですか。あと、俺はボクシング部には入りません。」

ツナはそう言って学校に急ごうとした。

すると良平に腕を掴まれた。

「それなら放課後見学だけでも来い。きっと入りたくなるはずだ！」

そう言い残して良平が学校へ走って行った。

「とりあえず見学だけでも行っておきなよ。」

椿にそういわれ仕方なく見学だけは行くことにした。

そして8時ごろ学校では：校門で雲雀が待ち構えていた。

「椿、今日は一日仕事に付き合ってもらうよ。」

「はあ、ツナ君先生に今日は行けないって言うておいてね。」

そういつて椿は雲雀について行った。

そして応接室

そこには部屋中山のように詰まれた書類があった。

「これをどうしろと？」

「片付けるんだよ。」

「放課後の会議はどうするんですか？」

「草壁に任せたよ。僕らはこれをかたづけようか。」

そういうと雲雀はいすに座って書類を片付けていった。

書類を始めて6時間昼食を食べつつ、何とか書類が終わった。
その瞬間！

ドカァーーン

謎の爆発音がした。

「行くよ、椿。」

「分かりました。」

二人が校庭に向かった。

するとそこには巨大なクレーターのようなのが出来ていた。

そしてその近くにツナや獄寺、良平や山本、京子やハルが立っていた。

そしてクレーターの真ん中には今朝の子供がいた。

「ツナ君たちは一体何を「これは君達がしたのかい？」」

椿の言葉を遮って雲雀が言った。

「それは…。「そうだぞ！」」

どこからカリボーンが現れた。

「へえ、なら僕が咬み殺してあげるよ。」

そういつて雲雀はトンファーを構えた。

「なんだデメエ！10代目になんかする気なら俺が許さねえぞ！」

獄寺はボムを構えて、雲雀に突っ込んで行くも、トンファーで一撃でやられた。

「おい！雲雀！やめろって。」

山本がそんなことを言っていると雲雀が突っ込んでいった。
そして山本はトンファーでの攻撃は避けたが蹴りでやられた。

「雲雀！わがボクシング部の新しい部員に何かする気なら許さんぞ
！」

「俺ボクシング部に入った覚えはないんですけどー！」

ツナがそんなことを言っている間に良平は雲雀に攻撃していたが、
その後雲雀の反撃に遭い倒れた。

「みんな…。」

「ツナ。死ぬ気で戦え。」

リボーンはそう言ったあとツナに死ぬ気弾を撃った。

「リ、ボーン！死ぬ気で雲雀を倒す！」

ツナが死ぬ気状態になり、雲雀に突撃した。

ツナが連続でパンチを繰り出し、雲雀はそれを何とか避けていた。
そして五分が経った。

「はあはあ。」

「雰囲気が変わった。」

雲雀はその瞬間にトンファーでツナを殴った。

「これで終わりかい？　つまらない。君達でこの校庭を直しておいてね。」

雲雀はそういい残して校舎に帰った。
楓は皆に駆け寄り、応急処置をした。

「椿、おめえ何で手を出さなかった？」

リボーンが聞いた。

「皆にこういった経験が必要かと思ったんだよ。」

「分かってるじゃねえか。さっさと起きろ！　ダメツナ。」

そういつてリボーンはツナの顔を蹴った。

「いてっ！　リボーン何するんだよ。」

ツナは起きた。

「さっさと校庭を直すぞ。」

「えーーーーー！！！！」

そのあとツナは予備の制服に着替え、校庭の修復を頑張った。

標的13 校庭爆破! 雲雀と対決(後書き)

お詫びをします。

この話を書く前に書いてあった 標的13 「風紀委員長の退屈しのぎ」がなくなる を読んだ方、その話は特に書く意味が無かったことに気づき、作者が話を変更しました。

読んでいなかった方は気にしないでください。

これから間違いや感想等お待ちしております。

標的14 ディーノ&シヤマル登場！

イーピンの筒子時限超爆で出来たクレーター？を椿の協力もあり、3時まで直したツナは家に帰ることが出来た。
ツナは椿と楓と一緒に帰っていた。

「はぁ、疲れた…。ほんと今日は散々だったよ。イーピンの筒子時限超爆であんなことになるし、ボクシング部に入れられそうになるし、雲雀さんとあんなことがあるし…。」

言い終わった後にツナがため息をついた。

「ツナ君、家の前に大勢のお客さんがいるよ？」

椿が指差した先には黒い服を着た大勢の人間がいた。
そしてツナに気づき、道を開けた。

「お帰りなさいませ、沢田綱吉殿。」

ツナたちはその中を急ぎ足で歩き、家に入った。

「「おじゃまします。」」

「いらっしやい。ツー君、お客様がいらっしやってるわよ？」

三人は二階に上がった。

そしてツナは自分の部屋の扉を開けた。

「リボーン！また何やったんだ？うわ！」

部屋の中にはリボーンと黒服の男二人、謎の美青年と謎のおっさんがいた。

「待ってたぞ！ツナ。」

リボーンが言った。

「なんだ？こいつがボンゴレ十代目か。さえねえ顔してんなあ。俺はシャルだ。」

そういつてシャルはツナの前まで歩いてきた。
そして視線を楓へと移した。

「その可愛いお嬢さん、どっかで俺と、お茶しない？」

そういつて楓のところへ走ってきたが楓は逃げ、シャルは追いかけた。

そして二人は家の外に出て、鬼ごっこが始まった。

「まああいつはああなんだ、気にしねえでくれ。」

リボーンが言った。

「そうなんだ…で、その人は誰だよ！」

ツナは豪華ないすに座った美青年を指差した。

「ようボンゴレの大将！はるばるイタリアから遊びに来てやったぜ。俺は、キャバッローネファミリー十代目ボス、ディーノだ。」

ディーノが豪華ないすを回転させていった。

「キャバツローネって、マフィア!？」

ツナがびっくりして言った。

「そうみたいだね。」

ディーノはツナを睨んだ。

「くははっ、こりゃダメだな!」

ディーノは立ち上がってからツナに近づいていった。

「オーラがねえ。面構えが悪い。覇気もねえし、期待感もねえ。…
「足も短けえ。金もないし、力もない。」…幸も薄そうだ。ボスの
資質、0だな。」

ディーノとリボーンが言い終わると、周りの黒服の男達が笑った。

「ディーノさんはリボーン君とはどういった関係なんですか？」

椿が聞いた。

「リボーンは俺の元家庭教師だ。」

「ディーノさん!僕はマフィアのボスになる気はないんですけど…。
出来ればリボーンを連れて帰ってください!」

「ダメだ。ボンゴレ九代目からの命令だし簡単には投げ出せねえだろうからな。それに、リボーンがいればお前もきつといいボスになれる！」

ディーノが立ち上がって言った。

「あなたの言うことは正しいと思いますが、リボーン君が育てた結果あなたがどれだけの強さなのか確かめたいんですけど。」

「いいぜ！1分で終わらせてやる！」

自信満々にディーノが言った。

「お手柔らかに。」

二人は近くの公園で戦うことになった。

そこには、ツナとリボーン、ディーノの部下達も見に来ていた。

「ルールは相手に参ったと言わせたら勝ちだ。じゃあ始めろ。」

リボーンの合図で戦いが始まった。

最初はディーノが鞭で攻撃し。椿は避け続けた。

「なんだ？お前の強さはこんなもんだったのか。俺が戦うまでもなかったな。」

「それはどうでしょう？」

椿は刀を抜き、鞘で鞭を止め、ディーノを刀で攻撃した。

それをディーノは避けれず、ディーノは宙に舞った。

「なん…だと…。」

椿は落ちてくるディーノを受け止めて言った。

「参ったしますか？」

「ああ、俺の負けだ。」

ディーノは負けを認めた。

「ディーノ。今日はうちに泊まっていけ。ママンの許可はとってる。」

リボーンが言った。

「ああ。部下はどうする？」

「部下には帰ってもらう。」

「分かった。」

その時部下達が騒がしくなった。

「リボーンさんのところなら安心だな。」

そういつて部下達は帰っていった。

「さようなら。ディーノさん、あなたは強いんですね。」

椿が言った。

「お前に言われても嬉しくねえぞ。それにお前本気出したなかったんだろう？」

ディーノは椿が本気を出していないことに気づいていた。

「僕が本気を出したらあなた気絶してますよ？それでも毎日鍛えますから。じゃあそろそろ僕も帰ります。」

そういつて椿は帰っていった。

「ツナ。俺たちも帰るぞ。」

こうして、ツナたちも家に帰った。

ちなみに楓はうまくシャルから逃げ切ったのだった。

標的14 ディーノ&シヤマル登場！（後書き）

今まで、「これからも間違いや感想等お待ちしております。」と書いていたんですが、結構原作をいじっているので、間違いを指摘できるわけではないですね…。

キャラクターの性格が間違っていたらご指摘お願いします。感想等もお待ちしております。

標的15 ディーノとの別れとランボの保育係

ディーノが来てから一ヶ月ほど経ち、12月に入り外も寒くなったころ。

今日もツナと椿は一緒に登校しようとしていた。

その時、沢田家の前にキャバッローネファミリーの部下達がやってきた。

「ボンジョルノ。ボンゴレ十代目。ボスが一ヶ月も帰って来ないもんで、様子を見に来たんです。」

部下の一人、ロマーリオが言った。

「どうも。ディーノさんでしたら：「なんだ？お前ら。」」

ディーノが家から出てきた。

「迎えなんて頼んでねえぞ？」

「誰も迎えに来てなんかねえ。ボスがいない間にたまった書類を渡しに来ただけだ。」

ロマーリオがそう言うのと、後ろから書類を持った部下がかなりの人数来た。

「げ、お前らでやっといってくれよ。」

「そうはいかねえ。これもボスの仕事だ。」

ロマーリオが笑いながらそう言うと、部下達は帰っていった。

「おはようございます！十代目！よう、椿！」

獄寺が歩いてきた。

「獄寺君？」

ツナが言った。

「今日はまたなんでここに来たの？」

椿がツナに続けて聞いた。

「ちょっとその辺りをぶらぶらしてたらここに着いたんだ。」

笑顔で獄寺が言った。

「椿さん！」

ハルが走ってきた。

「朝ぶらぶらしてたらここまで来ちゃいました！」

ハルも笑顔で言った。

「おはよーっす！何やってんだ？おめえら！」

山本が歩いてきた。

「椿くーん！忘れものー！」

楓が走ってきた。

「はい。お弁当忘れてたよ？」

楓が椿に弁当を渡した。

「何で楓さんが椿さんのお弁当を持ってくるんですか？」

頬を膨れさせながらハルが言った。

「学校に行こうとしてたら椿君のお母さんに渡されたのよ。」

楓はあわてて嘘をついた。

「椿は朝からモテモテだな。ようハリケーンボム。会うのは初めてだな。」

ディーノが獄寺に向かって言った。

「お前は、跳ね馬ディーノ！」

「早く学校に行かないと遅れるよ？」

二人の仲が悪いことを察したツナが言った。
そして六人は歩いていった。

六人が歩いている途中、後ろから車が走ってきて、ロープでツナをくくりつけ、そのまま走り去っていった。

「十代目！」

「ツナ！」

獄寺と山本が走っていきこうとすると、椿が後ろから刀を車に向かって投げた。

その刀の先端は見事にタイヤに突き刺さり、車は回りながら停止した。

「ふう、危ない危ない。」

「椿さんやっぱりカッコいいです！」

ハルが目を輝かせて椿に抱きつこうとした。

「早くツナ君を助けよう！」

椿は見事にハルをかわし、ツナの方へ走っていった。

そしてロープを解き、刀をタイヤから抜いて鞘に収めた。

「椿君ありがとう。」

ツナはそう言った。

「僕は当然のことをしただけだよ。それより運転手さん、出てきて

ください。」

椿がそういうと車からはロマーリオが出てきた。

「すまねえ。ボスからの命令でな。お前達の絆を試そうとしていたんだ。」

「そうなんですか…。」

ツナは安心して言った。

「俺たちはボスを連れて帰るよ。お前達の絆も見れたことだしな。」

「ならいいや。早く行こうツナ君。」

こうして二人は歩いていった。

そして放課後

椿は一人で応接室で風紀委員の仕事をしていた。

ドカーン

校舎裏で小さな爆発音がした。

「なんだろう？」

椿は校舎裏に急いだ。

そして校舎裏

そこには壁に激突したランボ、そしてグローブを持った山本、変な格好のビアンキ、空から吊られたタイヤに座っているリボン、ただ立っているだけのツナ、獄寺、良平、楓がいた。

「何やってんの…。」

あきれて椿が言った。

「椿、お前もランボを笑わせてみる。」

「そんなの簡単だよ。」

そういうとランボの前にしゃがみ、飴玉を渡した。

「これあげるからもう泣かないでね。」

そう椿が言うとランボは泣き止み飴玉を口に含んだ。
そしてしばらくしてから笑った。

「はい、椿失格。」

ビアンキがストップウォッチをとめて言った。

「何で？」

ツナが聞いた。

「ランボが笑ったのは3分と1秒経ってから、三分以内に笑わせないと失格なのよ。」

ビアンキが言った。

「みんなもうこんなことしないでね。雲雀さんが来たらまずいから。」

「どうしてだい？」

ツナたちの後ろに雲雀がいた。

「雲雀さん!？」

「ツナ君たちは帰っていいよ。雲雀さん、僕があなたと戦うってことで許してくれませんか？」

椿が刀に手を添えて言った。

「いいよ。じゃあ始めようか。」

雲雀が言った直後にすさまじい戦いが始まった。
そしてツナたちは走って帰っていった。

標的15 ディーノとの別れとランボの保育係（後書き）

なんだかんだで、小説の季節が冬になりました。
もうすぐ黒曜：かな？

とりあえず頑張ります！

性格の違いや感想等、お待ちしております！

標的16 いきなり冬休み最終日！フウ太が来る！

ランボの保育係が決まった一週間後に冬休みに入った。

そして椿は、冬休みに入ってからずっと風紀委員の仕事の書類仕事や町の見回りばかりだった

そして今は冬休みの終わる一日前、偶然にも風紀委員の仕事がなかった椿は、ツナの家に向かった。

「ツナ君冬休みの宿題終わってないだろうなあ。」

そんなことを言いながらツナの家へ向かう途中、ガラの悪い男達にひとりの男の子がつかまりそうになっていた。

「あなた達、何やってるんですか。」

男達に向かって言った。

「ああ？何だデメエ！何か文句でもあんのかあ？」

男の一人が言った。

「大ありですね。この町の風紀が乱れる。」

「なんだとお！やっちまえ！」

男たちが殴りかかってきた。

椿が殴りかかってくる男達一人一人の腹に、パンチを一発ずつしただけで男達は全員倒れた。

そして、男の子の前に行った。

「大丈夫？」

「うん！ありがとう。えっと…。」

男の子が何か戸惑っていた。

「僕は飛川 椿だよ。君は？」

「僕、フウ太です。」

フウ太は丁寧に答えた。

「君はここで何してるの？」

「沢田綱吉さんの家を探しているんだ。」

「僕は今そこに行く途中だったんだ。一緒に行こうか。」

「うん！」

そして二人は一緒に沢田家へと向かった。

そして沢田家前

ピンポーン

「はい！って、椿君！？」

ツナが出てきた。

「こんにちは、ツナ君。宿題が終わってないだろうと思って来たんだよ？あとこの子も。」

「こんにちは！ツナ兄！」

フウ太が目を輝かせて挨拶した。

「この子誰ー！？」

「そんなのことより早く上がらせろ！」

リボーンが家から出てきた。

「う、うん。」

そして四人は家の二階へと上がっていった。

「で、この子誰？」

ツナが改めて聞いた。

「こいつはフウ太、別名“ランキングフウ太”って言って、ランキングを作らせたら右に出るものはいないという情報屋だ。」

「また変なの来ちゃった。」

ツナがあきれて言った。

「フウ太が作るランキングの的中率は100%だぞ。つまり、このランキングブックを手に入れて、戦略を立てれば、100戦100勝、世界を取るのも簡単って事だ。だから、こいつは狙われてるんだ。それに行く宛てもないからここに泊めてやれ。ママンの許可はとってあるぞ。」

リボーンが言い終わった後、フウ太は潤んだ瞳でツナを見ていた。

「わ、分かったよ。」

「さすがツナ君、優しいね。せっかくだから僕も占ってよ。僕はマフィアの中での強さは何位？」

「今占ってみるよ。」

フウ太がそう言うと、フウ太の回りが無重力になった。

「どうなってんのこれー!？」

宙に浮いたツナがびっくりして言った。

「フウ太のランキングムードだ。フウ太が何かランキングするときには回りが無重力になるんだ。」

宇宙服のコスプレをしたりリボーンが言った。

「椿兄の強さはマフィア86202人中、5位。椿兄の刀、通称“

「獅子風」の強度は、名刀1362本中ぶっちぎりの1位。すごいね。」

「へえ、この刀“獅子風”って名前だったんだ。」

椿が獅子風を手で持って言った。

そして、雨が降ってきて、獄寺と山本と楓とハルが部屋に入ってきた。

「十代目！何で教えてくれなかったんですか！ランキング小僧が来てるって。」

「いやー、偶然ツナン家の前で会ったんだよ。」

「こんにちはー。」

「こんにちは！椿さん！」

「みんな！」

ツナはこの四人が来たことに驚いた。

そして、獄寺がフウ太の前に来た。

「一度聞いてみたいことがあったんです。十代目の右腕にふさわしいランキングで、俺は何位なのか！出来るか、ランキング小僧！」

「簡単だよ。隼人兄の順位は……圏外。」

「なー、な、何ー！」

獄寺が倒れそうになった。

「ランキング圏外なんてあるの？」

ツナが聞いた。

「そうじゃないよ。大気圏外だよ？」

「「地球の外…。」」

ツナと獄寺の声がハモった。

「ちょっとそれおかしくない？そのランキングちょうど雨が降ったところから。」

椿が言った。

「雨！」

フウ太が倒れ、無重力状態ではなくなった。

「どうしたんだ？フウ太。」

「だるい、僕雨に弱いんだ。ランキングがでたらめになるし。」

フウ太がベッドに寄りかかって言った。

「ってことは、先のランキングはデタラメなのか？」

獄寺が言った。

「うん。」

そしてハルと楓がふと、窓の外を見た。

「みんな、外に傘の大群が…。」

「デ、デストロイですー。」

そして獄寺が、窓の外をひっそりと見て、ツナたちと、部屋の中央に集まった。

「奴ら、トッドファミリーですね。今の男、見覚えがあります。」

「じゃあ、あいつらがフウ太を狙って来たのか。」

ツナがフウ太を見て言った。

「籠城しますか？」

獄寺が言ったところには雨はやんでいた。

「それはちょっと。」

「大丈夫ですよ。こっちには椿もいるし、野球馬鹿も例のバットをちゃんと持ってます。」

「例のバットって？」

椿が山本に聞いた。

「これだ。」

山本が出したのはただのバット、しかしそれを山本が思いっきり振ると刀に変形した。

「よし、籠城しようか。」

そういつて椿と山本が窓から飛び降り、リボーンによって死ぬ気化したツナも殴りこんでいった。

獄寺はボムで手助けをしていた。

そして5分後全て倒し終わった。

そしてフウ太たちも外に出て行った。

「初めて僕のランキングが外れた。僕まだここにいてもいい？」

「え、あ、うん。」

「やったー！」

フウ太が喜んでいた。

そこをどこかの中学校の制服を着た青年が通り過ぎていった。

「それじゃあ、こいつらを雲雀さんに渡すよ。」

椿がそう言っ、電話すると、5分でトラックが3台来た。

その上に男達を乗せて、雲雀と話した。

「こいつらが並森の風紀を乱した奴らかい？」

「そうです。じゃあ後は、よろしくお願いします。」

椿がそう言うと、雲雀は一台のトラックの助手席に乗って。どこかへ行った。

「じゃあ私達は帰るね。」

そして、椿と楓は帰っていった。

「あ、ハルも帰ります。皆さん、さようなら！」

そういつて、椿たちを追いかけていった。

「俺たちも帰ります。」

「じゃあな！ツナ！」

「うん、バイバイ。」

獄寺と山本も帰り、ツナは始業式の用意をした。

そして椿は

「あ、ツナ君に宿題教えるの忘れてた！」

「大丈夫だよ。ツナ君もちゃんとやってるって、きっと。」

二人はそんな会話をしていた。

「待ってくださいーい！」

後ろからハルが追いかけていたのによろやく気づき、途中まで一緒に帰った。

そしてまた別の場所では

「そうですか、ランキングフウ太を見つけましたか。クフフフ。」

そんな会話をしていた。

標的16 いきなり冬休み最終日！フウ太が来る！（後書き）

次回からはおそらく黒曜編です。

小説を始めて5日間でここまで来ました。

土曜日と日曜日でかなり更新をしたからなんですけど、とても楽しみでした。

これから頑張ります！

性格の間違いや感想等お待ちしております！

登場人物紹介2 黒曜編オリキャラプロフィール

如月 俊太
きげいちげい しゅんた

性別 男性

年齢 14歳

誕生日 2月27日

身長 151cm

体重 46kg

性格 元気が少し過激な少年

容姿 目は黒で少し鋭い。

顔は美青年。

髪は黒で少し長め。

北神 蓮
きたがみ れん

性別 男性

年齢 14歳

誕生日 1月29日

身長 167cm

体重 50kg

性格 物静かな少年

容姿 目は赤で鋭い。

顔は普通。

髪は白で俊太より少し長い。

二人とも六道骸の脱獄仲間。

二人とも強さは、犬と千種より少し上。
骸からの信頼も厚く、骸とテレパシーが出来る。

標的17 黒曜襲来!

始業式の日

椿は風紀委員の招集があり、いつもより1時間早く登校した。

「おはようございます。雲雀さんに皆さん。」

学校に着くと風紀委員と雲雀がすでにいた。

「遅いよ。小学校で10分前行動って習わなかったの?」

雲雀に冷たい目で言われた。

「すみません。で、何で招集がかかったんですか?」

「最近、並中生が次々に襲われているんです。なので、風紀委員も見張りなどの対策をすることになりました。」

副委員長の一人、草壁が言った。

「君と僕は別だよ。」

雲雀が椿に言った。

「僕らは何をするんですか?」

「敵を見つけ出して、咬み殺す。」

雲雀はトンファーを構えていた。

「まずは情報収集だよ。早く行こうか。」

雲雀は歩いていった。

そして一時間後、椿は敵が誰なのかと敵ののアジトの有力な情報を手に入れて並中に戻っていた。

「椿、何か見つかったかい？」

雲雀も並中に戻ってきた。

「はい、敵が黒曜の生徒だということ、そして敵のアジトが黒曜ヘルシーランドだということが分かりました。」

「そうかい。じゃあ僕一人でそこに行く。君は笹川良平のお見舞いにでも行きなよ。」

雲雀はそう言って、黒曜ヘルシーランドへ向かった。

「早く笹川先輩のところへ行こう！」

椿は並盛病院に急いだ。

そして並盛病院

椿が病院に入ろうとするとツナが出てきた。。

「はあはあ、ツナ君笹川先輩は？」

「ああ、お兄さんなら大丈夫。それより、並中生は喧嘩が強い順番に狙われてるんだよ。次に狙われるのは4位の獄寺君なんだ！」

「え！？そうだったの！なら早く行こうよ！」

そしてツナと椿は並中に向かった。

ツナと椿が並中に向かう途中、商店街に獄寺が歩いていた。

「あ、獄寺君！」

「十代目！椿！」

獄寺は駆け寄ってきた。

「どうしたんですか？こんなところに。」

「それは…」

ツナが事情を話そうとしていると、後ろから誰か歩いてきた。

「並盛中学1－A、獄寺隼人と…」

「並盛中学1－A、飛川椿！」

黒曜の制服を着た二人組みだった。

「デメエ誰だ？」

獄寺が眼鏡をかけた黒曜生に言った。

「黒曜中一年、柿本千種。早く済ませよう。」

そういうといきなりヨーヨーを投げてきた。

「獄寺君！」

椿が獄寺を助けようとする、椿の前には、もう一人の黒曜生が立っていた。

「俺は如月俊太。飛川椿！俺と勝負だ！」

「何だよ君！」

そういつて椿は獅子風を抜いた。

「お前、それどこで手に入れた！」

俊太はそう言うと、峰の部分も刃になっている全刃刀ぜんばとうと呼ばれるも

のを抜いた。

「これは、とある人に貰った！」

椿と俊太は戦いながら喋っていた。

「へえ、まあいい。獅子風はこの世に一本でいいんだ！」

「一本？どういうことだ！」

びっくりした顔で椿が聞いた。

その顔には多少ながら汗が流れている。

「獅子風って言うのはなあ、日本のとある刀職人が代々継承する前に作る最後の一本なんだ。今11代目が継承して10年くらいあたりだ。だから獅子風はこの世に十本存在している。お前の持っているものは、十代目が作った刃無刀。はなしとう俺のものは、二代目が作った全刃刀だ！」

俊太は淡々と語った。

「これが何故獅子風だと分かった？」

「目印があるんだよ。刀の柄頭に獅子の絵が描いてあるんだ。」

「へえ。」

椿はそう言うと、神速で俊太の後ろに回り、背中を攻撃した。そして、俊太は店に吹き飛び、血だらけになって倒れていた。そして、獄寺も何とか千種を倒していた。

「はぁ、疲れた。」

そういつて椿は道路に寝転んだ。

そんなことをしていると、ツナは獄寺に駆け寄った。

「獄寺君すごいよ！あんなのを倒しちゃうなんて！」

「恐縮っす！」

そんな話をしていると、千種が起き上がっていて、ツナに、ヨーヨーに仕込んだトゲをとばした。

そして獄寺がツナの前に立った。

パンッ パンッ パンッ

3発の銃声が響いた。

獄寺にトゲは刺さっておらず、銃声がした方向には楓が立っていた。

「何とかセーフだね。間に合ってよかった。」

「え！？楓ちゃんなんでここに？それに、そんな物騒なもの持っているの！？」

ツナがびっくりしていた。

「え？これは、親戚のおじさんに護身用に貰ったの。」

これはもちろん嘘で、椿が獅子風を貰ったところに、神様に貰ったものだ。

そして、楓は銃に銃弾を一発入れ、千種に向けて発砲した。

「んなー！？な、何してるの！？」

ツナがびっくりして、楓に叫んだ。

「さっきのは麻酔弾。眠らせただけで殺してはいないよ。」

そうやって千種のほうを見ると、血だらけの俊太が千種を抱えていた。

「今日はこれまでにしておく。覚えとけよ！」

そう言って、走ってどこかに行った。

「あー！俺たちどうしたらいいんだよ！」

ツナが頭を抱えて言った。

「骸たちを倒すしかねえな。」

どこからかりボーンが出てきて、四人が寄ってきた。

「お前宛てにボンゴレ九代目からの手紙があるぞ、ツナ。」

そう言って手紙を読み上げていった。

「親愛なるボンゴレ十代目、君の成長ぶりはリボーンから聞いているよ。さて、君も次のステップを踏み出すときが来たようだ。君に指令を言い渡す。六道骸以下、脱獄囚を速やかに捕獲、捕らえられ

た人質を救出せよ。幸運を祈る。」

「ちよっ、何それ。」

「追伸、断った場合は裏切り者とみなし、ぶっ殺す。」ちよっと待ったー!」

「俺には関係ないよ。」

ツナが言った。

「だけど、周りはそうおもってねえみたいだぞ。」

「ツナ君、僕頑張るよ!」

大して怪我をしていない椿が言った。

「私も行くよ!」

買えでも銃をしまってた。

「自分も行きます!」

楓に手当てをされた獄寺が言った。

「俺も行くぜ!」

いつの間にかいた山本が言った。

「敵地に取り込む面子は揃ったな。奴らのアジトも分かっている。」

多分、人質もそこだ。」

リボーンが言った。

「人質って？」

「お前らのよく知ってる奴だ。敵のアジトには、明日乗り込む。心と体の準備をしておけよ。」

リボーンが言い終わると全員帰っていった。

標的17 黒曜襲来！（後書き）

黒曜編に入りました。

実は獅子風は十本ありました。

それぞれ、これから出していくつもりなので、楽しみ？に待っていてください。

感想等お待ちしております！

標的18 次々と来る黒曜生！

次の日の沢田家の前

椿と楓、獄寺と山本がツナが出てくるのを待っていた。

「おはよう、みんな。」

ツナが出てきた。

「よし、揃ったな。骸退治に出発だ。」

こうして、一行は黒曜ヘルシーランドへ向かった。

そして黒曜ヘルシーランド

「俺、ここに昔来たことある！」

ツナが言った。

「来たことあるなら、お前が案内しろ。」

楓が門にあった鍵を、銃弾で壊した。

そして、中に入り、しばらく歩いていた。

「なんだこれ、動物の爪跡があるぞ。」

山本がしゃがんで言った。

すると、草むらから何かが出てきて、山本が立っていた地面に穴が開き、落ちていった。

そして、草むらから出てきた何かも、その中に入っていた。

五人は穴を覗き込んだ。

「生きてるかー。野球馬鹿。」

穴の中は昔の動植物園だった。

「山本、なんかいる！」

ツナが山本に言った。

「歓迎するよ山本武。柿ピー寝たままでさあ、命令ねえしちよー暇だったの。そこへ俺の獲物がいらっしやっただもんなあ。超ハッピー。」

犬が出てきた。

「上の人はお友達？待っててね。順番に相手するから。」

「あははっ、お前まるで犬みてえだなあ。モノマネか？」

山本は遊びだと思って笑っていた。

そうするといきなり襲ってきた。

山本は山本のバットを刀にして、対抗したが、あっさり折られた。

「山本君！これを使って！」

椿が獅子風を山本に投げた。

「ありがとな。」

山本はそれをキャッチした瞬間、こちらに突っ込んできた犬に、抜刀術を使って倒した。

そして、山本は、獄寺と椿に引き上げられた。

「山本君、いつ抜刀術なんて覚えたの？」

楓が山本に聞いた。

「抜刀術？なんだそれ。」

山本は知らないうちに抜刀術を使っていた。

「いや、別にいいよ。」

楓は、呆れた。

「小僧、悪い。バット折っちまった。」

山本が折れたバットをリボーンに差し出した。

「気にするな。スピアやるから。」

リボーンはどこからか山本のバットのスピアを出した。

「お、サンキュー！」

「この調子なら、簡単に骸ぶっ飛ばせそうですよ。十代目。」

「それは間違いだよ、獄寺君。」

椿が言った。

そしてリボーンが、一枚の写真をツナに渡した。

「椿の言うとおりだ。そいつが六道骸、用心してかからねえと、やられちまうぞ。」

「そうなんだ。あ、そうだ、そろそろお昼にしない？もうこんな時間だし。」

ツナの腕時計は午後12時を指していた。

「そうですね。」

獄寺がそう言うと、山本が、どこかにあった机の上に、弁当を広げた。

そうすると、弁当が次々に爆破し、ツナたちは机に隠れた。

「そこね！」

楓がガラクタの塊に発砲した。

「だっさい武器！」

ガラクタの煙が上がっている中に、一人の少女がいた。

「誰、あなた。」

楓が言った。

「私はM・M。あなた達を葬りに来たの。」

そう言うのと、クラリネットを吹いた。

そして、お茶が泡を立ててから爆発した。

「それがあなたの武器？」

そういつて楓は一発の銃弾を放った。

「きゃあ！」

クラリネットが弾かれたが、すぐに拾われた。

「それがどうしたのよ！」

M・Mがクラリネットを吹こうとすると、クラリネットがポイズンクッキングになっていた。

「その弾は、ビアンキさんの細胞を少し拝借して作った弾なの。当たったらポイズンクッキングになっちゃうのよ。」

「そん、な…。」

こうしてM・Mを倒した。

「うーしっしっし！強欲娘がやられるとは、実にいい気分だっ…。」

おじさんがいつの間にか倒れていた。

「え！？何が起こったの？」

「話を聞くのがめんどくさそうなんで倒したんだよ。」

椿が獅子風を抜いていた。

「せめて名前くらい聞こうよ…。」

そんな話をしている中謎の二人組みがやってきた。

「おい！飛川椿！この前の借りを返しに来たぞ！」

「俺は北神蓮よろしく。」

俊太と蓮が来た。

「僕一人で相手をしてあげるよ。」

そして椿は刀を構えた。

標的18 次々と来る黒曜生！（後書き）

今回はこれまでです。

オリキャラ二人が揃いました。

次回をお楽しみに！

感想等お待ちしております

標的19 獅子風の戦い！新たなる仲間！

椿と俊太と蓮はそれぞれ刀を構えていた。

「君：蓮：だっけ？君の刀も獅子風なの？」

椿が聞いた。

「うん、僕のは四代目の刀だよ。」

そういうと同時に、二人が同時に襲い掛かってきた。

椿は蓮の攻撃は避け、俊太の獅子風と刀を交えていた。

しかし、蓮の獅子風は変な動きをして、椿の横腹を斬った。

「いてっ！」

「今の動き：刀が伸びた？」

獄寺が言った。

「よく見抜いたね。これは四代目の作った伸縮刀。これに付いているワイヤーを調節して、刀をいくつかに分けて、攻撃範囲の長さを変える、こんな風にね。」

蓮が獅子風を一振りすると、獅子風が9つに別れて地面を切った。

「謎が分かれば簡単だ。」

そうやって椿は二人に向かって走っていった。

そして、襲い掛かってくる蓮の獅子風のワイヤーの部分をも自分の獅子風に巻きつけ、鞘で蓮の腹を攻撃した。

そして、後ろから攻撃してくる俊太の獅子風を自分の獅子風で止め、鞘で頭を叩いた。

そして、二人を倒した。

椿は皆のところに戻り、楓の手当てを受けて寝てしまった。

「やっぱりすごいね。って、あれは…フウ太！」

ツナが森の中にフウ太を見つけ走っていった。

「十代目！」

獄寺たちがツナを追いかけようとした。

「さすがボンゴレ、と言ったところか。」

鎖の付いた大きな鉄球を持った男が歩いて来た。

「誰だ！」

獄寺が男に言った。

「六道骸だ。」

そういうと同時に鎖付きの鉄球を山本に飛ばし、目を閉じた。

山本は確実に避けたはずだが、なぜかしっかり当たってしまった。

「これで分かっただろう。貴様らに生き残る道はない。希望は捨てろ。」

そして骸は、鉄球を高く投げた。

「暴蛇烈覇！」

そういつて、鉄球を前に飛ばし、また目を閉じた。

その玉は、乱気流を起こし、山本と、近くにいた獄寺を巻き込んで、二人に当たった。

「これで終わりか。」

骸が止めをさそうと、再び宙に鉄球を投げた。

すると、鉄球にたくさんの方がぶつかり、落ちる軌道がそれた。

「させないわ！」

楓が銃を構えていた。

「言ったはずだ。希望は捨てろと。」

「嫌よ！それにあなたはそんなに悪い人じゃない！今すぐこんなことはやめて！」

楓は半泣きになりながら言った。

「何を言っている。」

「あなたは相手に攻撃するとき、必ず目を閉じていたじゃない！相手が倒れるのを見たくないかのように。」

「黙れ！」

そういつて、動揺しながらも鉄球を宙に投げた。

「もうやめて！」

そういつて、楓は玉を骸の両腕に撃った。

「うっ…！」

骸は倒れこんだ。

そして、楓が近寄っていった。

「さっき撃ったのは麻痺弾よ。それに、あなたは悪い人じゃない。だからさっき動揺していたんでしょう？」

「お前…。完敗だ。さすが、ボンゴレファミリーだな。六道骸が警戒するのも頷ける。」

「えっ？」

「俺は影武者だ。」

楓がびっくりしている中、ツナが帰ってきた。

「みんな！って、六道骸！？」

「影武者よ。そういえば、あなた、名前は？」

「ランチアだ。あいつは、俺の全てを奪った男だ。」

ランチアが、何かを恨むような目で言った。

「どういうことだ！」

獄寺と山本が辛そうに起き上がって、ランチアのところに来た。

「なにがあつたか言え。」

リボーンに言わ、ランチアは全てを話した。

「ボンゴレ、お前なら出来るかもしれない！」

ランチアが立ち上がり、ツナに近づいてきた。

「頼む、あいつを…危ない！」

ランチアがツナを押し飛ばした。

そして、トゲが飛んできたが、全て空中で落ちた。

「ふう、危ない危ない。」

椿がいつの間にか起きて、獅子風を抜いていた。

「椿君！傷は大丈夫なの？」

「大丈夫とはいえないけど、仲間の危機に眠ってなんかいられないよ。」

椿はランチアを仲間と認めていた。

「全く、お前らは…。」

ランチアはそう言いながらも笑っていた。

「俺も骸を倒すのを手伝おう！」

そういつて黒曜の制服を脱いだ。

下には違う服を着ていて、なかなかのファッションセンスではあった。

「行こう。骸の所へ。」

ツナが立ち上がって言った。

「死ぬ気弾は一発もないんだぞ？」

「分かってる。でも、用済みになった瞬間仲間を倒そうとするような奴、許せないよ！」

何かを覚悟した目で言った

「十代目！眼鏡野郎は俺が倒します！」

「俺もやるぜ！ツナ！」

二人は笑顔で言った。

「獄寺君、山本！」

「僕もやるよ！この獅子風で。」

「私だって！」

楓と椿も笑顔で言った。

「椿君、楓ちゃん！」

「よし、行こう！骸を倒しに！」

そういつて、一行は黒曜ヘルシーランドと書かれた建物へ向かった。

標的19 獅子風の戦い！新たなる仲間！（後書き）

ランチアは倒れずに仲間になりました。

これから活躍するかは、謎です。

感想等お待ちしております！

標的20 骸と決戦！そして勝利？

建物内部

二回へと通じる階段はほとんどがなかった。そして、雲雀のケータイを拾っていた。

「ランチアさん。どこにあるんですか？」

「もう少し先だ。その一つしか階段は残っていない。骸はお前らが来るルートを一つに絞ったんだ。」

ランチアはそのまま歩いていた。

「ここだ。」

ランチアが急に止まり、ツナは鼻をぶつけてしまった。

「非常用のはしごだな。」

すると、ヨーヨーを持った少年がいた。そして、獄寺がえんまくボムを投げた。

「十代目！ここは俺に任せてください。」

「一人で俺たちを倒せるとでも思ったのか！」

えんまくの中に、千種だけではなく犬、俊太、蓮の影が見えた。

「ここは俺たちも残ったほうがよさそうだな。」

ランチアと、山本が獄寺の隣にいた。

「ボンゴレ！先に行け。」

「はい！」

ツナたちは、はしごを上って二階に着いた。

そして、隅々まで骸を探したが、どこにもいなかった。

「ツナ君！ここから二階にいけるよ！」

楓が階段を見つけた。

そして三階に上って扉を開けると、ソファに誰かが座っていた。

「またあえて光栄です。僕が骸です。」

そういつて、ソファから立ち上がった。

その頃、一階では激闘が繰り広げられていた。

「暴蛇烈覇！」

ランチアの攻撃で、一階のほとんどが崩れた。

「おいテメエ！俺たちまで殺す気か！」

「すまない。」

「まあいいじゃねえか！あいつらは瓦礫の下みたいだし。」

山本は能天気には笑っていた。

「野球馬鹿が。さっさと行くぞ！」

そうして、ツナたちの元へ急ごうとした。

「お？なんだあれ。」

山本が何かを指差した。

一方三階

「今の揺れ何！？」

「一階での戦いの音でしょ？」

すると、後ろからフウ太が、短い槍のようなもので、楓の腹を刺してきた。

「楓ちゃん！」

ツナが心配していると、フウ太は攻撃してきた。
そして椿がフウ太を気絶させた。

「何やってるんだよ！」

「ツナ君はフウ太君を苦しめたかったの？ああでもない、と、フウ

太君はずっと君を攻撃し続けていた。それに、フウ太君は骸に操られていたんだ。あいつにね！」

椿は珍しく怒って言った。

「そっか、ごめん。」

そして、骸が立ち上がった。

「僕が直接手を下すことになるとは…。」

そして、右目の数字が四に変わり、目に炎をともしてツナに攻撃してきた。

しかし、椿が獅子風でそれを止め、戦闘が始まった。

「なかなかやりますね。」

「そっちこそ。」

目にも止まらぬ戦いに、ツナはついていけなかった。

そして二人は止まった。

「目から死ぬ気の炎？」

「ほう、見えますか。これこそが第四の道、修羅道で授かった戦闘スキルです。僕の体には前世に、六つの冥界、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天界道の全てを回った記憶が刻まれていますね。六つの冥界から、六つの戦闘スキルを授かった。」

「それが本当なら、お前はとんでもねえ怪物になるな。」

リボーンが言った。

「君に言われたくありませんよ。呪われた赤ん坊、アルコバレーノ。さあ、次のスキルをお見せしましょう。」

骸がそういうと、目の数字が一に変わった。

そして、槍で地面を叩くと地面が割れ、樁たちが落ちていく幻覚が、ツナに見えた。

「ツナ君！」

樁はツナを叩いた。

そしてツナは正気に戻った。

「あれ？」

「君が見ていたのは幻覚だよ。」

「クフフフ、見破るとはやりますね。しかし次はどうでしょう？」

骸がそう言うのと、目の数字が三に変わった。

そして、ツナの周りに、蛇が落ちてきた。

「うわぁー！蛇だ！」

ツナがびっくりしていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「暴蛇烈覇！」

「え？」

鉄球が飛んできて、蛇を巻き込んで全て倒した。

「ボンゴレ、助けに来たぞ。」

「ランチアさん！」

「十代目！俺たちもいます！」

そこには、獄寺と山本、雲雀とランチアがいた。

「君、覚悟はいいかい？」

雲雀は返事も聞かずに骸に突っ込んで行った。

そして、骸は桜の幻覚を出したが、雲雀には効かなかった。

「おや？」

「甘かったな。シャマルから雲雀への薬は貫ってきたぜ。」

獄寺は袋を持って言った。

そして、雲雀が、骸をトンファーで倒した。

「や、やった！やったよみんな！」

ツナと雲雀の周りに全員が集まってきた。

標的20 骸と決戦！そして勝利？（後書き）

今日はこれで終わりです。

骸は倒されたように見えました。原作かアニメを知っている方は、この先の展開は知っているといます。感想等お待ちしております！

標的21 目覚めの瞬間！ツナの新たな力！

ツナたちは、勝利の余韻に浸っていた。

（あれ、この感じ…すごく…いやな感じがする…。）

ツナはそう思っていた。

「獄寺君、肩貸してくれない？」

楓が起き上がって言った。

「しょうがねえなあ。」

獄寺は楓に近づいていった。

「獄寺君！ いっちゃだめだ。」

ツナが言ったところには、楓が獄寺に槍を向けていた。

「何すんだよ！」

「あれ？ 私どうしたんだろう？」

（この違和感は…六道…骸。）

ツナはそんな違和感を感じていた。

「クフフフ、また会えましたね。地獄のそこから舞い戻ってきました

た。」

楓の右目には、六という数字があった。
そして倒れた。

「え？」

「俺、やりましょうか？」

「獄寺：君、骸！」

獄寺に骸が憑依した。

「おめえ、何をした！」

「この槍を刺して憑依したんです。」

そして、山本に向かって槍を投げた。

「いてっ！…クフフフ。」

そして、ランチア、雲雀にも槍を刺し、憑依した。

「四人同時に…。」

「違う、八人だよ。」

すると、3階に、千種、犬、俊太、蓮に憑依した骸が来た。

「骸が八人…。どうしようリボン！」

「俺は何もしてやれねえんだ。」

リボーンは言った。

「見捨てないでよりボーン！」

すると、リボーンがツナを蹴り飛ばした。

「いいか？ツナ。お前は誰よりもボンゴレ十代目なんだ。お前の気持ちを吐き出せばそれがボンゴレの答えだ！お前の気持ちはどうなんだ？ツナ。」

「勝ちたい…。骸に…勝ちたい…。こいつにだけは、絶対勝ちたいんだ！」

そのとき、レオンが繭になった。

「アルコバレーノ！何をした！」

「俺じゃねえ。レオンは俺の生徒に試練が訪れたときに繭になるんだ。」

「何…！」

そして、レオンが少しずつ膨らんでいった。

「いつまでも君たちの遊びに付き合ってもらえません！そろそろ終わりにしますよ！」

犬が突っ込んできたが椿はそれを止めた。
そして、レオンが手袋と弾を吐き出した。

「何だこれ？」

「さっさとその手袋をつけろ！」

リボーンに言われ手袋をつけた。

「この弾に賭けるしかねえ！」

そう言って、リボーンはツナにその弾を撃った。

そして、ツナの脳裏にいろんな人の小言が聞こえてきた。
そして、

「骸、お前を倒さなければ、死んでも死に切れねえ！」

ツナの額に炎が灯り、手袋がグローブに変化した。

「ツナ君！君は骸本体を倒して！僕はみんなの相手をする！」

そして、椿は獅子風を抜いた。

「頼んだぞ。椿！」

「そんなことができると思っているのですか？」

「相手は八人ですよ？」

「君に勝ち目など…」「」「」「」「無い！」「」「」「」「」

八人の骸は声と同時に椿に襲い掛かってきた。

標的21 目覚めの瞬間！ツナの新たな力！（後書き）

感想等お待ちしております！

標的22 決着!

椿と八人が戦っている間に、骸本体が出てきた。

「まさか、このスキルを使うことになるとは…。」

「このスキル？」

「まだ僕が使用していないスキル人間道です。このスキルは最も醜く、もっとも危険なんですよ。」

そういつて骸は目の数字を五に変え、黒いオーラを体から出していた。

そしてツナに攻撃し、壁に激突させたが、ツナの手からは死ぬ気の炎が出ていた。

そして、ツナが優勢になり、骸が幻覚に石を潜ませた攻撃をしてきて、ツナが怯んだが、骸の背後に回り、地面に激突させた。

「クフフ、これが…ボンゴレ…十代目…僕を…倒した…男か。さあ…殺せ。」

「そんなこと出来ない!」

「その甘さが命取りだ!」

そして、ツナが後ろを向いた。

すると、骸がツナの両手を掴み、炎を封じてから、壁に飛ばした。

「とばされた先を見るがいい! 君はその優しさで、自分を失うので

す！」

ツナが飛ばされた先にはあの槍があった。

「行け！ツナ！」

そして、ツナは炎を逆噴射して、骸の方へと向かい、骸の顔を掴んで壁に突っ込んだ。

骸は倒れて、ツナは普通の状態に戻った。

そして、同時に、椿も皆を気絶させていた。

「終わったんだよね。ツナ君。」

「骸…死んでないよな。」

「骸さんに近づくな！」

俊太が言った。

そして、エストラーネオファミリーにいたときの昔のことなどを話した。

「でも、俺だって仲間が傷つくのを黙って見ていられない！だって、そこが俺の居場所だから！」

ツナが言い終わった後、ヴィンディチエ復讐者がやってきた。

「医療班の！」

ツナがそういった後、復讐者は、鉄の首輪のようなものを、骸、犬、千種、俊太、蓮の首に投げてつけた。

そして、五人を引っ張った。

「何してるんですか！」

「やめとけ。奴らに逆らうと厄介だ。しかし妙だな、おい復讐者！」

「何だ。」

復讐者の一人が答えた。

「何故ランチアは連れて行かない？」

「あいつは、骸を倒すことを手伝った。つまり骸に協力していなかったということ…。」

「そうか。じゃあな。」

「では…」

こうして復讐者は去っていった。

そのあと、ボンゴレの医療班が来て、みんなの手当てをした。

「いて！いててて！」

ツナが倒れこんだ。

「何これ！体中が、筋肉痛！」

そして、ツナはあまりの痛さに気絶した。

「ツナ君…リボン君。今日から一週間くらいはツナ君を休ませてあげてね。雲雀さんに許可を取っておくから。」

「分かったぞ。」

そして、椿はツナを抱えて帰ろうとした。
すると、部屋に、俊太と蓮の獅子風が落ちていた。

「これ…俊太君と蓮君が落としていったのか…僕が預かっておこうかな、また戦いたいし。」

そして、椿は合計三本の獅子風を腰にさし、帰っていった。

標的22 決着！（後書き）

黒曜編終了です。

読んでいただきありがとうございます。

もちろんこれからも続くのでよろしく願います。
感想等お待ちしております！

登場人物紹介3 オリキャラプロフィール

虹影 にじかげ
圭斗 けいと

性別	男性
年齢	13歳
誕生日	4月13日
身長	164cm
体重	44kg
性格	元気少年
容姿	目と髪は、普通の大きさ普通の長さで、こげ茶色。 顔は普通。

獅子風 ししかぜ
鉄治 てつじ

性別	男性
年齢	25歳
誕生日	11月11日
身長	186cm
体重	72kg
性格	さわやかな男性
容姿	目は鋭く黒色。 顔は美青年。 髪は短く黒色。

獅子風 ししかぜ
鉄五郎 てつごろう

性別	男性
年齢	58歳
誕生日	11月27日
身長	168cm
体重	56kg
性格	さわやかなおじさん
容姿	目は優しく黒色。 顔は美青年。 髪は短く灰色。

登場人物紹介3 オリキャラプロフィール（後書き）

新しいオリキャラでした。

獅子風さんが誰なのかは、皆さんはなんとなく分かります。

標的23 転校生！

骸を倒して二ヶ月

ツナと椿は今日も一緒に登校していた。

「もうすぐ新学期だね。」

「うん。もうすぐ俺たちも二年生か。また何か起こってしまいそうな気が…。」

「ツナ君の思い過ぎだよ。」

そして、二人は普通に歩いていた。

「おい君！」

突然誰かに呼び止められた。

「君の腰の刀は…獅子風…だね。」

「何で知っているんですか？」

「私がそれを作ったからだよ。私は獅子風鉄五郎。獅子風鍛冶屋の十代目だ。」

鉄五郎が笑顔で自己紹介した。

「あなたがこれを？」

そう言いながら、獅子風を抜いた。
すると、獅子風にはひびがあった。

「あ！ひびが…。」

「これは叩き直すしかないね。それにしてもこんなひびをこの刀に入れるとは…君たちは何をしたんだい？」

「それは…」

椿たちは言い訳を考えていた。
まさか、黒曜生と戦った結果こんなことになったなど言える訳がないからだ。

「まあいい。とりあえず、腕のいい鍛冶屋を紹介するよ。」

「あなたは直してくれないんですか？」

「私が直してもいいけど、彼は私を超えた職人だ。彼のほうがきつといい刀にしてくれる。あと、その鍛冶屋は、町外れの森の中にあるからね。じゃあ！」

そして、鉄五郎は去っていった。

「放課後行ってみよっと。」

そして並中

「おはようございます！十代目！今日このクラスに転校生が来るみたいですよ。」

「そうなんだ。それにしてもこんな時期に来るなんてどうしたんだろう？」

ツナたちが話していると、教室に先生が入ってきた。

「みんな席につけ。今日は転校生を紹介する。」

「虹影圭斗です。よろしく！」

元気に圭斗が挨拶した。

「虹影の席は、飛川の後ろだ。」

先生がそういうと、圭斗は席についた。

そして昼飯時の屋上

いつものように四人で弁当を食べていた。

「俺もここで食べていい？」

そうやって座って弁当を食べ始めた。

「圭斗君は、何でこんな時期に転校してきたの？」

ツナが聞いた。

「何でだろうね。親に言われてここに来たんだ。そういえば、椿君、すごく強そうだけど僕と戦ってみたい？」

「別にいいけどやめといたほうがいいよ。」

椿は遠慮しがちに言った。

「大丈夫、大丈夫。じゃあ始めるよ。」

圭斗の声と共に戦いが始まった。

二人は数分間戦い、圭斗が優勢になってきて、結局圭斗が勝った。

「君強いね。」

「君に言われたくないな。まだ全力を出してなかったみたいだし。」

椿は座りこんで言った。

「ばれた？実はまだ四割しか出してなかったんだ。でも、僕に四割出させたのも、君が初めてだよ。」

「そうなんだ。」

こうして、五人は昼食を終え、教室に戻っていった。

そして放課後

森の中に椿は行き、鍛冶屋を見つけた。

「獅子風鍛冶屋。ここだね。」

そして、椿は中に入った。

「いらっしゃい！」

中から青年が出てきた。

「これを直してほしいんですけど…。」

椿は獅子風を渡した。

「これは先代の獅子風…あなたは何者ですか？」

「一般人です。」

「一般人がこれを持っているはずは…。」

そして、なにやら色々と考え始めていた。

「あの…あなたの名前を聞いていなかったんですけど。」

「あ、僕は獅子風鉄治。この鍛冶屋の十一代目だ。あと、これは明

日の朝取りに来てください。それまでに直しておきます。」

「よろしくお願いします。」

そして、椿はそのまま家に帰った。

標的23 転校生！（後書き）

今回はここまでです。

オリキャラ全員出してしまいました。

結構面倒ですね。オリキャラを活躍させるのは難しいです。
感想等お待ちしております！

標的24 豪華客船での出来事

次の日の朝

椿は獅子風鍛冶屋に、獅子風をとりに行った。

「おはようございます。」

「おはよう。ちゃんと直しておいたよ。先代の作った獅子風だから、直すのに手間取ったけどね。」

鉄治が、獅子風を渡した。

それをしっかりと腰にさした椿は、礼を言って町に行った。

今日は休日で並盛町をぶらぶらしていた。

「暇だなあ…。これ異常ないくらい暇だ…。」

そんなことを言いながら歩いていると、謎の男性とぶつかった。

「おっと、ごめんごめん。ちょっとぼおつとしてたから。」

男性が立ち上がり、手を差し伸べてくれた。

「いえ、こちらこそぼおつとしてたもんで…。」

男性の手を掴んで立ち上がった。

「では。」

男性はどこかへ行ってしまった。

「いい人だったなあ。名前ぐらい聞いておけばよかった。っ！……！」

椿の意識が遠のいていった。

「うまくいったな。」

「ええ、この子もちゃんと来てもらわないと。」

そして、一人の赤ん坊と女性が、椿を抱えて歩いていった。

「……ここ……どこだ？」

謎の場所で椿は起きた。

「よお、椿じゃねえか！」

「椿！お前も来たのか。」

「飛川！お前も極限にトレーニングに来たのか！？」

「椿さん！こんにちは！」

「こんにちは、椿君。」

「こんにちは、椿兄！」

「椿君も来たんだ。」

「椿君、何で僕はここにいるんだろう？」

そこには山本と獄寺、良平、ハル、京子、フウ太、楓、圭斗がいた。
そして、イーピンとランボは遊んでいた。

「揃ったな。」

「リボーン君！ ビアンキさんも：何でここに？」

「子供たちがママンに会いたいからって。」

ゴークルのようなものをつけたビアンキがランボたちを指差して言った。

「意味が分かりませんよ。」

「俺たちは小僧に呼ばれたんだ。」

山本が言った。

「取り合えずおめえら。腹ごしらえするぞ。」

そして、豪華な船の中で、豪華な昼食を食べた。
そして、ツナと奈々が来た。

「何でみんなここにいるのー！？」

「子供たちがママンに会いたって。」

「そうなんだ、じゃあどうやって入ってきたんだ？」

ツナは呆れて言った。

「正々堂々正面からガードマンを倒して入ってきた。」

そして、大勢の船員が入ってきた。

「お騒がせしてすみません。こちらで怪しい子供を見ませんでしたか？」

「見てません。」

そして、船員達はどこかへ行った。

「おいリボーン！って、どこいったんだー！？」

「ランボとイーピンもないぞ！極限にどうなってるんだ！？」

「姉貴もいません。」

「みんなどこかに隠れたんじゃない？」

「じゃあ探さないと！」

こうして、ツナたちとリボーンたちのかくれんぼが始まった。

そして数分後

「あとはリボーンだけか：どこに隠れたんだろう：。」

そして、一枚の絵画の前で立ち止まった。

そして、絵画とにらめっこすること数分間

「よく見破ったな。」

絵画の端からリボーンが出てきた。

「リボーン！」

すると、大勢の船員が来た。

「リボーンさん！」

船員がざわついて、リボーンの周りに集まった。

「実は俺たちの分のチケットも取ってあったんだ。この船はマフィアランド行きだからな。」

そして、デッキからマフィアランドが見えてきた。

すると、リボーンのおしゃぶりが光りだした。

そして、船は、マフィアランドに着いた。

標的24 豪華客船での出来事（後書き）

原作の話はごちゃごちゃになってますが、順番を変えただけです。
進級はもうすぐになります。
感想等お待ちしております！

標的25 リゾートで特訓!

一行は、マファイアランドに着いた。

女子供ははしゃいでアトラクションに行き、ツナは代表として椿と共に受付に行くことになった。

そして、マファイア審査に失格となり、電車に無理やり乗せられ裏マファイアランドに着いた。

「ここどこだよ!」

「裏マファイアランドだ。」

そして、後ろから謎の赤ん坊が来た。

「よく来たな、コラ! 名乗れコラ!」

「チャオッス、コロネロ。」

そして、リボーンとコロネロの激闘が始まった。

そして、リボーンがコロネロに弾丸を撃ち込み、戦いは終わった。

「何しに来た、コラ!」

「何で生きてんのー!?」

「見学に来ただけだ。俺の生徒のツナと椿がここで修行することになったからな。」

「何だよ修行って!」

すると、リボーンがツナの手をつねった。

「だからお前は甘いんだ！」

そして、二人がツナをボコボコにした。

「二人ともスパルタだね。」

「「こいつと一緒にするな！」」

そして二人は椿に向かってキックをしてきたが、見事に椿は避けた。

「こいつ本当にお前の生徒か、コラ！並の人間の動きじゃねえぞ！」

「こいつは元々こうだったんだ。」

「まあいい。早速修行を始める！」

そして二人は渦潮の中に放り込まれた。

椿は楽に水の中から飛び上がって出てきた。

「お前は合格だな。」

ツナは何とか岩場に上がってきて、水を吐き出した。

「休んでる暇はねえぞ！」

コロネロの声と共に、岩石が落ちてきた。椿は余裕で避け、ツナは逃げ回っていた。

「新しい修行者が来たな、コラ！」

電車に乗って獄寺と山本が来た。

「十代目！」

「ツナ！」

「よし！揃ったな。」

リボーンが言った。

「何をする気だ、コラ！」

「椿対ツナ、獄寺、山本の、1VS3の戦いだ。」

リボーンが不敵な笑みで言った。

「じゃあ始めろ。」

リボーンの合図と共に戦いが始まった。

まず獄寺が2倍ボムで攻撃してきたが、椿が獅子風・伸縮刀を抜き、全ての炎を消した。

そして、山本も山本のバットで攻撃してきたが、椿が獅子風・全刃刀を使って折った。

そして、ツナも死ぬ気モードになり、攻撃してきたが、椿が獅子風・刃無刀で、三人を一気に倒した。

「相手にならねえな。」

「まったくだ、コラ！」

そして、また電車に乗って誰かが来た。

「ここどこよ！」

「さあ。」

楓と圭斗だった。

「お前らも戦ってみろ。」

「誰と？」

楓が聞いた。

「椿とだ。さっさとやれ。」

リボーンという言葉と同時に、圭斗は長い棒を持った。

「それが君の武器？」

「うん。」

圭斗はそう言って、椿と戦い始めた。

二人の動きは目にも止まらぬ速さで、戦っていた。

楓は何も出来ず、ただ立ち止まっていた。

椿は獅子風・刃無刀を使って戦っていた。

圭斗は、棒を巧みに操り、戦っていた。

「これで終わりだ！」

そうして圭斗が棒を椿の腹に突いた。

「まだまだよ！」

椿は獅子風・全刃刀で棒を斬り、獅子風・刃無刀で、圭斗を倒した。

「これで一勝一敗か、やっぱり君強いね。」

圭斗は座って言った。

「だから本気を出してよ…。まだ7割ぐらいってところでしょ?。」

「ばれた?じゃあ今度は本気で行くよ?」

そして、椿は獅子風・刃無刀を、圭斗は棒を構えた。

「私は忘れられてるのかしら。」

楓はため息をついた。

二人はさっきより早い動きで戦い、10秒立たないうちに、椿はやられた。

「やっぱり負けた。」

椿は仰向けになって空を眺めていた。

「しょうがないよ。俺強いもん。」

「それは傲慢なのかな？」

椿はそのまま寝てしまった。

標的25 リゾートで特訓！（後書き）

今回は裏マフィアランドの話でした。

椿と圭斗の強さは、すごいです。恐ろしいです。
感想等お待ちしております！

標的26 カルカッサ来襲!

椿が寝て数十分、圭斗と椿以外の4人は特訓を続けていた。そして、島中にサイレンが流れた。

敵襲! 敵襲! 皆さんは、速やかに避難所へ、非難してください!

「ふわあー…眠いなあ…さっきの音は何?」

椿は起きた。

「椿君、敵襲だって。」

圭斗が言った。

「へえ…で、何でリボン君とコロネロ君は寝てるの?」

椿が指差した先には、お昼寝の時間で寝ているリボンとコロネロがいた。

「お昼寝だってさ。さ、マフィアランドに戻ろうか。」

そして、椿と圭斗はすでにマフィアランドへ向かったツナたちを追いかけていった。

そして、地下鉄の線路を抜け、マフィア城に出た。

「なるほど！ここに出るのか！マフィアランドのシンボル、マフィア城です。」

その後、奈々たちと再会し、色々話した後、良平が迷子になっていくことを知った。

そして、椿と圭斗もあるいて追いついてきた。

「笹川先輩が、迷子？」

「あの年で迷子！？」

椿と圭斗も驚いた。

そして、がらの悪い人たちが言い合いをしているのに気がついた。

「この抗争は、ディーフォーファミリーが指揮をとるぜ。」

「待ちたまえ、連合軍の大將は、我々伝統と格式あるベッチオフファミリーこそ相応しい。」

「おいおい、冗談じゃねえぞ。俺たちヌーヴォファミリーを差し置いて、何言ってるんだ。」

三つのファミリーが張り合っていた。

「待て、ここはあいつに任せたらどうだ。」

帽子をかぶった一人の男がツナを指差して言った。

「デメエ誰だ！あんな奴に任せられると思ってんのか！？」

ディーフォーファミリーのボスが言った。

「俺はランチアだ。そして、あいつはボンゴレ十代目、沢田綱吉だ。」

帽子を外してランチアが言った。

「あれが次期ボンゴレか。」

「初めて見たぜ。」

三つのファミリーそれぞれがざわついた。

「ランチアさん！何でここに？」

ツナがランチアに駆け寄って言った。

「あの赤ん坊に呼ばれてお前たちが乗っていた船に乗り込んだんだが、お前たちが見つからないままこの騒ぎが起きてな、それで偶然お前らを見つけたって訳だ。」

ツナがランチアと話している中、三つのファミリーがツナに頭を下げていた。

そんな中、カルカッサファミリーの兵士が襲ってきた。

「軽く準備運動でもするか。」

そういつて、ランチアは鉄球“蛇鋼球”を、軽く上に上げ、思いっきり兵士に向かって飛ばした。

「風蛇烈覇！」

すると、蛇鋼球から乱気流が飛ばされ、兵士達を巻き込んで飛んでいった。

「すげえ。」

「あんな技あったのか。」

「やっぱりランチアさんすごいや。」

獄寺、山本、ツナが色々言っていた。

そして、森の木が倒れ、スカルと呼ばれる赤ん坊が出てきた。

「奴は、カルカッサファミリーの軍師スカル！あの紫のおしゃぶりはアルコバレーノの証！アルコバレーノとは虹のこと。そして、マフィア界にいる最強の9人の赤ん坊のことを指すんだ。」

「9人？そんなにいるの！？」

「俺に任せろ、お前たちが手を出すほどの相手じゃない。暴蛇烈覇！」

ランチアが蛇鋼球を飛ばした。

すると、スカルと大量の兵士、そして、巨大なたこが倒れていた。

「何！？あのたこ！」

「覚えてろよ！」

スカルたちは、船へと戻っていった。

「早く追いかけないと！」

楓がそういつて追いかけていった。

すると、海に出て、そこには、沢山の戦艦があった。

「そろそろ僕らの出番かな？」

「俺たちが終わらせてやるよ。」

椿と圭斗が、戦艦に突っ込んでいった。

椿は獅子風・伸縮刀で、戦艦を壊し、圭斗は、中の人間を倒していった。

二人の活躍で、二分足らずで終わった。

「意外と弱かったね。」

「すごい物足りないなあ。」

二人が歩いて戻ってきた。

そして、周りから歓声があがり、ツナたちは、マフィアランドのホテルに帰った。

標的26 カルカッサ来襲！（後書き）

ランチアは、まだ沢田家にいました。

しかも勝手に新技作っちゃいました。風蛇烈覇、別にいいですよね。

あと、ランチアは、黒曜編が終わってから二ヶ月間でしっかりと前のファミリーへの罪の償いはし終わっています。

そうして、マフィアランドへ来ました。

あと、アルコバレーノも9人にしました。

増えた二人は新属性の人です。

もちろん、マーレリングやボンゴレリングも増えています。

感想等お待ちしております！

標的27 進級!

マフィアランドに行ってから3週間、始業式の日になった。今日も椿とツナは一緒に登校し、特に何もなく学校に着いた。

「絶対みんな同じクラスになるよ。」

椿が学校に着くなり言った。

「何で分かるの!？」

「雲雀さんに頼んだもん。」

「……………」

ツナは黙り込んでしまった。

「早く行こうか。」

そして、並中のクラス分け表の前には生徒が集まっていた。結局椿の言った通り、みんな同じクラスで2-Aだった。

そして始業式も終わり放課後
ツナと椿と獄寺は一緒に帰っていた。
すると、前からランボが走ってきた。

「ツナー！遊べー！」

ランボがそんなこと言いながら走ってくると、石につまづいて転んだ。

「が…ま…ん！出来ないもんね！」

そういつて髪の中から十年バズーカを出した。

「あっ！」

ランボの手がすべり、十年バズーカがツナに飛んできた。

「ツナ君危ない！」

椿がツナの代わりに十年バズーカに当たってしまった。

そして、辺りが煙に包まれた。

「ここどこだ？奴はどこにいるんだ？」

大人になった椿が出てきた。

髪は現在より少し長く、さも20cmくらい高くなり、声もそれなりに低くなった椿がいた。

そして、手に持っていた獅子風・刃無刀に透明であまり見えないが、炎がともっていた。

「えっと…これは何の冗談かな？何で十年くらい前のツナたちがここに…。」

「十年前の椿が十年バズーカに当たって、十年前のお前と入れ替わったんだ。」

獄寺が簡単に説明した。

「そうか…なら、十年前の俺が危ない！でも大丈夫かな。あいつら弱いし。」

「あいつらって？」

そうツナが言うと、車が誰かをひいて、ひき逃げしていた。

「何してるんだ？」

十年前ではありえない動きで車のボンネットの上にいた。

「うわぁー！」

運転手がびっくりしてブレーキをかけた。

「お前！あんなこととして許されると…」

その瞬間、十年バズーカの効力が切れた。

そして、椿が獅子風・刃無刀で、運転手を攻撃した。

「これで終わりか。って、え！？」

椿はいきなり十年前に戻ってきてびっくりした。

「椿君！」

「ツナ君！？じゃあ十年前に戻ってきたのか。」

椿は傷だらけで座った。

「十年後で何があったんだ？」

「十年後にとばされたときは、敵に囲まれていて、そいつらは武器に炎を灯していた。それで、何とかそいつらを倒していった、最後の一人を倒すときに十年に戻ってきたんだよ。」

「炎…死ぬ気の炎かな？」

ツナはハイパーモードのときに使った死ぬ気の炎を思い浮かべていた。

「死ぬ気の炎ってなんですか？」

「リボン曰く超圧縮エネルギーらしいよ。」

「でも、ツナ君の炎とは色が違ってたよ。赤とか青とか藍色とか黄色とか色々あった。」

「一体何なんだろう？」

ツナたちが考えていると、警察がやってきた。

「早く帰ろうか。」

そして、三人は帰っていった。

「いろいろな色の死ぬ気の炎か。」

三人がいた場所の近くにリボーンが立っていた。

「調べがいがあるそうだな。」

そして、沢田家に帰っていった。

標的27 進級！（後書き）

なんだかんだで、描くことが思いつかずこんなことになってしまいました。

十年後の椿は、恐ろしく強くなっています。

色々疑問な点があったと思いますが、後で分かってくると思うので、今は気にしないでください。

感想等お待ちしております！

登場人物紹介4 ヴァリアー編オリキャラプロフィール

シルス・フェリエル

性別 男性

年齢 16歳

誕生日 10月29日

身長 174cm

体重 58kg

性格 冷静でクールな青年

容姿 銀色の髪に黒い目、ごく一般的な青年の顔

ヴァリアーの守護者の一人

武器は鉤爪

フロウ・レイスト

性別 男性

年齢 18歳

誕生日 3月12日

身長 168cm

体重 53kg

性格 無口な青年

容姿 青い短髪に青い目、美少年の顔

ヴァリアーの守護者の一人

武器はライフルと拳銃

ロイス・クロウス

性別	男性
年齢	17歳
誕生日	12月29日
身長	172cm
体重	64kg
性格	元気な青年
容姿	黒髪に黒い目の顔はイケメン
ヴァリアーの守護者の一人	
武器は獅子風	

登場人物紹介4 ヴァリアー編オリキャラプロフィール（後書き）

ヴァリアー編のオリキャラです。
みんなヴァリアーの守護者です。

標的28 突然の襲撃！十個のボンゴレリング！

ツナたちが進級し三ヶ月、せみの泣き声がうるさくなったところに夏休みに入った。

この日はみんなで商店街で遊んでいた。

「みんな静かだねえ。」

「そうね。」

楓と椿は近くの喫茶店で雑談していた。

「今さらだけど、黒曜の時はごめんね？憑依されて襲っちゃったりして。」

「別にいいよ。あれはしょうがなかったことじゃん。」

その時

ドガァーン！

遠くで謎の爆発音がした。

「なんだろう？行ってみようか。」

そして、椿たちは爆発音のした方へ向かった。

椿たちが到着したときには、剣を持った謎の男がツナをかばって、ツナの前にいた少年に剣を向けていた。

「待て！」

「なんだ、テメエ！テメエも三枚におろしてやろうか！？」

そして、男が椿に襲い掛かってきた。

椿は獅子風・刃無刀を抜き、男の攻撃を防いだ。

そして、獅子風・全刃刀で相手の刀を折った。

「なんだこいつ！？しょうがねえ。今回はおとなしく帰る…わけねえぞ！」

そしてツナから箱を取ってどこかへ行った。

「あ！ボンゴレリングが！！！」

謎の少年がそう叫ぶと倒れてしまった。

「とりあえずこい！」

ツナはリボーンにそう言われて、連れていかれた。
椿たちは家に帰って一日を過ごし寝た。

そして次の日
椿は外へ出かけようとして、家を出ると、ポストに何かが入っていた。

「なんだろう？」

そうしてポストを見ると、椿と楓への封筒があった。
そして家に戻り、楓と一緒に封筒を開けた。

「何が入ってるのかなあ？」

封筒を開けると、ボンゴレリングが二つ入っていた。

「このリングなんだろう？原作にはなかった絵が描いてある…。」

「そのリングは雪と風のリングだ。」

天井から声がして神が現れた。

「とりあえず、話は後だ。沢田綱吉の家に行け！」

神に言われるがまま沢田家へと向かった。

そして沢田家
そこには獄寺と山本、良平と圭斗も来ていた。

「よお椿。お前もこれ持ってんのか？」

獄寺がそう言いながらボンゴレリングを出した。

「全員揃ったな。」

リボーンとツナが出てきた。

「おいリボーン！なんなんだよ話して！」

「ツナ。お前の首にもついてるだろうそれについて話そうと思ってな。」

ツナは首についていたリングを出した。

「これって昨日の恐ろしいリング！」

「それはボンゴレリングっていつてな、大空、嵐、雨、雷、霧、雲、雪、風、オーロラで十個あるんだ。そして、これを狙って十日後くらいにヴァリアーが来るはずだ。それまでお前らには修行してもらう。」

そして、コロネロがやってきた。

「おい！リボーン！俺が教えるのはどいつだ、コラ！」

「こいつだぞ。」

リボーンは良平を指差した。

そして、コロネロがライフルで良平の体を軽く叩いていった。

「なるほどな。ついて来い、コラ！」

「よく分からんが極限に承知したぞ！」

そしてどこかへ走っていった。

「とりあえず僕らは帰るよ。」

椿と楓は帰った。

そして、飛川・篠村家

「帰ってきたな。早速修行を始めるぞ。といっても、こちら側の都合で5日しか休暇が取れなかった。それまでに修行を完成させる。そのあとは自分達でなんとかしてくれ。」

そして、神と椿と楓は椿の部屋の奥の空間に入っていた。

標的28 突然の襲撃！十個のボンゴレリング！（後書き）

ヴァリアー編に入りました。

新しい属性、風、雪、オーロラの三つですが、風は他の作品にもあるんですけど、

小説を書き始める前から自分で考えていたものです。本当ですよ。

雪はDSゲームであったやつが、リング争奪戦のときからあったら面白そうだなあ、みたいな感じで使いました。

オーロラは、最近即興で考え付いたものです。

感想等お待ちしております。

標的29 それぞれの修行

ボンゴレリングを持った守護者達は修行を始めていた。

ツナもリボーンに死ぬ気弾を撃たれて、断崖絶壁にいた。

そして何とか上り、死ぬ気状態でバジルと修行をしていた。

「沢田殿、死ぬ気になりすぎです。本当の死ぬ気になるのは、一瞬でいいんです。」

そしてバジルがツナを肘打ちで飛ばした。

ツナは岩場に当たったが無事で、石をバジルに向かって投げまくった。

「沢田殿、おぬしが死ぬ気モードで五分しか戦えないのは常に気力を放出しているからです。うまく死ぬ気をコントロールして、長時間死ぬ気でいられるようにしましょう！」

バジルは石をツナの上の岩場へと、投げた。

そして岩が崩れ落ち、ツナは岩の下敷きになった。

獄寺は、シャマルに家庭教師になってもらい、紙飛行機をボムで落とすために頑張っていた。

「またはずれ。」

「なんであたんねえんだ！」

獄寺は苦戦していた。

「ナンパと一緒になんだよ。紙飛行機はかわい子ちゃん、ダイナマイトはお前だ。どうやって口説き落とせばいい？」

「知るかそんなもん！」

「こりゃまだまだかかるな。」

そして修行は続いた。

山本は、山本剛に時雨蒼燕流を教えてもらっていた。

「次、七の型！」

剛がそういうと、山本が五つのわらの様な物を幾つかに斬った。

「次、八の型！」

山本は、を縦に斬った。

「終わりだ。教えることは何もない。」

「待てよ親父！」

その後いろいろな話をしていた。

良平は、コロネロに特殊弾を撃たれ、岩場に激突した。
そして、大きな岩の前に立ち、パンチを放つ構えをとった。

そして、渾身のパンチを放ち、岩を見事に砕いた。

「その感覚を忘れるなよ、コラ。」

そして、二人は師弟の関係になっていった。

雲雀は、デイーノの話も聞かずに戦闘を始めていた。

二人の戦いはすさまじく、常人ではありえないものだった。

圭斗は、町で家庭教師を探していた。

「誰かいないかなあ？」

すると、ランチアに会った。

「お前は、ボンゴレの仲間の…」

「虹影圭斗です。そうだ！ランチアさん！俺の家庭教師になってください！」

圭斗は頭を下げて言った。

「まあいいが、お前は椿と同じくらい強いんだろう？俺じゃ家庭教師はつとまらんだろう。」

「別にいいんです。速さは関係ない修行をするんで、ランチアさんがやってくれたほうが好都合なんです。」

「分かった。」

そして二人は、森に行った。
森に入って行くと、大きな草原があった。

「ここでいいかな。ランチアさん、俺に暴蛇烈覇を撃ってください！」

「お前気は確かか？ 暴蛇烈覇を食らったら普通の人間は…お前は普通じゃなかったな。いいだろう！」

そしてランチアは、蛇鋼球を高々と上げた。

「暴蛇烈覇！」

蛇鋼球が乱気流を起こしながら圭斗に飛んできた。
そして、圭斗はそれを受け止めた。

「う!!」

暴蛇烈覇の威力で後ろに飛ばされそうになった。
しかし何とか持ちこたえた。

「まだまだだな。とりあえず肉弾戦で色々な身体能力を高めたほうがいいんじゃないか？」

ランチアが圭斗に提案した。

「そうですね。じゃあ俺はランチアさんのスピードに合わせて動くんで、はじめましょう！」

そして、ランチアと圭斗の修行も続いた。

椿と楓は、神に修行をつけてもらうところだった。

「よし、椿！お前は神風一刀流、神風二刀流の継承をしてもらう！」

「神風一刀流と神風二刀流？」

「初代風の守護者が考案した流派だ。その後使いこなせるものは現れず、永遠に忘れられてしまった。」

「早速はじめるぞ！」

椿と神の修行はこうして始まった。

「楓、お前は銃の腕を磨きつつ、新しい銃弾も考えてもらう。俺は一切口出ししねえ。適当に頑張れよ。」

楓はほぼ一人での修行だった。

こうして守護者達は修行の日々を過ごしていたのだった。

標的29 それぞれの修行（後書き）

今回は修行の話でした。

圭斗はランチアと修行です。

ランチアを復讐者に捕まらせなくて良かった。

椿の神風一刀流と神風二刀流は、神速の剣術です。

そこまで早い動きができるものが今まで現れなかったので、結局忘れられてしまいました。

感想等お待ちしております！

標的30 ヴァリアー襲来！

謎の男が来てから四日後、ビルの上に黒服の男が7人いた。

「この町か：ハーフボンゴレリングがあるというのは。」

指に雷のハーフボンゴレリングをつけた男が言った。

「そうなんだろうな。スクアアロが言っていたのは間違いなくこの町だ。」

首に風のハーフボンゴレリングをかけた男が言った。

「…。マーモン…念写。」

首に雪のハーフボンゴレリングをつけた男が言った。

「仕方ないね。フロウの頼みなら断れないさ。全員分探せばいいんだね。」

マーモンと呼ばれた子供は紙を取り出して、鼻水を飛ばした。

「近いよ。雷の奴は、南に205m、西に801mの地点。雪の奴は、南に300m、西に703mの地点。風の奴は、南に103m、西に602mの地点だ。」

「聞いたな。これより、ヴァリアーレヴィ雷撃隊は、雷のリングの奪還に向かう。リングの所持者、及び邪魔するものは、消せ！」

そして、レヴィと3人の黒服の男はどこかへ行った。

「俺も行くぞ。」

風のリングを持った男もどこかへ行った。

「…。」

雪のリングを持った男もどこかへ行った。

場所は変わり、椿は町を歩いていた。

「今日も並盛は平和だなあ。神様の修行も終わっちゃったみたいだし…。」

椿はのんきに歩いていた。

そして、先ほどの、風のリングを持った男が現れた。

「貴様のリングは俺が貰う。」

そして、いきなり襲ってきた。

椿は、獅子風・刃無刀を抜いた。

風の相手は、鉤爪を使っていた。

「なんなんですか！風紀委員に逆らうと大変ですよ？」

そして椿は後ろに下がった。

「そんなことどうでもいい。風のリングをよこせ。」

そして風の男が襲い掛かってきた。

「仕方ない。神風一刀流！」

椿は刀を逆手に持った。

「竜巻！」

椿は一瞬にして五回転し、相手を連続で攻撃した。

「くっ！」

相手は鉤爪で防いだが、かなり遠くまで飛んでいった。

「あんな奴ほっといたら並盛が大変なことになる！」

そして椿は風のリングを持った男を追いかけていった。

一方楓は、クレープを食べながら歩いていた。

「神様もやっと修行つけてくれたし、これでヴァリアーが来ても安心ね。」

すると、クレープが弾かれた。

「誰!？」

クレープが弾かれた逆の方向を向いた。

「…雪のリング…渡してもらう。」

そして、フロウは銃を持った。

「渡すもんですか！」

楓は銃をとって弾を撃った。

弾はフロウの銃の引き金の部分に当たり、凍りついた。

「…!!！」

フロウは急いでどこかへ行った。

「何あいつ?もしかして、ツナ君たちを狙ってるんじゃない?…なら早く行かないと!」

楓はフロウを追いかけていった。

椿と楓が敵を追いかけていくと、すでにヴァリアーとツナたちが向

き合っているところだった。
もちろん圭斗もいた。

「椿！おめえ今来たのか。」

獄寺が言った。

「奴は？風のリングの守護者。」

「あいつだぞ。」

リボーンが指差した先に風のリングを持った男がいた。

「そうか。なら今すぐ…「待て！」…あなた誰？」

椿が風の男に向かって歩いていくと、家光に止められた。

「沢田綱吉の父であり、ボンゴレ門外顧問リーダー、沢田家光だ。
これより、ツナファミリーとヴァリアーの決闘を開始する！同じ種類のリングを持つもの同士の、ガチンコバトルだ！あとは指示を待
てと書いてある。」

「「お待たせしました。」」

茂みから誰かが飛び出してきた。

「「今回のリング争奪戦では、我々が審判をつとめます。」」
ジャッジ

「誰？」

「我々は、九代目直属のチェルベツロ機関の者です。」「リング争奪戦において、我々の決定は九代目の決定だと思ってください。九代目は、これがファミリー全体を納得させる、ギリギリの措置だとおっしゃっています。」「依存はありませんか？XANXAS様。」

その後、家光の意義や争奪戦の場所などを説明され、チェルベツロは去っていった。

そしてXANXASたちも消えた。

ツナたちはその後それぞれの家へと帰っていった。

標的30 ヴァリアー襲来! (後書き)

今回は、何だったんでしょう？

ほとんどアニメに沿っていて、椿たちが戦っただけな気がします。

まあ、この話がなければこの先の展開の意味が分からなくなりますよね。

感想等お待ちしております。

標的31 晴れの守護者戦!

次の日の深夜、椿は並中に急いでいた。

「風紀委員の仕事でこんなに時間がかかるなんて!」

そんなこと言いながらも、並中についた。

そのときは、戦いが始まる直前だった。

「椿! 遅いではないか! よし! 全員で極限に円陣を組むぞ!」

そして、円陣を組んだ。

「良平ーっファイト!!」「」「」「オー。」「」「」「」

「よし! 極限力がみなぎってきたぞ!」

そして、双方の晴れの守護者がコロシアムの中央に来た。

良平はボクシングの構えをとった。

「んまあ、そのポーズはボクシングかしら。また、イケてないわねえ。このルッスーリアが立ち技最強のムエタイで遊んであ・げ・る。」

そしてルッスーリアも構えた。

「やはりヴァリアーの守護者も格闘家か。」

「やはり?」

「歴代のファミリーを見ても、晴れの守護者は、皆強力な、拳や足を持っていた。ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で碎き、明るく照らす、日輪となる。それが、晴れの守護者の指名だからな。」

「なるほど。」

椿は相槌を打ち、コロシウムの方を見た。

「では、晴れのリング、笹川良平 vs ルッスーリア、バトル開始！」

そして、バトル開始の合図と同時に無数のライトが照らされた。
そして、ルッスーリアが一方的に良平を攻撃していた。

「お兄さんにもサングラスを渡さないと！」

「勝負中の守護者との接触は許されません。もし行えば、リングを没収します。」

そして、ルッスーリアは飛び膝蹴りをした。
良平は、左の拳でパンチをしたが、ルッスーリアの膝についていたメタル・ニーに弾かれた。

「腕が…！」

良平は倒れこみ、脱水症状を起こしていた。

「晴れの守護者らしく逆境を跳ね返して見せたわよ。」

「立てコラ！」

コロネロがやってきた。

「そろそろ頃合だぜ！お前の本当の力を見せてやれ、良平！」

「コロネロ師匠！その言葉を、待っていたぞ！」

そして良平は起き上がった。

そして、上にパンチを連打し、ライトを割っていった。

「これでやっと、貴様と思いきりやりあえそうだな。」

良平が目を開けた。

「塩を拳圧に乗せてライトを割ったんだね。」

椿が謎の解説をした。

「行くぞ！マキシマムキャノン極限太陽！」

良平の拳がメタル・ニーに当たった。

良平はさっきのように拳をいたためて叫んでいた。

「まだエネルギー伝達率は90%ってところだな。」

「お兄ちゃん！」

そこに京子が来た。

「お兄ちゃんもう喧嘩はしないって約束したのに！」

そして、良平は動いた。

「確かに、俺は不良に額を割られたとき、もう喧嘩はしないと約束した。だがこうも言ったはずだ！俺は男だ、どうしても喧嘩をしないといけない時が来るかもしれない、だが、京子がそんなに泣くなら、俺はもう：“負けん”と！」

「立った！」

「妹を思う気持ちだが、細胞エネルギー伝達率を100%にしたぜ！」

そしてルッスーリアは飛び上がり、膝蹴りをしてきた。

「見さらせ！これが、本当の！マキシマムキャノン極限太陽！」

良平の拳が、ルッスーリアのメタル・ニーを砕いた。

「これこそファミリーを襲う逆境を自らの肉体で砕き、明るく照らす日輪ね！」

笑顔で楓が言った。

「これでもう奴に先輩のマキシマムキャノン極限太陽を防ぐ手段はない！先輩の勝ちだね！」

圭斗も笑顔だった。

そして、ルッスーリアがゴーラ・モスカに攻撃され、倒れた。

「あいつ、仲間なのに…。」

椿が言った。

「弱者は消す。これがヴァリアーが常に最強の部隊である所以のひとつだ。」

「そんなのおかしいだろ！」

椿はキレて、ヴァリアーのゴーラ・モスカに襲いかかった。

「お待ちください。そんなことをすると、あなたのリングも没収しますよ。」

そんな言葉も気にせず椿は突っ込んでいったが、それを圭斗が止めた。

「やめなよ！君の行動でツナ君たちが酷い目に遭うかもしれない。そうは思わないのかい？」

圭斗の言葉で椿は平常心を取り戻した。

「…ごめん。」

そして、ツナたちのところに戻ってきた。

「たった今、ルッスーリアが戦闘不能とみなされました。よって、晴れのリング争奪戦は、笹川良平の勝利です。」

そして、ルッスーリアの晴れのリングが良平に渡された。

「明晩の対戦は、雷の守護者戦です。」

チエルベツロが対戦カードを発表した。

「えー！？次はランボの番かよ！」

「雷の守護者って…ランボ君だったの？」

椿は開いた口が塞がらないといった状況で言った。

「そうなんだよ。明日大丈夫かなあ？」

そうして、双方のファミリーは帰っていった。

そのあと、日輪のコロシウムが崩れ去った。

標的31 晴れの守護者戦！（後書き）

なんだかんだでアニメに沿いすぎな気がしますね。

ちよつとアクシデントがあつたくらいで…。

これから出来るだけ、アニメと違うものにしたいです。
感想等お待ちしております！

標的32 雷の守護者戦!

次の日の深夜の並中

雷戦が始まろうとしていた。

屋上にはエレットウリコサーキットと言われる七本の柱と張り巡らされたワイヤーにより、柱に当たった雷がフィールド中に広がっていく仕掛けのステージがあった。

すでにヴァリアーは全員来ていた。

「ランボ君大丈夫かなあ？」

椿たちはやはりランボを心配していた。

「大丈夫だ。雷の守護者の指名は、雷撃となるだけではなく、ファミリーへの攻撃を一手に引き受けて消し去る、避雷針となることだ。ランボの体はその指名をしっかりと表してやがる、うぜえくらいにな。」

リボーンが言った。

「よし、いつもの行くぞ！」

ツナ、獄寺、山本、ランボ、良平、椿、楓、圭斗で円陣を組んだ。

「ランボーーーーファイト!!!!」「」「」「」「オー!」「」「」「」

「

そしてランボは、フィールドに向かっていった。

「雷のリング、レヴィ・ア・タンvsランボ、バトル開始！」

開始と同時にランボはワイヤーの上に乗っていた。
そして雷が落ち、フィールド中に電撃がはしった。
レヴィはそれを避けたが、ランボには直撃した。
しかしランボは生きていて、泣いていた。

エレットウリコクオイオ
「電撃皮膚はすげえな。」

「が…ま…ん！出来ないもんね！」

そして十年バズーカを出して、十年後と入れ替わった。

「やれやれ…餃子が最後の晩餐になるとは…。」

「ランボ、ごめん十年前の君じゃ無理だったみたいなんだ。」

ツナは誤った。

「しょうがないですよ。とりあえずやるだけやってみようか…。サ
ンダーセット！！」

そうしてランボは角をつけて雷を浴びた。

しかし電圧が高すぎて、体内で制御できずに放出してしまった。

「何で自爆してんのよ！」

「ミスリやがったな。」

そういいながらもリボーンは笑っていた。

「が…ま…ん！」

そしてランボは泣きながら十年バズーカに入っていた。
そして、二十年後のランボが現れた。

「この感覚、久しぶりに十年、前と入れ替わったのか。」

「ランボ!？」

「これは…懐かしい、しかし感動に浸っている時間はなさそうだ。
あいつを倒せばいいんですね？」

ランボは状況を読み取りツナに聞いた。

「うん。頼むよ。」

「しょうがない、この時代にはない技を見せて差し上げます。」

そしてランボはポケットから緑色の宝石がついた指輪を取り出し、
中指に嵌めて緑色の雷のようなものを出した。

「あれは、僕が十年後の世界で見た炎！」

「椿さんはもう知っていましたか、まあいい、あいつを先に倒そう。」

そしてランボは、ポケットから四角い箱を出し、箱にっていた穴
に炎を注入した。
すると箱から八本の槍が出てきた。

「これは匣ボックスというものです。近い未来に見ることになりますよ。では…稲妻光線！」

ランボがそう言うと、八本の槍はランボの前に円を描くように浮き、先ほどの炎の光線を出した。

「そんなもの、レヴィ・ボルタ！」

レヴィの八つの傘が開いて雷の光線を出し、ラッジデイフルミネ稲妻光線を迎え撃った。

しかし、ラッジデイフルミネ稲妻光線の方が強く、レヴィ・ボルタを弾き返してレヴィに直撃した。

「くっ！」

レヴィは壁に直撃したが、何とか立ち上がった。

「これで終わりだ、稲妻光…」

その瞬間に現代のランボと入れ替わった。

そしてレヴィがランボに向かって歩いていったが、エレットウリコサーキットの柱が倒れて、ランボは助かった。

「目の前で大事な仲間を失ったら、死んでもしにきれねえ！」

ハイパー化したツナが柱を熱で折っていた。

そしてハイパー状態が解けた。

「勝負の結果を発表します。今回の戦いは沢田綱吉氏の妨害により、

レヴィ・ア・タンの勝利とします。よって、雷、大空のリングは、ヴァリアー側のものとなります。」

チエルベツロはそう言うのとツナのリングを取り、XANXASに渡した。

「ここにこれがあるのは当然だ。」

そして雷のリングもレヴィに渡された。

「おい、偽者ども！もし全てのリング戦が終わり、お前らの方がリングの数が多く、勝ち越すようなことがあったら、ボスの座もリングも全てお前らにくれてやる。しかし、もしお前らが負けたら、お前らの大切なものは全て、消える。」

XANXASはそう言い放った。

「明晩の対戦カードを発表します。明日の対戦は、風の守護者の対決です。」

「よし、次は俺か。」

風の男が前に出てきた。

「おい、ボンゴレの風の守護者！この前はやられたが、次は負けねえ！」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ。僕は負けない。仲間のために。」

そしてヴァリアーは消えた。

「明日は風か。椿君、大丈夫なの？」

ツナが椿に聞いた。

「楽勝だよ。次は本気でやる！」

椿は少し怒っていた。

「うん。頑張ってたね。」

そしてツナたちも帰っていった。

標的32 雷の守護者戦！（後書き）

雷戦：かなり変わりました。

もう匣を出してしまいました。

ラッジダイフルミネ

電撃光線は、即興で思いついた技です。

槍なんて出してよかったのかさえ不安です…。

次は風戦：どうしよう。

感想等お待ちしております！

標的33 風の守護者戦!

次の日の深夜の並中

ツナたちとヴァリアーは体育館の前にいた。

「どこでやるんだろう？」

「「こちらです。」」

体育館の上からチェルベッロが降りてきた。

「風の守護者は上に上がってください。ファミリーの皆さんには、こちらのモニターで戦いを見ていただきます。」

体育館の入り口の上に大きなモニターがあった。

そして、椿と風の男は体育館の上にながろうとしていた。

「今のうちにやっておくか！」

恒例の円陣が始まった。

「椿——ファイト!!!!」「」「」「」「オー!」「」「」「」

そして体育館の上に上がった。

体育館の上には、たくさんの大型扇風機が合った

「このフィールドは、周りについている扇風機で風が吹き荒れる仕組みになっております。では、風のリング、シルス・フェリエルVS飛川椿、バトル開始!」

開始と同時に扇風機のスイッチが入り、風が吹き荒れた。

「はじめようか。」

椿はそう言って、右手で獅子風・刃無刀を抜いた。

「言われるまでもない！」

シルスは鉤爪をつけた。

「神風一刀流！」

椿は刀を右上に、切先を相手に向けて構え、左手を添えた。

「突風！」

その声と同時に、シルスに突っ込んでいった。

吹き荒れる風に吞まれることもなく突っ込んでいき、シルスに突きを繰り出した。

それはシルスに直撃して、シルスは吹っ飛んでいった。

「これこそ風だな。」

モニターの前にいたりボーンが言った。

「ファミリーの危機にいち早く駆けつけ、敵をなぎ払う神風。それが風の守護者の指名だからな。」

「神風二刀流！」

そして椿は休むまもなく、獅子風・刃無刀を左手に持ち替え、右手で獅子風・全刃刀を抜き、獅子風・刃無刀を、地面と平行に、軽く宙に投げ、回転して獅子風・刃無刀の柄頭を獅子風・全刃刀で叩き飛ばした。

「風の矢！」

獅子風・刃無刀は、吹っ飛んだシルスに追いついて、追い討ちをかけた。

そして椿は、風によって戻ってきた獅子風・刃無刀をキャッチした。

「げほっ！ テメエ！」

吹き飛んだシルスは椿に叫んだ。

「まだ意識があったのか。なら、神風二刀流！」

椿は獅子風・刃無刀を縦に宙に投げて、獅子風・全刃刀で、獅子風・刃無刀の刀身を攻撃して、回転させながら飛ばした。

「風車！」

飛ばされた獅子風・刃無刀は、見事にシルスに当たった。

そして、椿は走って獅子風・刃無刀を拾った。

「これで最後にしようか。何も喋らせなくてごめんね。神風一刀流！」

椿は獅子風を二つとも鞘に収め、獅子風・刃無刀で、抜刀術の構え

をとった。

「あれ、一体何なんだ？」

山本は獄寺に聞いた。

「そんなのも知らねえのか！お前、黒曜ランドで、アニマル野郎に使っただろうが！抜刀術ってのはなあ、鞘から刀を抜くときに、鞘から刀を抜いたときの反動で、刀の速さが加速するんだよ！覚えとけ！」

「もうちょっと分かりやすく説明してくれねえかな？」

山本は獄寺の言っている意味が分からなかった。

「他の奴に聞け、野球馬鹿！」

「山本君、俺が教えてやるよ。抜刀術は、刀の速さが加速するんだけど、鞘から刀を抜くときに、デコピンをする時みたいに刀が早くなるんだよ。」

圭斗が簡単に教えた。

「なるほど、デコピンと同じなのか。」

山本は納得してモニターを見た。

「神風！」

椿は、神速でシルスの目の前まで来て、抜刀と同時に超神速で三連

撃切り上げた。

シルスは上に飛ばされたが、椿はすぐに風のリングを取り、リングを完成させた。

「僕の勝ちですね！」

シルスは気絶して落ちてきた。

「風のリング戦は、飛川椿の勝ちです。明日の対戦カードを発表します。明晩の対戦は、嵐の守護者同士の対戦です。」

椿は皆のところに戻ってきた。

「ただいま！」

「この勝負…ほとんど見えなかった。」

楓は啞然としていた。

「まあいいじゃん。これでリングの数は2対2だね。」

「2対3だ。」

XANXASが口を開いた。

「リングは十個で偶数だから、大空は二個分になる。残念だったな。偽者ども。」

そしてヴァリアーはシルスを連れて帰った。

「マジかよ…。」

「悔やんでもしょうがないって。それより獄寺君、修行は完成したの？」

椿は風のリングをツナに渡しながら言った。

「も…もちろんだ。任せろ！」

獄寺はそう言ったが、冷や汗をかいていた。

「そう？ならいいや。帰ろうか。」

そしてツナたちは帰っていった。

標的33 風の守護者戦！（後書き）

風戦：シルスは何の意味があつてここに来たのか分からなくなつて
しまいますね。

とりあえず、次は嵐です。

どんどんアニメを変えていくつもりなので、楽しみにしてください！
さい！

感想等お待ちしております！

標的34 嵐の守護者戦!

次の日の深夜の並盛中

ツナたちとバジルを含めたファミリーは、校舎の三階で獄寺を待っていた。

「あの時計が十一時をさすまでに獄寺氏がこなかった場合、ヴァリアー側の不戦勝とします。」

そして、十一時になるまで数秒になった頃、時計にボムが当たり爆破した。

「お待ちせしました、十代目! 獄寺隼人、行けます!」

「時間に間に合ったので、バトルへの参加を認めます。今回のバトルフィールドは、この校舎三階の教室を含めた全体です。フィールド中に、ハリケーントービンが無数に仕掛けられていて、バトル開始から15分経つと順次爆破し、この階を完全に破壊します。そして、全てのハリケーントービンが爆発したときは、両者共に失格とします。今回のバトルは、観覧席を設けましたので、そこから出るようにしてください。出た場合は失格とします。」

「では、別れる前にいつもの行くぞー!」

そして、円陣を組んだ。

「獄寺ーーファイト!!!!」「」「」「」「オー!」「」「」「」

「ランボさん、あれで遊ぶもんね!」

ランボがハリケーntタービンに向かって走っていった。

「ランボ！あれは遊び道具じゃないんだ！ここでおとなしくしててくれ。」

「つまんないの。」

そしてツナたちは観覧席に移動し、獄寺とヴァリアーの嵐の守護者は中央へ移動した。

「肩に力入りすぎだぜ。」

そしてヴァリアーの嵐の守護者は獄寺の肩を叩いた。

「それでは、嵐のリング、ベルフェゴールVS獄寺隼人、バトル開始！」

開始と同時に獄寺は、ベルに向かって大量のボムを投げた。

「3倍ボム！」

「ついに3倍ボムを完成させたんだ！」

ボムはベルの前まで来たが、ベルは一步下がっただけだった。そして突風が来てボムが外に飛ばされた。

「くそ！」

「嵐の守護者の指名って知ってる？常に攻撃の核となり、休むこと

のない怒濤の嵐。俺には出来るけど、お前には出来ない。」

そしてベルがかなりのナイフを投げてきた。

獄寺はそれをよけていくうちに、ワイヤーのトリックに気づいた。

「やっと分かったぜ！」

獄寺はワイヤーをとって捨てた。

「お前の技のトリックはこれだ！勝負が始まる前にこれを俺につけたんだ！ここからは俺の番だぜ！食らえ！」

獄寺はボムを投げた。

しかし、ボムが飛んでいった先には、突風が吹いている。

そしてボムは途中で二度曲がり、ベルに直撃した。

「これが怒濤の嵐だぜ！」

追いつちをかけるように3倍ボムを投げ、ベルに食らわせた。

「さっきのロケットボムは、仕込んであった推進用ボムで二度曲がるんだ！」

獄寺は誇らしげに言った。

「流しちゃったよ。王族の血を。」

ベルが先ほどとは違った感じだった。

「なんだこいつ…でも一気に行くしかねえ！ジェットボム！」

獄寺はロケットボムを壁や床に向かって投げた。

「どこに投げてんの。」

「見てりゃ分かるさ。」

ボムが床や壁に当たったとき、推進用のボムが爆発して一気にベルに当たり、爆発した。

「これで終わりだ！」

そしてロケットボムをもう一度ベルに投げた。
煙が晴れると、ベルは瀕死の状態で倒れていた。

「さっさとリングとって帰るか。」

ベルの首についたリングを取って、自分のリングと合わせた。

「十代目！俺、やりました！」

「この戦いの勝者は、獄寺隼人です。」

ハリケーンタービンは止まり、観覧席の赤外線も消えた。

「やったよ獄寺君！」

「明晩の対戦カードを発表します。明晩の対戦は、雨の守護者同士の戦いです。」

「これで3対3。山本、次負けたらゆるさねえぞ！」

「任せとけ。」

そしてツナたちとヴァリアーは帰っていった。

標的34 嵐の守護者戦! (後書き)

嵐戦、勝っちゃいました。

どうしよう…まあなんとかありますよね。

ジェットボムもとりあえず出せました。

もうすでにアニメ扱いではなくなっている気がしますね。

感想等お待ちしております。

標的35 雨の守護者戦！

次の日の深夜の並中

ツナたちは南館の外のパニターの前にいた。

「山本…大丈夫かなあ？」

「どんどん足場がなくなっていくフィールドだもんね。ほかに仕掛けはないみたいだけど。」

アニメとは違って、鮫は放たれないようになっていた。

「では、雨のリング、スペルビ・スクアアロvs山本武、バトル開始！」

開始と同時に、スクアアロが突撃してきて、攻撃してきた。それを山本は時雨金時で防いだ。

「あの竹刀、何？」

椿はツナに聞いた。

「時雨蒼燕流の継承者が代々継承してきた竹刀で、時雨蒼燕流で抜くと刀に変形する、時雨蒼燕流専用の刀なんだ。」

スクアアロは刀から火薬を出し、山本に攻撃し、水しぶきが上がった。

しかし、そこから雲のようなものが出てきた。

山本は無事で、逆手に刀を持っていた。

「あれは、時雨蒼燕流、守式七の型、繁吹き雨^{しぶぎあめ}。」

リボーンが言った。

「う、おおおい！頭に乘るな！ひよつこが！」

スクアアロは、走って山本に突っ込んでいき、仕込み火薬を飛ばした。

山本は左右を水で塞がれてしまった。

「こんなときは…。」

山本は切先を水につけ、そこから水を巻き上げた。

「時雨蒼燕流、守式二の型、逆巻く雨^{さかまくあめ}だな。」

そして、水が止まった頃、山本が初めてスクアアロに突っ込んでいった。

「デメエの剣術は全て見切っているぞ！」

スクアアロがそう言って防御の体制に入った。

山本が抜刀術のような構えをとった。

「さあ撃て、秋雨を！」

（秋雨？そんなの聞いてねえぜ。親父の教えてくれた八の型は…そうか、そういうことだったのかよ。）

両者がお互いに突っ込んでいき、山本の時雨金時が刀に変形した。

「時雨蒼燕流、攻式八の型、篠突く雨。しのつくあめ」

そしてスクアアロを攻撃した。

「貴様！時雨蒼燕流以外の技も使えるのか！？それに、峰を使うのもげせねえ。」

「いや、今のも時雨蒼燕流だぜ。篠突く雨は、親父の作った型だ。そろそろ俺も行ってみつか。時雨蒼燕流、九の型。」

そういつて山本は、水をスクアアロの上に巻き上げた。

そして飛び上がって、水をスクアアロに斬り飛ばして、自分も刀を突くように落ちていった。

「雷雨！らいいう」

山本の飛ばした水によって、スクアアロは身動きをとりにくかったが、攻撃を何とかかわした。

しかし、時雨金時が地面に突き刺さる前に山本はスクアアロを峰で攻撃した。

「何！」

「これこそ、戦いを清算し、全てを洗い流す鎮魂歌レクイエムの雨だな。」

スクアアロは壁に激突した。

「くそっ！しかしその技も見切ったぞ！」

そしてスクアアロは水をえぐりながら駆けていった。
そして山本は野球の構えをした。

「時雨蒼燕流、攻式十の型。」

山本は逆巻く雨で避けた。

しかしスクアアロもそこに向かって走っていった。

そして、スクアアロの後ろに山本が現れた。

「俺の剣に死角はねえ。」

スクアアロの手は義手で、山本を貫いた。

しかし、それは水面に映った影で、本物の山本はスクアアロの前から攻撃してきた。

「うつし雨！」

そして、攻撃と同時にスクアアロのリングを取った。

「勝ったぜ！」

そして山本はスクアアロを担いで出てきた。

「雨のリングの争奪戦は、山本武の勝利です。そして、明晩の対戦は、雪のリングの対決です。」

「いよいよね。」

「まだ、4対3で余裕はあるが、ここでリーチにしておきたいところ

ろだな。」

リボンが言った。

「楓ちゃん、明日、頑張ってね。」

「もちろん！」

そしてツナたちとヴァリアーは帰っていった。

標的35 雨の守護者戦！（後書き）

雨のリング戦も勝ちました。

これからどうするか、考えないとまずい状況です。

とりあえず、次の雪戦、頑張って書きます。

あと、いつの間にか、アクセス数が10000を突破していました。

この小説を読んでいただいている皆様、ありがとうございます。

そして、これからもよろしく願います。

感想等お待ちしております！

標的36 雪の守護者戦!

次の日の深夜の並中

獄寺たちはチェルベツロに言われるがまま、プールに来了。
ちなみにツナは、修行で来れなかった。

「何だこれ!？」

プールに着いた獄寺の第一声だった。

「水が凍ってるし、人工の雪まで降ってる。」

楓の言ったとおり、プールの水は凍って氷になり、空から雪が降り、氷の上やプールサイドには、雪が積もっていた。

「ようこそ、今回のバトルフィールドへ。このフィールドの気温は-5℃、トラップも何もありません。早速ですがバトルを始めます。」

そしてフロウと楓はフィールドの中央、プールのど真ん中に来た。

「では、雪のリング、フロウ・レイストvs篠村楓、バトル開始!」

開始と同時に楓は銃弾を氷に向かって発射した。

そこからはえんまくが上がり、二人の姿が見えなくなった。

「さっさと終わらせないと!」

えんまくの中から楓が出てきて、銃に弾を一つ入れて発射した。

「っ！！！！」

その弾はフロウの肩に見事に当たった。

そしてえんまくが晴れ、氷の上に立っていたフロウの肩から血が出ていた。

「このまま一気に終わらせてあげる！」

楓は銃に銃弾を四つ入れ、フロウの両手両足に一発ずつ撃った。その銃弾も見事に当たって、霧のようなものが出てきた。

「すげえな。楓の奴、ちゃんと守護者の指名も体現してやがる。」

「雪の守護者の指名って、何なんですか？リボンさん。」

「雪の守護者の指名は、敵の動きを止めファミリーに攻撃をさせない、鉄壁の吹雪となることだ。」

そんな話をしているうちに、フロウの銃弾が撃たれた所から出ていた霧が晴れ、フロウの手が凍り付いていた。

「-5℃じゃ、その氷は解けないでしょ。」

「…。」

そして楓が、弾を六つ銃に入れた。

その間にフロウが両手の氷をぶつけ合って、氷を割った。

そして、銃を取って、足の氷も割り、楓に突っ込んできた。

楓は銃で攻撃したが、紙一重で避けられ、フロウは殴りかかってき

た。

それを楓は華麗に飛んで避けたが、着地した場所には雪が積もっていた。

「しまった！」

楓は着地と同時に雪に足をとられ、目の前には銃を構えたフロウがいた。

「…雪のリング…俺のもの。」

フロウが引き金を引こうとした瞬間、ボムが飛んできた。

「大切な仲間を殺させはしねえぜ！」

ロケットボムを持った獄寺が言った。
そしてフロウは銃をしまった。

「…俺の勝ち。」

「ただいまのバトルの結果を発表します。獄寺隼人の妨害により、フロウ・レイストの勝利とします。そして、嵐のリングもヴァリアー側のものとします。」

獄寺が指に嵌めていた、嵐のリングを取られ、ベルフェゴールに渡された。

「王子すげえ、何もしなくてもリング貰えたよ。」

自画自賛していた。

「獄寺：お前：。」

「良いんだよ。十代目がいてもこうしただろうからな。」

「明日の対戦カードを発表します。明日の対戦は、霧の守護者同士の対決です。」

そしてチエルベツロとヴァリアーは消えた。

「みんな：ごめん。」

「しょうがねえって。お前が死ななくてよかったと思うぜ。」

山本は笑顔で言った。

「でも、これで3対5、もう後がないよ。」

楓は俯いていった。

「大丈夫、霧の守護者も勝ってくれるだろうし、俺も負けない。」

圭斗が言った。

「とりあえず帰ろうか。」

そして獄寺たちも帰っていった。

標的36 雪の守護者戦！（後書き）

雪戦！獄寺の妨害で負けました。

ツナファミリィは二回目の妨害です。

こんなことして大丈夫なんでしょうか？
とりあえず頑張ります。

感想等お待ちしております！

標的37 霧の守護者戦!

次の日の深夜の並中

体育館にツナたちは集まっていた。

ヴァリアー側の霧の守護者、マーモンもうすでにフィールドの中央にいた。

「霧の守護者って誰なんだろう？」

ツナがそんなことを言っていると、体育館に誰かが入ってきた。

「飛川椿！」

「勝負。」

いきなり俊太と蓮が現れて、襲い掛かってきた。

後ろからは犬と千種も来ていた。

椿に襲い掛かってきた二人はあっさりと倒され、すぐに起き上がって言った。

「やっぱり強くなったな。今回は霧の守護者を連れてきた。骸さんが霧の守護者に良いと思った奴だ。絶対あいつに勝ってくれるさ。」

俊太が誇らしげに言った後、後ろを向いた。

そして、黒曜の服を着た一人の少女が入ってきた。

「我名はクローム、クローム・髑髏。」

そのクロームは、パーナツプルヘアーで三叉の槍を持っており、右

目に眼帯をつけていた。

「十代目！こいつ六道骸「じゃないよ。」…へ？」

ツナに骸ではないと言われ、驚きを隠せない獄寺をよそに、クロームがツナに近づいていった。

「庇ってくれるんだ。」

そしてクロームはツナの頬にキスをした。

「じゃあ私も。」

楓もツナに近づき、クロームとは反対の頬にキスをした。

「ツナはモテモテだな。」

「何してんだテメェら！」

獄寺は怒り来るって叫んでいた。

「挨拶。」

「なんとなく。」

二人は普通の顔で獄寺に返した。

「とりあえず、クローム、頼んだよ。」

「分かった、ボス。」

そしてクロームも、フィールドの中央に行った。

「今回のフィールドは体育館全体で、館内にある物はなにを使っても構いません。特に仕掛けもありません。」

「何もないの？」

「霧の守護者の指名は、ない物がある物とし、ある物をない物とすることで、敵を惑わし、ファミリーの実態をつかませない、まやかし of 幻影だからな。」

「では、霧の対戦、マーモンVSクローム髑髏、バトル開始！」

開始と同時にクロームが、幻覚で攻撃を繰り出していった。始めは、地獄道のようなものを、次に畜生道を、そして火柱を使って攻撃していった。

「君の幻覚は一級品だが、弱点も幻覚。」

マーモンが幻覚で火柱を凍らせた。

その時、リボーンのおしゃぶりが光った。

マーモンの頭に乗っていた蛙も蛇になっていて、藍色のおしゃぶりが光っていた。

「さあ、じっくりと遊んであげよう。」

マーモンはそう言って、クロームを完全に氷で包んでしまった。そしてハンマーのような幻覚でマーモンがクロームに攻撃しようとしたが、花の幻覚によって、マーモンは動きを封じられてしまった。

「クフフ、あなたに負けるほど、私は弱くない。」

そして、クロームの幻覚で、体育館の所々が壊れ、大量の火柱が出てきた。

しかし、マーモンの幻覚で火柱は凍り、マーモンがクロームに向かってきた。

「これで終わり。」

クロームがそう言うと、ファンタズマと呼ばれる蛇がマーモンの首を絞めた。

「やめろ、ファンタズマ！むぎゅ！」

その瞬間、マーモンが爆破し、クロームのもとにマーモンの持っていたきりのハーフボンゴレリングが落ちてきた。

そしてクロームがボンゴレリングを完成させた。

「今回の戦いは、クローム・髑髏の勝利とします。そして、明日は、オーロラの守護者同士の対決とします。」

チエルベツロが言った後に、俊太たちが体育館の入り口に向かっていった。

「ねえ、この獅子風…。」

椿が獅子風・全刃刀、獅子風・伸縮刀を腰から外して言った。

「デメエにやるよ。」

「ありがとう。」

そして、二本の獅子風を腰に戻した。

「お前、獅子風を持っていたのか。」

ヴァリアーのオーロラの守護者が言った。

「お前と戦えないのが残念だな。」

「残念がることないよ、君の相手は僕よりはるかに強い。」

そしてツナたちとヴァリアーたちは帰っていった。

標的37 霧の守護者戦! (後書き)

やっぱり文章がグダグダ：こんな調子で大丈夫なんでしょうか？
次はオーロラ戦、頑張らないといけませんね。
感想等お待ちしております！

標的38 オーロラの守護者戦！

次の日の深夜の並中

ツナたちとランチアが校門を通ってすぐの所にいた。

そこには赤いテープが縦横5mの正方形形状に地面に貼られていた。

「ランチアさんも来たんですね。」

「俺の鍛えた守護者の戦いを見届けようと面ってな。」

そしてヴァリアーとチェルベツロが来た。

「今回のバトルフィールドはこの赤いテープの範囲内です。特殊な装置ありません。」

「じゃ、極限に円陣行くぞー！」

そしてランチアを含めた8人で円陣を組んだ

「圭斗ー！ーファイト！！」「」「」「」「オー！」「」「」「」

「行ってくる。」

圭斗がフィールドの中央に行った。

「では、オーロラのリング、ロイス・クロウスVS虹影圭斗、バトル開始！」

開始と同時に圭斗は鉄製の棒を取り出して、ロイスに突っ込んでい

った。

「先手必勝！」

ロイスは獅子風を抜き、棒を防いだ。
そして二人はいったん離れた。

「お前の棒を見てみる。」

ロイスに言われて自分の棒を見ると、獅子風とぶつかった真ん中の部分が熱で溶けて、折れていた。

「この獅子風は七代目が作った熱湯。魂をこめて十日間打ち続けた結果常に融点ぎりぎりの熱を帯びるようになった。この刀を作った金属の融点は2000℃くらいでね、普通の金属じゃ、何でもへし折っちゃうぜ。」

話を聞いている間圭斗は棒を二つに折っていた。

「ありがと、その獅子風のことを教えてくれて。」

また、圭斗はロイスに突っ込んでいった。

そして、鉄の棒で攻撃しようとしたが、ロイスの前から消え、後ろに回って攻撃した。

ロイスはその場に倒れ、圭斗はオーロラのリングをとった。

「まだだ！」

ロイスが鞘でリングを両方上に弾いた。

「まだ、戦えたの？なら。」

圭斗が棒で軽くロイスを上に乗せ、目にも止まらぬ速さで攻撃を繰り返していった。

そして最後の一撃で地面に叩きつけ、落ちてきたリングをキャッチし、完成させた。

「オーロラのリング戦は、虹影圭斗の勝利とします。」

そして圭斗が、ツナたちの所に戻ってきた。

「何もあそこまでしなくても…」

ツナが圭斗に向かって言った。

「大丈夫、圭斗君が手加減しないわけないよ。修行もしたことだし、まだ5割ってどこじゃないかな。」

「すげえな。圧倒的な力で敵を倒し、ファミリーを勝利へと導く希望のオーロラ。見事に守護者の指名を体现しやがった。」

「でも、椿君も風戦のとき、5割か6割くらいしか出さなかったんじゃないの？」

圭斗は、風戦のとき、椿が手加減したことに気づいていた。

「流石だね。」

「明日の対戦は、雲の対決です。」

そしてツナたちとヴァリアーは帰っていった。

標的38 オーロラの守護者戦！（後書き）

オーロラ戦、すぐに終わりました。

ちなみに椿と圭斗の強さは、今互角です。

次の雲戦も頑張ります。

感想等お待ちしております！

標的39 雲の守護者戦！

次の日の深夜の並中

獄寺たちはグラウンドにいた。

ツナは修行のために来れないようだ。

「なに…これ…」

「雲の守護者のバトルフィールド、クラウドグラウンドです。雲の守護者の指名、何者にもとらわれることなく、独自のたち名からファミリーを守護する孤高の浮雲。故に、もっとも過酷なフィールドを用意しました。」

フィールドには地雷やガトリング砲がつけられていた。

「それでは、雲のリング、ゴーラ・モスカVS雲雀恭弥、バトル開始！」

開始と同時に雲雀がモスカに突っ込み、トンファー頭を叩き、腕を貫いた。

ドガアアン！

モスカからリングを取って完成させた。

「これ、いい。」

雲雀はリングを投げた。

「おっと危ない。」

椿がそれを取り、雲雀のほうを向いた。

「さあ、降りておいでよ、そこに座ってる君。猿山のボス猿を倒さないで、帰れないな。」

そしてXANXASが降りてきて、雲雀が一方的に攻撃し始めた。そしてしばらくすると、雲雀にレーサーが飛んできた。

獄寺たちにもミサイルが飛んできて、椿が獅子風・刃無刀を抜いた。

「神風二刀流！」

獅子風・全刃刀も抜いた。

「かまいたち！」

二つの獅子風で衝撃波を発生させて、ミサイルを全て切り裂いた。モスカが暴走していて、椿と圭斗はそれを止めに行った。

「早く止めないと！」

椿は、モスカのいたる部分を獅子風・全刃刀で切り裂き中身は斬らないようにしていた。

そして、中から九代目が出てきた。

「この人、九代目！」

「誰だ、モスカごと九代目を切り裂いたのは。」

そこにツナが飛んできて、リボンとバジルが走ってきた。

「よくも九代目を。九代目への卑劣な仕打ちは実子であるXANXASへの、そして、ボンゴレへの挑戦と受け取った。俺は九代目のために、敵を討つ。」

「何があったんだ。」

椿は今までのことを全て話した。

「XANXAS、そのリングは返してもらう。お前に、九代目のあとは継がせない！」

「九代目の弔い合戦は、我々が仕切ります。我々はこの戦いを、大空のリング戦と位置づけます。明晩並中にお集まりください。」

そしてXANXASが、ツナに大空のハーフボンゴレリングを飛ばした。

その後ディーノとその部下が来て、九代目を病院へ運んだ。そしてツナたちも家に帰った。

標的39 雲の守護者戦! (後書き)

雲のリング戦、色々飛ばしすぎな気もしましたが、終わりました。
次は大空戦、頑張ります!
感想等お待ちしております!

標的40 大空戦、開始！

次の日の深夜の並中

ツナたちは京子にもらったお守りを持って集まっていた。

ツナの守護者もヴァリアーの守護者も全員集まった。

「うゝおおおい！さっさと始めるぞ！」

そして守護者のリングを全て回収され、リストバンドを渡され、円陣を組んだ後、全員それぞれのバトルフィールドへと向かった。

守護者が戦った場所には、ポールがあり、その上にはリングが置かれていた。

そして守護者全員にデスヒーターが注入され、XAMXASとツナにチェーンが渡された。

観覧車も観覧席に移動し、リボーンはツナに小言弾を撃った。

「全てを包み、全てを包容することが大空の指名。では、大空のリング戦、XANXASvs沢田綱吉、バトル開始！」

そして、大空戦が始まった。

その頃椿は

「そろそろいいかな。」

椿は平然と立ち上がり、風のリングで解毒して、シルスをロープで縛ってから解毒した。

「お前、毒は効かなかったのか。」

「効いたよ。でも、修行のおかげで大丈夫だった。」

そして椿は体育館の前に飛び降り、体育館に入っていた。

「椿殿が…毒が効いていない？」

観覧席でバジルが驚いていた。

「あいつはすげえからな。圭斗だってもう解毒してやがるぞ。」

圭斗も解毒していて、ロイスを縛って解毒し、プールに向っていた。

「急がないと！」

そんな感じでプールに到着し、楓を解毒して、フロウもロープで縛って解毒した。

「ありがとう。圭斗くん。」

「とりあえず、獄寺君とランボを助けに行こうか。」

圭斗と楓は、少し警戒しながら嵐のフィールド、雷のフィールドに向かった。

シルス、フロウ、ロイスはロープを自分で解き、自由になっていた。

「「「あいつら！絶対倒す！」」」

遠くにいた三人の声がハモリ、それぞれどこかへいった。

その頃体育館

クロームとマーモンの解毒をし終わった椿の後ろに、シルスがいた。

「このまま俺が何もしないと思ったか！」

そしてシルスがマーモンの縄を解き、一緒に戦うことになった。

「この前の勝負の屈辱は必ず返すよ。」

「しょうがない。」

そして、椿が獅子風・刃無刀を抜いた瞬間、体育館にロイスがやってきた。

「お前の3本の獅子風、俺が貰う！」

「なんで君まで来るんだい？君の相手は違うところにいったよ。」

マーモンが聞いた。

「獅子風を手に入れるためだ。この刀はすごい力を持っているからな。さっさと始めるぜ！」

そして、3vs2の戦いが始まった。

標的40 大空戦、開始！（後書き）

話が進むのが早すぎるし、グダグダな文章ですみません。
もうちょっと丁寧に書いていかないと。

感想等お待ちしております！

標的41 守護者達の戦い！

体育館にでは、クローム、椿とマーモン、シルス、ロイスが戦いを始めていた。

「僕の幻術で倒してあげるよ。」

マーモンの幻術で体育館の中が凍りついた。

「なら君から倒そう。神風一刀流！」

椿は抜刀術の構えをとった。

「ムムツ、その技は。させないよ！」

マーモンが吹雪の幻覚を出したが、椿には効かなかった。

「神風！」

椿は獅子風・刃無刀を抜き、マーモンに攻撃した。

マーモンは攻撃で飛ばされたが、霧となって消えてしまった。

「それは幻覚、本物は。」

クロームが椿に言っていると、クロームの後ろにロイスがいた。

「霧のリングはいただく！」

そして獅子風・熱刀で攻撃しようとした瞬間、天井が壊れた。

「なんだ！」

「神風一刀流！神風！」

シルスが上を見上げていると、椿に攻撃されてしまった。
そして上に飛ばされ、気絶した。

「くそっ、霧の女はどこに行った！」

「……」

「……」

「……」

クロームが何人も出てきた。

「くそっ、全員斬るしかねえ！」

そしてロイスがたくさんのクロームを一人一人斬っていった。

「無駄無駄、クロームは全部幻覚、本物を見つけるのは君には無理だね。」

そして椿がロイスに突っ込んでいった。

その頃の雷のフィールド
XANXASによって解毒されたレヴィがランボを殺そうとしてい

た。

「待ちな。」

レヴィの前に圭斗が来た。

「この子は俺が守る。」

「やれるものな…。」

レヴィが喋り終わる前に圭斗がレヴィを倒した。

「普通にうざいと思ったんで、やっちゃいました。」

そしてレヴィから、雷のリングを取り、ランボを助けた。

「…ランボさん、復活！」

ランボが飛び上がった。

「相変わらず元気だね。絶対俺から離れちゃダメだよ。」

「えーっつまんない。」

ランボはそんなことを言いながら圭斗についていき、雨のフィールドへ向かった。

一方嵐のフィールド
ベルフェゴールが解毒されていて、自由になっていた。

「待ちなさい！」

一発の弾丸で嵐のリングが弾かれた。
そしてリングの飛んでいった先には、楓がいた。

「お前誰だよ？」

「篠村楓、覚えておいたほうが良いよ。」

そして二発の弾丸をベルの両手に撃った。
そしてベルの両手が凍った。

「とりあえず動かないでね。」

二発の弾丸をベルの足に撃ち、動けなくした。
そして獄寺を解毒した。

「ありがとな。」

そして、二人は晴れのフィールドに向かった。

一方体育館

椿がロイスを攻撃しようとしたが、マーモンの幻術で防がれた。

「僕を忘れてもらっちゃ困るよ。」

マーモンが大量に出てきて、椿に集中攻撃し始めた。
すると、火柱が出てきて、幻術のマーモンが全て焼け焦げた。

「こっちは任せて…。」

「ありがとう。」

そしてロイスと椿が戦い始めた。

ロイスは獅子風・熱刀で、攻撃してきた。

椿は獅子風・全刃刀を鞘に収め、ロイスの攻撃を華麗に避けていた。

「どうした。逃げてばかりじゃ勝てないぜ！」

「君の実力を見たかっただけだよ。」

そしてロイスの後ろに回り、獅子風・刃無刀で、攻撃し、倒した。すると、体育館に雲雀が入ってきた。

「これは、君がやったのかい？」

雲雀が倒れたシルスとロイスを見て言った

「はい。」

「なら僕とも戦いなよ。」

そして雲雀が椿に突っ込んできた。

雲雀が椿に攻撃してきたが、椿は避け続けていた。

「待ってください。僕はあなたと戦う気は…」

「君にその気がなくても僕にはあるんだよ。」

そして、雲雀がトンファーで攻撃したとき、獅子風・刃無刀で防いだ。

その時、

ドカァァン！

グラウンドの方向で爆発音がした。

「あれ、何の音？」

「あれは、多分ツナ君が何かやったのかな。」

グラウンドでは、ツナが死ぬ気の零地点突破をした後だった。倒れていたツナが炎を出し、起き上がった。

「零地点突破はそんな技ではない！」

XANXASが笑いながら言った。

そして銃を撃とうとしたとき、ツナが零地点突破の構えをした。

そして、零地点突破の構えから、手の形を四角に変えた。

「零地点突破・改。」

「零地点突破にそんな構えはねえ！決別の一撃！」
コルボダッデイオ

その攻撃はツナに直撃した。

ツナは倒されたかのように思われたが、起き上がり、XANXAS

への反撃を始めた。

一方雨のフィールド

楓たちが到着した頃にはすでに誰もいなく、雨のリングも無くなっていた。

「あいづら、どうやって助かったんだ。」

「とりあえず。体育館に行こう。戦いが始まってる。」

そして楓と獄寺は体育館に向かった。

一方晴れのフィールド

圭斗が良平とルッスーリアを助けた。

「極限に助かったぞ！」

「良いつてことです。それより早く体育館に行かないと。」

「ランボさん、退屈だもんね。」

そして、三人は体育館に向かった。

標的41 守護者達の戦い！（後書き）

とりあえずここまでです。

どこで終わらせて良いか分からず、長くなってしまいました。

後1話か2話くらいで大空戦も終わると思います。

感想等お待ちしております！

標的42 決着と別れ!

体育館では、戦いが続いていた。

そして、体育館に誰かが入ってきた。

「うゝおおおい！マーモン、助けに来てやったぞ！」

「しししつ、あの女は来てないのかよ。」

「ボスには向かうものは排除する。」

「…。」

スクアアロとベルとレヴィとフロウだった。

「なんだい、君たち。並中の風紀を乱すなら、僕が許さないよ。」

「タイミング悪くない？」

「リングをよこせ！」

スクアアロとレヴィが突っ込んできて、椿と雲雀が相手をした。

「怪我してるのか、なら早く終わりそうだね。」

椿がスクアアロを獅子風・刃無刀で攻撃し、壁に飛ばした。

雲雀もレヴィを一撃で倒していた。

「やっべ、これじゃ俺たちの負けじゃん。」

ベルが一步下がったその時

「マキシмумキャノン
極限太陽！」

体育館が完全に壊れた。

それと同時にマーモンをクロームが倒し、マーモンの幻覚が解けた。

「遅くなってすまん。」

「もうちょっとましなやり方は無かったですか？」

椿が瓦礫の中から出てきて、良平に言った。

そこには、雲雀、クローム、椿以外の守護者全員がいた。

そして、雲雀、クロームも瓦礫の中から出てきた。

「これで守護者のリングは全部揃ったな。」

山本が笑顔で言った。

そして、全員でグラウンドへ向かった。

もちろん雲雀は皆から離れて。

椿たちがグラウンドに着いたときには、XANXUSが凍り付いていた。

「さすが十代目！」

「これで終わったのか？」

そして皆で喜んでいると、ボロボロのヴァリアーの守護者達がやってきた。

そして、“ゆりかご”のこと、XANXUSの過去のことを話した。

「そのリングは…返して…もらう。」

ヴァリアーは臨戦態勢に入っていた。

「テメエらボロボロじゃねえか！戦っても意味ねえぜ！」

「何…いつてるん…だい？君たちの相手は、総勢50名のヴァリアー隊だよ。」

ベルがナイフでチェルベツロたちを倒した。

そして、黒服の男三人がきた。

「報告します。我々以外のヴァリアー隊、全滅。奴は強すぎます。鬼神のごとき男がこちらに向かって…」

「風蛇烈覇！」

そして三人の男が飛ばされていった。

「取り違えるなよボンゴレ、俺は助けに来たのではない。久しぶりに暴れに来た。」

「もう終わりました…。」

「そうなのか。」

「結果を発表します。今回のリング争奪戦の勝者は、沢田綱吉と、その守護者となります！よって、ボンゴレの時期後継者は、沢田綱吉とその守護者となります！」

そして、ツナが倒れた。

「じゃあ、帰ろうか。」

椿たちは帰っていった。

次の日

椿たちは山本の家に行った。

そしてツナたちが来た。

「来たな！」

そしてパーティが始まった。

守護者は全員ボンゴリングをつけていた。

その日はとにかく騒いで、皆で楽しく寿司を食べた。

そんな中、バジルが一人で出て行った。

「待って！何も言わずにイタリアに帰っちゃうなんて！」

バジルを追いかけて、ツナが走ってきた。

「沢田殿、急な招集がかかったもので。」

「そうなんだ。」

「これをお渡ししておきます。沢田殿に合うかは分かりませんが…。」

バジルに死ぬ気丸を渡された。

「では…。」

「じゃあね。」

そしてバジルと分かれ、家に帰っていった。

標的42 決着と別れ！（後書き）

大空戦終わりました。

アニメと違うようになって良かったと思っています。

これからも頑張ります。

感想等お待ちしております！

登場人物紹介5 未来編オリキャラプロフィール

カリメル・クライス

性別	男性
年齢	24歳
誕生日	9月4日
身長	182cm
体重	61kg
性格	無口な青年
容姿	目は鋭く、色は紫 顔は普通の顔 髪は短めで、黒に少し紫を混ぜたような色

クレイア・レイス

性別	男性
年齢	30歳
誕生日	4月1日
身長	186cm
体重	66kg
性格	特に変な所は無い普通の青年
容姿	目は大きめで、黒色 顔は普通の顔 髪は普通の長さで、黒色

過去に一度椿に会ったことがある。

ケリス・レイド

性別	男性
年齢	20歳
誕生日	11月21日
身長	170cm
体重	52kg
性格	元気な青年
容姿	目は普通の大きさで、色は群青色 顔は頬に三本の傷がある普通の顔 髪は少し長めで、黒色

登場人物紹介5 未来編オリキャラプロフィール（後書き）

全員六弔花です。

その他は特になしです。

標的43 未来!

リング争奪戦が終わって二日、ツナの家に向かっていた。
椿の腰には獅子風が四本あった。

「この獅子風、何で家にあっただろう? まあ良いや。久しぶりの
学校な気がするな。」

そんなことを言っていると、後ろから飛んできた十年バズーカに当
たってしまった。

「えっ? 何?」

そして、十年後の世界、椿は森の中にある棺桶の前にいた。

「この棺桶、ツナ君の…。」

そして、後ろから見知らぬ女性が歩いてきた。

「はじめまして。そして、さようなら。」

女性は指輪についていたチェーンを外し、藍色の死ぬ気の炎を灯し
た。

そして腕についていた武器で攻撃してきた。

「良く分からないけど、戦わなければいけないようだね。早速これ
を使ってみようかな。」

椿は獅子風・熱刀を抜いて、女性の武器を攻撃した。

武器は見事に溶けて、いびつな形になってしまった。

「何！？まあいい…。」

女性は驚きつつも冷静さを取り戻し、違う指輪に紫の死ぬ気の炎を灯した。

そして腰に付いていた匣に、注入した。

そこから、紫の死ぬ気の炎を出したムカデが出てきて、椿の方へ飛んできた。

椿は獅子風・熱刀を鞘に収め、獅子風・刃無刀を抜いた。

「神風一刀流！」

椿は獅子風を逆手に持った。

「竜巻！」

椿はムカデを跳ね返し、女性の方向へ飛ばした。

「ぐっ！」

ムカデが女性の腹に直撃した。

そして椿は女性の後ろに回り込み、獅子風・全刃刀の刃を女性の首の前に出した。。

「おとなしく負けを認めてください。」

「死ぬ気の炎を使わずにこの強さとは、恐ろしい奴だな。合格だ。」

「合格？」

椿は獅子風を鞘に収めた。

「俺の名はラル・ミルチ、このチェーンをボンゴリングに巻きつけて、ついて来い！」

「そういえば五分たったはずなのに過去に戻れない……。」

椿はそんなことを言いながら、ラル・ミルチに渡されたチェーンを巻きつけ、ついて行った。

走っている間、ラル・ミルチが未来のことについていろいろ話していた。

そしてしばらく進むと、謎の男に会った。

「よお、椿じゃねえか。でも縮んでねえか？」

十年後の山本だった。

「十年前から来たんです。」

「そうか。俺は門外顧問からの使者を迎えに来たんだ。とりあえずアジトに行くか。」

そして、山本にしばらくついていくと、謎の階段が見えてきた。

そして山本がリングから青い炎を出して匣に注入した。

そこからは青い炎を纏った燕が出てきて、雨を降らせた。

「降りるぜ。」

階段を下りると、レーザーのようなものが出た謎の装置があった。

椿と山本はそこを普通に通っていったが、ラル・ミルチは倒れてしまった。

「大丈夫だ、とりあえず行くぜ。」

そして前に進んでいった。

応接室と書かれた部屋に入り、この時代のツナがどうなったのかを言われた。

「そうなんですか。」

「タメ口で良いぜ。敬語だとやりづらくてな。」

「そう？ならいいや。」

そんな中、山本が、部屋の棚から匣を取り出した。

「これはこの時代のお前が使っていた匣だ。」

椿は山本に匣を渡された。

その匣は、全体の白い匣だった。

「中身は何？」

「風フェネック、F e n n e c フェネック d i デイ v e n t o ヴェントだ。
二匹入ってるぜ。」

「とりあえず、死ぬ気の炎の使い方教えて？」

「いいぜ。ついて来いよ。」

そして、山本と椿はトレーニングルームに行った。

「死ぬ気の炎はな、覚悟を炎に変えるイメージで出すんだ。やってみろ。」

山本が死ぬ気の炎を出しながら言った。

「分かった。」

そして、椿はボンゴレリングから大量の死ぬ気の炎を出した。

「…。」

山本が啞然としていた。

「これが死ぬ気の炎か。透明な炎だね。」

椿はその炎をさつき渡された匣に注入した。

「出ておいで。」

そしてフェネックが二匹出てきた。

「君たちの名前はチェーラとミーアだよ。」

二匹のフェネックの頭を撫でながら言った。

「すげえな、この時代のお前もそう呼んでたぜ。何でそんな名前にしたんだ？この時代のお前は何も言ってくれなかったけど。」

「僕の名前をイタリア語にすると、カーメリア c a m e l i a、チェーラとミ
ーアのつづりは c e l a と m i a だから、その二つをつなげて並べ
替えると、c a m i l i a になるんだよ。」

チェーラとミーアを撫でながら言っていた。
そして、二匹を匣戻して、応接室に戻った。

標的43 未来！（後書き）

椿の匣は、風フェネックです。
無事に出せてよかった。
感想等お待ちしております！

標的44 未来の守護者達！

応接室に着くと、十年後の獄寺がいた。

「椿か、十年前に戻れないらしいな。」

「まあね。でも、そのうち戻れるはずだよ。」

椿はのんきに言った

「死ぬ気の炎の使い方は分かったのか？」

「だいたいはね。」

「じゃあ炎の特徴は知ってるか？」

「炎の特徴って何？」

椿が興味津々になって聞き始めた。

「炎の特徴とは、大空、嵐、雨、雷、晴れ、霧、雲、雪、風、オーロラのすべての炎に存在する、それぞれの炎特有の能力のことだ。風の炎の特徴は、“無効化” 炎圧相応のものを無効化にできる。使いは主に炎の特徴を無効化することだな。」

「へえ。」

そういいながら椿は死ぬ気の炎を出していた。

「まあ頑張れよ。今の俺たちでも、過去の俺たちでもお前の相手になるほど強くない。圭斗だけだろうな、お前と互角に戦えるのは。」

そして、応接室に誰かが来た。

「隼人ー、瓜どこに行った…って、椿？」

十年後の楓だった。

髪が伸びて、顔も大人びていた。

楓は椿を見て啞然としていた。

「楓ちゃん？」

「十年前から来たのよね。」

楓は我に戻った。

「で、何の用だ？」

「瓜がどこにもいないの。」

「マジかよ！探してくる！」

そして獄寺が部屋から出て行った。

そして、山本はいつの間にか寝ていた。

「そうだ、椿。9？《トゥリニノーヴェ》って知ってる？」

「9？《トゥリニノーヴェ》？」

「ミルフィオーレのボス、百蘭が集めている究極権力の鍵で、ボンゴレリング、マールレリング、アルコバレーノのおしゃぶりのそれぞれ九つから出来ているの。」

「九つ？ボンゴレリングは10個あるはずだけど…。」

「オーロラだけが9？《トゥリニノーヴェ》に入っていないの。オーロラはボンゴレリングにしかない幻の属性だからね。だから、あなたのボンゴレリングも百蘭に狙われてるの。気をつけてね。」

そして、楓も部屋を出て行った。

「9？《トゥリニノーヴェ》か…。」

気づけば時刻は午後九時。

椿はソファに寝転び、眠りについた。

標的44 未来の守護者達！（後書き）

十年後の獄寺と楓が出てきました。

風の炎の特徴も、これから活躍すると思うので楽しみにしていたく
ださい。

感想等お待ちしております！

標的45 過去の仲間達！

ピー ピー ピー

警報音と共に椿と山本は起きた。

『今アジトにいる皆さんは、作戦室に来てください！』

「椿、行くぜ！」

そして山本と椿は部屋を出て行った。

そして作戦室

椿と山本、獄寺、楓、ラル・ミルチが集まった。

ラル・ミルチの腕の武器は、いつの間にか直されていた。

「何があつた、ジャンニーニ！」

獄寺が、そういった後、いすに座っていた、ジャンニーニと呼ばれる男が振り向いた。

「森の中にリング反応がたくさんあるんですけど、その中にあった一つのリングの反応が、いきなりAランク以上にまで強くなったんです！」

「あの…唐突過ぎて意味が分からないんですけど…。」

椿が申し訳なさそうに言った。

「すみません。椿さんは十年前から来たんですよね。」

「それより、いきなりリングの反応が強くなったってことは、また過去から誰かが来たんじゃないのか？」

ラル・ミルチが焦って言った。

「そうです！早く行かないと！」

そして、五人でアジトを出て行った。

そして森の中

五人でリングの反応があった場所に向かっていた。

ドカアアン！

爆発音が聞こえてきた。

「行ってみよう！」

そして五人がそこに向かっていると、大きな草原に出てきた。

そしてそこには、十年前の圭斗が、黒服の男達に囲まれていた。

「圭斗君！」

椿が獅子風・刃無刀を抜いて、ボンゴレリングに炎を灯し、黒服の男達を倒していった。

しかし二人の男だけは、攻撃を避けて、無事だった。

「何すんだよ…って、君、どこかで見たことがあるような…。」

「あなたは…あのとき並盛町でぶつかった男性！？の、十年後の姿！？」↑（標的24参照）

そして、他の四人も駆け寄ってきた。

「そういえばそんなこともあったような…それより、この人数じゃ分が悪い。カリメル、いったん帰るぞ。」

そして男二人は靴から炎を出して飛んでいった。

「ありがとう、椿君。突然十年バズーカに当たっちゃって、気づいたら黒服の人たちに囲まれてたんだよ。」

「とりあえずアジトに戻ろうか。」

そして圭斗も加わって、森に入ってしまった。

「すまねえ。ちょっと用事があるんだ。」

そして獄寺はどこかへ行った。

そしてアジト

作戦室に戻ると、リボーンがいた。

「リボーン君？何でここに…。」

「十年バズーカに当たっちゃった。」

「そうなんだ…で、何でそんな格好してるの？」

リボーンは全身真っ白なスーツを着ていた。

「これ着てねえと、体調最悪なんだ。」

「そうなんだ。そうだ、圭斗君！ついてきて！」

そして椿は圭斗をつれてトレーニングルームに向かった。

そしてトレーニングルーム

「この時代では、ボンゴレリングのようなリングの炎を使って戦うんだ。その炎っていうのは、ツナ君の超死ぬ気モードの死ぬ気の炎と同じようなもので、今からリングの炎の使い方を教えようと思うんだ。」

「…う、うん、分かった。」

圭斗は唐突すぎて話の意味がよく分からなかったが、とりあえず返事をした。

「死ぬ気の炎の出し方は、覚悟を炎に変えるイメージで出すんだよ。やってみて。」

そして圭斗がリングからエメラルドグリーン色に光った大量の炎を出した。

「意外と簡単なんだね。これで終わり？」

「いや、今から炎を使って君と戦おうと思ってね、棒は持ってる？」

椿がそういうと、圭斗はどこからか棒を取り出した。

「じゃあ始めようか。」

そして、死ぬ気の炎を使った椿と圭斗の人知を超えた恐ろしい戦いが始まった。

一方森の中

森の中にあるボンゴレのマークが付いた棺桶が開いた。

「ここ、十年後？って、えー！！！何で俺棺桶に！？」

「誰だ！？」

森から獄寺が歩いてきた。

「あなたは、椿に引き続き十代目まで……。」

「椿に引き続きって、え？椿君も来てるの？」

ツナは棺桶から出てきた。

「はい。あなたは五分経っても十年前には戻れません。」

「そうなんですか、でも、何で俺棺桶に？」

「それは…アジトについてからお話します。」

そして、獄寺とツナはアジトへと歩いていった。

一方アジト

椿と圭斗は戦いを終え、応接室に向かっていた。

「「疲れた…。」」

二人はまったく同じ言葉を発し、応接室に着いた。

部屋に入ると、リボーンがエメラルドグリーン色の匣を持っていた。

「おい圭斗、部屋の中にこんなものがあったぞ。」

そしてリボーンは匣を圭斗に投げた。

圭斗は匣をしっかりと受け止め、不思議そうに見ていた。

「これ、何？」

「匣っていう、この時代の武器だよ。っていっても、僕もよく知らないんだけどね。」

そして圭斗はリングからオーロラの炎を出し、匣に注入した。すると、中からオーロラの炎を纏った、モモンガが出てきた。

「すごい、モモンガが出てきた。」

そして、圭斗は、モモンガの頭を撫で始めた。

「オーロラモモンガ、アウローラ a u r o r a ペタウロ p e t a u r o だな。そいつの
名前は、“エパルト”って言うらしいぞ。」

「そうなんだ。よろしく、エパルト。」

そして、圭斗はエパルトを匣に戻した。
そして、部屋に誰かが入ってきた。

標的45 過去の仲間達！（後書き）

微妙な終わり方ですね。

エパルトの名前の由来は、モモンガのイタリア語、petaur
o
のアルファベットを並べ替えただけです。
感想等お待ちしております！

標的46 死ぬ気の炎！

応接室に入ってきたのは、ツナと十年後の獄寺だった。

「つ、椿君と、圭斗君！？それにリボーンも！」

「やあ、ツナ君。」

そして、獄寺が十年前と入れ替わった。

「十代目！ここ、どこですか？」

獄寺も加わり、久しぶりの再開が終わった後、リボーンがこの時代のこと、ボンゴレ狩りのことをツナに話した。

「お前は、散り散りになった九人の守護者を集めるんだ。」

そこに、楓がやってきた。

「あ、ツナく…」

来たとなんに十年前と入れ替わってしまった。

「ツナ君！ここ、十年後じゃなかったの？」

「間違いなくここは十年後だよ。」

「そうだ、楓、これを受け取れ。」

楓に水色の匣を渡した。

「使い方は椿が知っている。獄寺とツナもついていって教えてもらえ。」

「僕より山本君の方が良いんじゃない？」

「それがな…」

「おい、どこにいるんだ？小僧！」

十年前の山本が入ってきた。

「ここにいて死ぬ気の炎が使えるのは、椿と圭斗だけなんだ。」

「そうなんだ…。」

そして、椿と圭斗は、過去から来たファミリーをつれて、トレーニングルームに行った。

「じゃあこれから、この時代の戦い方を教えるね。この時代では、過去には無かった、リングから出すことの出来るの炎、死ぬ気の炎を使って戦うんだ。炎は十個の属性があって、大空、雨、嵐、雷、晴れ、霧、雲、雪、風、オーロラの十個なんだ。」

「ボンゴレリングと一緒にだね。」

ツナが相槌を打った。

「そう、それで、それぞれの炎には特徴があつて、えっと…」

椿はポケットから紙を出した。

「大空の炎の特徴は“調和”、雨の炎の特徴は“鎮静”、嵐の炎の特徴は“分解”、雷の炎の特徴は“硬化”、霧の炎の特徴は“構築”、雲の炎の特徴は“増殖”、雪の炎の特徴は“凍結”、風の炎の特徴は“無効化”、オーロラの炎の特徴は他の死ぬ気の炎より炎の性能が高いんだ。」

そして、紙をポケットにしまった。

「どうやって死ぬ気の炎つてのを出すんだ？」

山本が聞いてきた。

「この時代の君が言っていた方法は、覚悟を炎に変えるイメージで出すんだって。こんな風にね。」

椿が大量の風の炎を出した。

「覚悟を炎にって言つと、こんな感じか？」

山本がいとも簡単に、ボンゴレリングから青い雨の炎を出した。

「私もやってみよつと。」

楓がボンゴレリングから水色の雪の炎を出した。

「覚悟を炎に…できねえぞ？」

「具体的な覚悟があったほうが良いと思うよ。獄寺君、ツナ君の右腕になりたい？」

「あつたりめえだ！」

すると、獄寺のボンゴレリングから、赤い嵐の炎が出てきた。

「やった！」

「うーん…。」

みんなが炎を出している中、ツナだけが悩んでいた。

「どうしたの？」

「さっきからやってるんだけど、出ないんだよ。」

「覚悟って言ったって、普段から思っているような大切なことだっ
ていい。ツナ君は、この危険な時代で、何をしたい？」

「何をしたいって、仲間を、守りたいよ。」

するとツナのボンゴレリングからも、オレンジ色の大空の炎が出てきた。

「ありがとう。椿君。」

「僕は何もしてないよ。」

「この箱は何なの？」

楓が匣を見ながら言った。

「それなら俺も持ってるぜ。」

獄寺がポケットから匣を出した。

「それはさっきの炎を穴に注入したら中身が出て来るんだ。」

椿はチェーラとミーアを出した。

「こんな感じ？」

楓が匣に雪の炎を注入した。

すると、中からは二頭のトナカイが出てきた。

「雪トナカイ、renna di neveとだね。その二頭の名前は、ロントとメータだって。」

そして、獄寺も匣に炎を注入した。

そこからは、髑髏をあしらった腕固定型火炎放射器が出てきた。

「んだこれ！重！でも、イカスぜ。」

そして、獄寺は、色々使い方を試していった。

「俺も持ってるぜ。」

山本が二つ匣を取り出し、雨の炎を注入した。

一つ目の匣からは、雨の炎を纏った燕が出てきて、二つ目の匣からは、水の、バリアーのようなものが出てきた。

二つ目の匣は、すぐに匣に戻ってしまったが、燕は飛び続けた。

「こいつの名前は小次郎で良いや。」

そして、燕は匣に戻った。

『おい！守護者は作戦室に集合、10分以内に来いよ。』

リボーンの呼び出しがかかった。

「じゃあみんな行こうか。」

全員動物や武器を匣に戻して、椿についていった。

標的46 死ぬ気の炎！（後書き）

タイトルと内容に関係はあったのでしょうか？
作者が疑問に思っては始まりませんよね。
とりあえず、これからも頑張ります！
感想等お待ちしております！

標的47 雲雀との再会!

リボーン呼び出しで守護者六人は作戦室に向かった。

「来たな。あれからラル・ミルチと話し合ったんだが…「ちょっと待って!」…何だ?」

リボーンが話している途中にツナが割り込んできた。

「ラル・ミルチって誰?」

「それは後だ。」

(完全無視されたー!!!)

「最初に欲しい奴は、即戦力、つまり強い奴だ。残りの3人の中で…「ちょっと待ってよ!」…またか?」

「3人って、今6人しかないぞ!」

「さっきランボとイーピン、ハルと京子が来たんだが、十年前と入れ替わっちゃった。この時代のことを少し説明して、アジトの家事とかを頼んだら、喜んでどこかにいったぞ。」

(この時代のこと説明してどうやったら喜べるんだよ!!!)

「強いといったら雲雀さんだね。僕、探してくるよ。」

「探すってどこに…もう行っちゃったよ。」

椿はいつの間にか作戦室から消えていた。

そして外

椿は普通に並中に向かっていた。

ボンゴレリングにマモンチェーンをつけて。

人の目に見えないくらいの速さで移動したため、ミルファイオーレフ
アミリーに見つかることもなかった。

そして、並中に到着した。

「雲雀さんいるかな？」

「君、勝手に僕の並中に入らないでよ。」

突然後ろから声をかけられた。

「雲雀さん？」

椿が後ろを向くと、この時代の雲雀がいた。

「なんだ、椿かい？こんなところで何してるの。」

雲雀はトンファアを構えていた。

「何故トンファアを…」

雲雀が突然攻撃してきた。

椿は獅子風・刃無刀を抜き、防御した。

「十年経って強くなりましたね。これじゃ僕の命が危ない。」

（僕と互角に戦えるのは圭斗君だけって言ってたけど、雲雀さんはそれ以上な気がする…。）

そこから、戦い続けて3時間、椿はボロボロになって雲雀に止めを指されかけた瞬間、突然雲雀のケータイが鳴った。

「もしもし…：そうかい、ありがとう。」

そしてケータイをきった。

「並盛神社に行くよ。」

そして雲雀は歩いていった。
椿は雲雀についていった。

標的47 雲雀との再会！（後書き）

微妙な終わりですね。

とりあえず、雲雀さんと再会しました。

椿と圭斗が強すぎるのはつまらないと思い、雲雀さんの方が上にしてみました。

感想等お待ちしております！

標的48 雲雀vsY!

雲雀と椿は一緒――(?)に並盛神社に向かった。

神社に到着すると、ボロボロの獄寺と山本、そして一人の男が雷のような炎を纏った狐と一緒に立っていた。

「助けなきゃ!」

椿がボンゴレリングに炎を灯すと、雲雀が止めてきた。

「あれは僕の獲物だ。手を出したらいくら椿でも咬み殺す。それに、今の君じゃかなう相手じゃない。」

そして雲雀が紫の宝石のついたリングをポケットから出し、紫色の雲の炎を出して、匣に注入した。

そこからはハリネズミが勢いよく飛び出していった。

そのハリネズミは狐とぶつかった。

「君の知りたいことのヒントをあげよう。彼らは過去から来たのさ。」

「なにやらあんた詳しそうだな。だが、ドンパチに混ぜて欲しけりゃ、名乗るのが筋ってもんだぜ。」

ハリネズミが雲雀の匣に戻った。

「その必要はない。僕は今機嫌が悪いんだ。君はここで咬み殺す。」

椿は神社の柱に寄りかかって、二人のやり取りを見ていた。

二人はそれぞれ、匣に炎を注入し、男は狐、雲雀はハリネズミを出し、それぞれの匣アニマルがぶつかり合っていた。そして、雲雀のつけていたリングが壊れ、新しい雲のリングを指に嵌めた。

「さあ、僕らも始めよう。電光のY。」

雲雀は雲の炎を新しい匣に注入し、トンファーを出した。

そしてすさまじい戦いが始まり、Yが雷の炎でバリアを出したが、雲雀はそのバリアを砕いた。

そして、Yは匣からビリヤードの玉を出した。

「楽しくなってきたぜ。」

Yは玉の一つをキューで撞いた。

出てきた玉が無差別に動いていき、雲雀を襲った。

「生憎このショットの軌道には、人が生きられるだけの隙間はないんだ。」

「それはどうかな。」

雲雀は玉を避けながらYに突っ込んでいった。

「三番ボール！」

玉のひとつが雲雀に当たりそうになったが、トンファーで防ぎ、すぐにYの所についた。

「これで終わりだ。」

Yをトンファーで上に突き上げ、球針体となったハリネズミに刺した。

そしてハリネズミは匣に戻した。

そしてYが落ちてきた。

その後ツナやラル・ミルチ、圭斗が来て、色々話が進んでいった。

「椿君大丈夫？」

圭斗が椿の所に駆け寄ってきた。

「雲雀さんにやられた。」

そして椿は眠りについた。

標的48 雲雀vsY! (後書き)

今回はここまでです。

何か不満なところがあったら感想に書いてくださって構いません。
それなりに改善していきたいと思うのでよろしくお願いします！

標的49 しばしの平和

Yを倒した次の日

椿は第三医療室で寝ていた。

そして椿は目覚め、大きく欠伸をしていた。

「よく寝たなあ…さて、ご飯でも、いてっ！」

椿は起き上がると、全身に激痛が走った。

「椿さんやっと起きました？ ハルはずっとここで看病してたんですよ？」

椿の寝ていたベッドの隣の椅子にハルが座っていた。

「何でこんなに痛いのか？」

「全身筋肉痛の上、右腕の骨が折れていて、動けないような状況になってるんです。」

「そうなんだ。」

そして、椿がもう一度ベッドに仰向けになった。

春はどこから出したのかおかゆを持っていた。

「ハルが食べさせてあげますからね、あーん！」

ハルはスプーンにおかゆを掬い、椿の口の前まで持ってきた。

「ありがとう。」

椿はおかゆを口に含んだ。

そんな感じで三日が過ぎた。

三日後

椿の筋肉痛が治り、椿はアジト内の畑にいた。

椿は麦わら帽子をかぶり、肩にはタオルをかけて、農家のおじさんと化していた。

そして、ジョーロで野菜に水をかけていた。

「今日の晩ご飯はなににしようかな。」

部屋に京子が入ってきた。

「やあ、笹川さん。今日はトウモロコシが良い感じに熟してるよ。」

「椿君、ありがとう。あと、私を呼ぶときは京子で良いよ。笹川だとお兄ちゃんと同じで紛らわしいでしょ？」

京子が椿に近寄ってきた。

「分かったけど、先輩は今ここにいないんじゃない？」

「昨日ここに帰ってきたの。椿君が寝てる間にね。」

「そうなの？」

そしてトウモロコシのある場所に椿と京子が行くと、部屋のドアが

破壊された。

「何があったんだろう？京子は下がってて。」

椿が京子の前に立った。

京子の頬は赤くなっていた。

「椿ー！極限に帰ってきたぞ！」

十年後の良平だった。

「笹川先輩、何か用ですか？」

「いや、特に用はない、挨拶に来ただけだ。」

「挨拶のためにドアを壊さないでください。」

椿は呆れ果てて言った。

「すまん。あと、お前はしばらく休んでおけ、他の守護者は特訓をしているが、お前には今の所必要ないそうだ。あと、これを受け取れ。」

良平に一枚の紙を渡された。

その内容は、“十日後にミルフィオーレ日本支部の主要施設を破壊する”だった。

「では！しっかり休めよ。」

そして良平は部屋から出て行った。

「その手紙、何？」

「骨折に効く、体操だって。」

そしてポケットに紙をしまった。

「とりあえず、トウモロコシを採ろうか。あと、呼び方は京子じゃなくて京子ちゃんにするよ。京子だとしつくりこなくて…。」

「うん、それでいいよ。」

そして二人でトウモロコシを採り始めた。

「椿さーん！愛妻弁当もって来ました。」

ハルが部屋に入ってきた。

「ハルちゃん？」

（椿君と二人きりで居たかったのに。）

京子は少し残念そうだった。

「愛西弁当？それって、愛知県愛西市のお弁当のこと？」

「「…。」」

京子とハルは呆れていた。

「僕、変なこと言った？」

「べ、別に…」 「そんなことはないですよ。」

二人とも否定していた。

「そうだ、お弁当は？」

「はい、これです。京子ちゃんの分もありますよ。」

ハルは椿の所まで歩いてきて、二人にお弁当を渡した。

椿は、弁当の包みを開けて中身を見ると、わりと普通のお弁当があった。

「これは！」

「おいしそうだね。いただきます！」

ハルがびっくりしているのも気にせずに、椿は弁当を食べ始めた。

「ツナさんのと間違えてた〜。」

ハルは二人に聞こえない小さな声で言った。

その頃のトレーニングルーム

お昼にツナが弁当をあけると、ご飯の上に“椿さんLOVE”という文字がある、お弁当だった。

「何これ？ハル、椿君のと間違えたのかな？とりあえず、お腹空い

たし食べよつと。」

ハルの愛妻弁当はツナによって食べられていた。

標的49 しばしの平和（後書き）

ハルと京子の二人が椿に惚れてしまいました。

僕がこうした理由は、椿の鈍感っぷりを書きたかったからです
たまにはこういうのもいいかな？ 的なノリで書きました。

感想等お待ちしております！

標的50 突入!

良平とあってから五日後

椿の骨折が直り、圭斗との修行の日々が始まった。

毎日建設中の3階でトレーニングしていた。

カキン！ カキン！ カキン！

椿の獅子風と圭斗の棒がぶつかり、火花の散る修行がずっと続いた。チェーラとミアやエパルトはそれぞれの主と協力して戦っていた。

そんな修行をずっと続けて突入前夜

敵の襲撃があり、予定より早く突入することになった。

ツナ、獄寺、山本、十年後良平、楓、椿、圭斗、ラル・ミルチの八人のメンバーで、並盛町のショッピングモール地下二階駐車場のダクトから、敵のアジトへ向かった。

そして、ダクトでどんどん進み、第二格納庫の上、敵のレーザーに感知されたが、山本のおかげでなんとか助かり、第二格納庫に落ちた。

「何故レーザーに感知された!？」

ラル・ミルチがそう言うのと、一人の男が歩いてきた。

「俺がスイッチを押したからだー!これで新しい武器の試し撃ちが出来るなー!」

そして肩についていたレーザーのようなものに雷の炎を注入し、攻

撃してきた。

そのレーザーはツナたちに直撃した。

「今の誰だ？」

「俺ではない。」

「同じく。」

「俺も何も。」

「俺でもないっす。」

「私も違うよ。」

「俺でもないよ。」

「僕だよ。」

椿の匣が開いて、チェーラとミーアが出てきていた。

「何したんだ？」

「チェーラとミーアの風の炎で、奴の炎を無効化したんだよ。あの程度の炎圧なら余裕で防げるからね。」

そして匣にチェーラとミーアが戻っていった。

「通してもらおうよ。」

椿が獅子風・刃無刀を抜いて、男の首を叩き、気絶させてから縄で縛ってから普通に通って行った。

「あのデンドロ・キラムが一撃とはな。」

「次は地下八階の警備システムのサーバーをダウンさせる。」

そして、第二格納庫から出て、しばらく進むと、地下三階から地下八階に下りる階段があった。

「早く行くぞ。」

そして、椿と圭斗は飛び降りていった。

「ちょっと!」

その声は二人には届かず、下の方で着地する音がした。

「俺たちも行こうか。」

そして、残りの六人も降りていった。

標的50 突入！（後書き）

やっと突入できました。

一体何話で終わるのやら…。

とりあえず、これから頑張っていきます！

感想等お待ちしております！

標的51 四作戦！

デンドロを倒し、全員が地下八階に降りてきて、奥に警備システムのサーバーがある部屋に来た。

ラル・ミルチが先に入ると、中には人がいた。

「お前は…ジンジャー・ブレット！」

そして、二人の戦いが始まった。

二人は、すごい戦いを繰り広げ、時にはラルがおし、時にはジンジャーがおし、最終的にはラル・ミルチがコロネロのおしゃぶりを使って勝利した。

しかし、ジンジャーは人形で、消滅した。

ラル・ミルチは怪我を負ったが、警備システムを壊し、主要施設の破壊に向かった。

そして、ゲートの封鎖が始まった。

「このあと、四を使って敵を引き付けておく作戦のはずだったが、ラル・ミルチは負傷してしまっている。」

「それ…俺（僕）たちがやります。」

椿と圭斗が声を揃えて言った。

「椿君、圭斗君…分かった、俺も行くよ。」

「地下十階の用水路で、敵を食い止められたらベストだ。」

「十代目！気をつけてくださいね。」

そして、椿と圭斗とツナは用水路に向かった。

そして、用水路

椿と圭斗とツナがそこに着くと、モスカが四体来た。

「早速来たね。」

圭斗がリングにオーロラの炎を灯し、鉄製の棒を取り出して、オーロラの炎を移した。

リングに風の炎を灯し、獅子風・全刃刀と獅子風・熱刀を抜いた。
ツナは一人取り残されていた。

「僕に任せてもらうよ。」

「やだ、二体は僕が貰う。」

「いいよ。」

そして、二人同時にモスカに突っ込んでいった。
そして、

「真神風流！」

椿は二つの獅子風を宙に投げ、獅子風・刃無刀を抜刀して二つの獅子風の柄頭を同時に叩き飛ばした。

「双風龍！」

二つの獅子風は直進ではなく、回転しながら周りに風の炎を纏わせ、少し曲がったりして、モスカ二体に激突した。

二つのモスカは内部をえぐられ、獅子風が貫通していき、モスカは水に沈んでいった。

そして、椿は飛んでいった獅子風をキャッチした。

「すごいね。僕も始めるか。」

圭斗は棒を回転させ、オーロラの炎を竜巻のように二体のモスカに飛ばした。

その炎でモスカは吹き飛び、水の中に沈んでいった。

「すごいよ！二人とも！」

すると、一体のモスカが水から飛び出してきた。

そして、一瞬にして椿と圭斗を倒した。

そして、ツナが

死ぬ気丸を二つ飲んだ。

「行くぜ。」

ツナとモスカのしばらくの戦闘の後、ツナが、空中でX BURNERの構えをとった。

(X BURNER AIR！)

そして、X BURNERを放ち、モスカを倒したが、衝撃に耐え切れずに落ちてしまった。

そして、水の中から一体のモスカが上がってき、中から人が出てきた。

「さいなら。」

そして、ツナに銃を向けた。

標的51 四作戦！（後書き）

今回はここまでです。

こんなのでいいのか、少し心配です。

椿の“真神風流”は後々色々な技を出すつもりです。
感想等お待ちしております！

標的52 vs バイシャナ!

ツナがモスカと戦った頃、獄寺たちは展示室にいた。

「待っておったぞ。我、所望す。」

そこには中に浮いたじゅうたんの上にいる男が言った。

「お前はバイシャナだな。何故、仲間を倒した。」

そして、獄寺たちの前にはニゲラ・ペアバンクルと呼ばれる男が倒れていた。

「我の匣兵器は他の匣を食べて成長するのだ。」

バイシャナの後ろには嵐の炎を纏った大蛇がいた。

「その喋り方うつとうしい!」

楓が銃から雪の炎を放ち、男のじゅうたんを凍らせた。

「なぬ!」

バイシャナは地面に落ちた。

「行け!セルペ・テンペスタ!」

そして、楓とバイシャナの戦いが始まった。

その頃

ツナと椿と圭斗はどこか知らない部屋で寝ていた。

「ツナ君！」

ツナは椿の声で起き、目の前には“酢花。”と書かれた紙があった。

「スパナさんだよ。敵なのに俺たちを助けてくれたんだ。」

椿の隣にいた圭斗が言った。

二人はスパナと同じ服を着ていた。

「敵?……敵!?’」

ツナが布団から出て立ち上がると、パンツ一丁の状態だった。

「とりあえず、これを貸してやる。」

渡されたのは椿や圭斗と同じ、緑の作業着のようなものだった。そして、ツナがそれを着ると、近くに小さいモスカがいた。

「安心しなよ。スパナさんは僕らを殺したりしないよ。」

「最後のあれ、うちが完成させてやる。キングモスカがやられるなんて思ってた。」

興味津々な顔で、ツナを見ていた。

「最後のあれって、X BURNERのこと?’」

「X BURNERか。早速かかるか。」

そして、スパナとツナはX BURNERの完成に向かって色々話をし始めた。

一方展示室

「行くよ。」

楓は雪の炎を銃に溜め始めた。

「汝の雪の炎など、我の嵐の炎には勝てぬ！」

大蛇が楓に迫ってきた。

「どうかな？」

銃に溜まった雪の炎を一気に発射した。

その炎は大蛇を包み込み、雪の炎の特徴“凍結”により、氷付けになってしまった。

「何！」

そして、楓がまた炎を溜め始めた。

「君に負けるつもりはないからね。」

「まだまだ。」

バイシヤナが嵐の炎をリングに灯し、八つの匣に注入していった。

標的52 VS バイシャナ! (後書き)

今回はここまでです。

微妙な終わりですみません。

まだまだ、メローネ基地内の話は続きますが、気長にお付き合いください。

感想等お待ちしております!

標的53 鋭い雪！

メローネ基地展示室

楓とバイシヤナが戦っていた。

バイシヤナの八つの匣からは、嵐の炎を出したクワガタが出てきた。

「そいつらを使ってなににする気？」

「まあみておれ。」

バイシヤナが笛を吹くと、クワガタが氷りついた大蛇の周りを飛び回り、氷を少しずつ溶かしていき始めた。

「させないよ。」

楓がリングに雪の炎を灯し、水色の匣に注入した。

中からは二匹のトナカイ、ロントとメータが出てきた。

その二匹は大蛇の近くまで突進していき、周りを飛んでいたクワガタに対して、雪の炎を吐いた。

クワガタは氷付けになって地面に落ちた。

「さて、これで終わりにしようか。」

楓は、今までずっと雪の炎を溜め続けた銃を大蛇に向けた。

「貫く吹雪！」
ペネトランテトルメンタ

銃から凝縮されて弾の形になった雪の炎が発射され、大蛇のほうへ飛んでいった。

その弾は大蛇を貫通し、凍り付いていた大蛇が壊れた。

「何！」

そしてバイシヤナは逃げていったが、何者かの攻撃によって倒された。

「見苦しいぞ！バイシヤナ！」

そこに立っていたのは、雪のマーレリングを指に嵌めた白服の男だった。

「俺の名はケリス・レイド。今すぐ倒してやる、かかって来い。」

男は弓矢を持っていた。

「あいつは、ミルフィオーレ八弔花の一人だ。ここは全員でかかったほうが良いぞ。」

そして良平が匣からカンガルーを出した。

「分かったぜ。」

山本は時雨金時を一振りし、刀に変えた。

「しゃあねえな。」

獄寺は匣からフレイムアローを出した。

「何人で来てもいいぞ。」

そして、獄寺が、フレイムアローに何かをセットし、炎を打ち出した。

「フレイムアロー！」

「その程度の炎、これで十分だ。」

ケリスが矢に雪の炎を込めて弓で放った。

その弓の周りの空気に含まれていた水分が氷に変わり、矢と一緒に飛んできた。

獄寺の炎と矢がぶつかったが、矢の氷が少しずつ溶け、獄寺の炎と一緒に消滅した。

「行け！野球馬鹿！」

「時雨蒼燕流！特式十の型！スコントロディローンディネ燕特攻！」

山本の攻撃はケリスに避けられてしまった。

「甘かったな！」…何？」

良平とケリスの声がハモった。

マキシマム
「極限イングラム！」

ケリスのすぐ前に良平が来て、三連続パンチを繰り出した。

「くそっ！」

「まだまだ！貫く吹雪！」
ペネトランテトルメンタ

楓の攻撃でケリスの弓が破壊された。

「くそっ！だが…。」

ケリスは匣に雪の炎を注入し、新しい弓を出して攻撃し始めた。四本の矢を同時に放ち、獄寺、山本、良平、楓の方へ飛ばした。獄寺に飛ばしたものは宙に浮いていたS I S T E M A C・A・I.の防御用の輪で防いだ。

山本は時雨金時ではじいたが、時雨金時が凍り付いてしまった。良平と楓は避けた。

ケリスは地面に着地し、新しい匣に雪の炎を注入し、中から白熊を出した。

「熊を使うのは二ゲラだけじゃないぜ。」

そして、熊と良平が戦い、残りの三人はケリスへ攻撃を続けた。

「こうなったら、氷の世界！」
モンドデイギアツチヨ

楓が銃を上に向け、雪の炎を発射すると、飛んでいく途中に炎がいくつにも分かれ、地面に向かって飛んできた。

そして、いくつもの氷の壁や柱を作り出し、氷が鏡になり、何人も獄寺や山本、楓が出てきた。

「何だよこれ！」

すると、ケリスの後ろにあった氷から嵐の炎が飛んできて、ケリスに直撃した。

その後、氷は溶け、良平は白熊をアッパーで倒した。

「これで終わりだな。やはり八弔花は強い、四人がかりでやっと倒せたか。」

「とりあえず、先に進もうよ。」

そして四人は部屋を出て行った。

標的53 鋭い雪！（後書き）

八弔花、風と雪が増えたので八人になりました。
楓の技も二個ほど出てきて、何とか先に進めました。
感想等お待ちしております！

標的54 姿を変える風!

獄寺たちはバイシヤナとケリスを倒した後、どんどん先へ進んでいた。
すると、突然ラル・ミルチを背負った山本と楓の足場が下がっていた。

「山本!」

獄寺が下に下がっていく山本たちに手を差し伸べた。

「もう手遅れ、作戦が終わったら会いましょう。」

楓が下から手を振っていた。

「ふざけんな!」

獄寺の手は良平によって戻され、完全に分かれてしまった。
そして山本はかなり下まで下ろされ、仕方なく進んでいった。

一方スパナの研究室

スパナは何らかの作業をし、ツナと椿と圭斗は黙って座っていた。

「あのさあ、僕らはここから出ちゃいけないかな?」

椿が頭をかきながら言った。

「ボンゴレ以外に用はないけど、あんたら今行方不明ってことにな

ってるよ。」

「それなら適当に理由をつけてスパナさんを疑わせないようにしておくから。」

そして、椿と圭斗は自分の武器を取って部屋を出て行った。

そして、しばらく適当に歩いていると、左右に分かれた道があった。

「二人で別々の道に行こうか。」

「しょうがない、俺は左に行くよ。」

「じゃあ僕は右か。じゃあね。」

そして、二人は歩いていった。

椿はしばらく歩いていくと、一つの大きな部屋に出てきた。

そこには、Yと圭斗を助けたときにいた、カリメルという男がいた。

「あなた方は…どなた？」

「俺はYってもんだ。」

「俺はカリメル。」

「敵ですよね。」

そして、椿は臨戦態勢に入った。

「Y、任せろ。」

そして、カリメルが半円形の外側に刃の付いた、刀のようなものの真ん中に刀の柄が付いた武器を取り出した。

「それは獅子風！」

「よく分かったな。これは獅子風・半円刀って言って、六代目の刀だ！」

その台詞と同時にカリメルが指に嵌めていた雲のマーリングで獅子風に雲の炎を灯し、突っ込んできた。

「真神風流！」

椿は獅子風・伸縮刀を抜いた。

「ハリケーン！」

椿が高速で回転し、突っ込んできたカリメルを攻撃すると同時に、Vも獅子風から放った衝撃波で攻撃した。

「おっと、あぶねえなあ。」

Vは何とか避けたが、カリメルは獅子風本体の攻撃と衝撃波の攻撃により、壁まで吹っ飛んだ。

そして、壁から煙が上がり、突然煙の中から、円形の鉄が飛び出してきた。

椿はそれを避けきれずに、右肩を掠めていった。

「何？あれ…。」

そして、円形の鉄は煙の中から出てきたカリメルがキャッチし、獅子風・半円刀になった。

「雲の炎の増殖か。」

椿が獅子風・伸縮刀を鞘に収めた。すると、部屋に獄寺と良平が来た。

「椿！お前囃になったんじゃ…。」

「それなりのことはやったけど、途中で敵にやられて、水の中に沈んじゃったんだ。それで、敵にも見つからずに何とか生きていたんだよ。」

そして、カリメルの方を向いた。

「さて、俺も相手が見つかったことだし、はじめるか。」

Yは獄寺たちと戦闘を始めた。

「カリメル：だっけ？さっきの技はもう通用しないよ。さて、このリングをここで使うことになるからね。」

そして、ポケットから晴れ、雲、雪のリングを取り出し、それぞれを違う指に嵌めた。

「行くよ。真神風流！」

椿は晴れのリングにのみ、炎を灯した。

「熱風！」

獅子風・熱刀を抜刀すると、晴れの炎で活性された獅子風の熱が、カリメルに飛んできた。

カリメルはマーレリングから雲の炎を出し、バリアを張って防いだ。

「甘い。」

「どうかな。真神風流！」

椿は獅子風・熱刀を鞘に収め、獅子風・刃無刀を抜刀した。

「雪風！」

抜刀した獅子風に雪の炎を灯し、その炎をカリメルに飛ばした。

カリメルが出していたバリアは凍りつき、カリメルは氷の中に閉じ込められた。

「あ、僕の三つのリングは全部Bランクのリング、だからね。真神風流！」

椿は雲の炎をリングに灯し、獅子風・刃無刀を鞘に収め、獅子風・全刃刀を抜いた。

「刺風！」

そして、獅子風・全刃刀が伸び、氷を破ってカリメルを攻撃した。

「まだ生きてるんだろう？」

椿がそう言うと、破れた氷からカリメルが出てきた。
カリメルは左腕に、刀が刺さった傷があり、そこから血を出していた。

「貴様は俺が倒す！」

カリメルが椿の目の前まで来ると、二人は互いの刀をぶつけ合って戦った。

標的54 姿を変える風！（後書き）

今回はここまでです。

真神風流、四つ出てきました。

椿の炎も四つになりました。

これから、色々活躍していくと思います。

あと、アクセス数が20000を突破しました！

この小説を読んでいただいている皆様、ありがとうございます！
感想等お待ちしております！

標的55 雲雀来襲!

椿たちが戦っていた頃、圭斗は、幻騎士たちと遭遇していた。

「君は、ボンゴレオーロラの守護者! ボスがあんたを必要としてんだ。ついてきてくれよ。」

幻騎士の隣にいた男が言った。

「あなた誰?」

「俺はキレイア・レイス、こないというなら戦って…「待て。」…何だよ。」

キレイアがパチンコを出して、戦おうとしていると、幻騎士が止めた。

「こいつとは俺が戦う。お前はあちらの相手だ。」

幻騎士に言われた方向を見ると、山本と楓がいた。

「始めるよ!」

圭斗は棒を取り出し、オーロラの炎を灯して幻騎士に攻撃し始めた。

「奥義・四剣!」

幻騎士がいきなり奥義を繰り出してきた。

「いきなり奥義！？とりあえず、防御！」

圭斗が棒を振ると、オーロラの炎のバリアが出来た。
そして、幻騎士を弾き返した。
すると、突然壁が壊れた。

「白くて丸い装置は、この先だったかな。」

雲雀が来た。

「雲雀さん！」

「君たち、群れるなら咬み殺すよ。」

そして、雲雀が二つの雲のリングから炎を出し、二つの匣に注入した。

すると、その場にいた全員が裏球針体と呼ばれる空間に閉じ込められた。

「ちよっ、雲雀さん！」

圭斗は幻騎士を雲雀にとられ、戦う相手がなくなった。

キレイアは、楓と山本に風の炎を纏った鷲を使って戦っていた。

しもうがなく、キレイアを後ろから本気で攻撃すると、見事に攻撃が当たり、気絶した。

「サンキュ！圭斗！」

「ありがとう。」

「別にいいよ。」

すると、裏球針体が崩れ始めた。

「何だよこれ！」

裏球針体は完全に崩れ去り、三人は瓦礫の中から何とか抜け出した。

「死ぬかと思った。」

そして、ヒバードが飛んでいて、誰かの肩にとまった。

「君、誰？」

そこには十年前の雲雀がいた。

すると、部屋の中に睡眠ガスが噴出し、幻騎士とキレイアは基地のブロックの移動によって、どこかへ消えた。

一方椿たち

椿たちも、戦いの途中で睡眠ガスにより眠らされた。

そして、いつの間にか基地に来ていたクロームも部屋に入った瞬間眠ってしまった。

そして、守護者は全員誰かに運ばれた。

標的55 雲雀来襲！（後書き）

アニメとはかなり違う話になりました。

はつきり言って、あのまま続けても、アニメとほぼ同じになっていたので、短縮しました。

感想等お待ちしております！

標的56 過去への帰還！

椿たちは睡眠ガスで眠らされた後、意識が飛んでいった。次に起きたときにはアジトのベッドの上にいた。

「あれ？確か敵の基地に：「椿君！」「椿さん！」」

隣を見ると、涙を流した京子とハルがいた。

「京子ちゃんにハル：何でそんなに涙を流してるの？」

「だって椿君、十年前のお兄ちゃんに担がれて、肩も怪我してたし、体中にも傷がたくさんあったし：。」

言葉を途切れ途切れに言いながら、京子は涙を拭った。

「そっか、ありがとう。僕はこの通り：って言っても、全身ボロボロだったんだよね。でも大丈夫だよ。少し休めば動けるようになるから。」

椿は笑顔で言った。

「椿くん、ちょっと話があるんだけど。」

部屋に楓が入ってきた。

「話って：とりあえず、京子ちゃんとハルは席を外してもらえないかな？」

「分かりました…。」

そして、京子とハルは部屋を出て行った。

「で、何？」

「これからアルコバレーノの九つの印を貰うために過去へ帰るの。」

「何でアルコバレーノの印ってやつが必要なの？」

「ボンゴレ匣を使えるようにするためなの。ボンゴレ匣って言うのはツナ君の匣のこと。今からメローネ基地の入江正一の所に戻って、過去へ帰るからね。」

そして、椿たちは部屋を出て行った。

そして、メローネ基地

十年前から未来に来たファミリー？全員で来た。

そして、入江の装置で十年前に帰り、それぞれ自分の家に戻った。

「僕らは家に帰っても誰もいないんだよね。」

そして椿たちは家に着き、玄関のドアを開けた。

「あなた方は誰ですか！？」

玄関の先にいた者は…

標的56 過去への帰還！（後書き）

次回からアルコバレーノ編。

虹は七色ですがこの小説で、アルコバレーノは九人いますよね。

少しおかしい気もしますが、雪の水色は虹のうちの一色、風の透明は空気中の水の色で、太陽の光を反射させて虹を作る水です。

感想等お待ちしております！

登場人物紹介6 アルコバレーノ編オリキャラプロフィール

クルース

性別 男性

年齢 不明

誕生日 3月14日

身長 43cm

体重 3.4kg

性格 常に冷静で、穏やかな性格

容姿 黒髪をちょんまげにしている。

顔は赤ん坊と同じような顔。

目は、ほとんど閉じているぐらいに細く、大きく開いたときは青い瞳をしている。

剣道・弓道・柔道の達人

雪のアルコバレーノ

いつも、小さなトラの上に乗っていて、オスで名前はトゥルース。

セティット

性別 女性

年齢 不明

誕生日 2月17日

身長 38cm

体重 3.2kg

性格 普通の性格

容姿 白髪で、肩ぐらいまでの長さ。

顔は赤ん坊と10代美少女の中間くらい。

目は大きい薄い水色。

忍者

風のアルコバレノ

いつも肩に小さなリスが乗っていて、メスで名前はシャリー。

登場人物紹介6 アルコバレーノ編オリキャラプロフィール（後書き）

少し名前が適当な気がしますが、オリキャラたちです。
アルコバレーノが二人。

まだオリキャラは増えます。

標的57 謎の赤ん坊！

椿と楓が家に帰ると、玄関に入ってすぐの所に赤ん坊が二人たっていた。

「あなたたち誰ですか！？」

「リボーンの知り合い、とだけ言っておこうかしら。」

トラの上に乗った赤ん坊のうちの一人が言った。

「何でこの家にいるのよ。」

「この家の住人がリボーンの居場所を知っていそうだと思ったからだよ。」

もう一人の赤ん坊がリスと戯れながら言った。

「誰かも分からないような人をリボーン君の所につれてはいけくないな。」

「じゃあこれを見れば分かるかな。」

赤ん坊二人が水色と透明のおしゃぶりを見せた。

「なるほどね。アルコバレノ：だったかな。リボーン君の所へ連れて行ってあげるよ。」

そして、椿と楓は二人の赤ん坊を連れて沢田家に向かった。

そして沢田家

椿と楓は中に入り、二階へ上がっていった。
すると、リボーンのおしゃぶりが光っていた。

「こんにちは。」

「椿と楓じゃねえか。どうしたんだ？」

「あなたの知り合いを連れてきたよ。」

楓がそう言うのと、後ろから先ほどの赤ん坊二人が出てきた。

「久しぶりね。リボーン。」

透明のおしゃぶりをつけた赤ん坊が言った。

「セティットか、久しぶりだな。」

リボーンがそう言うのと、セティットは消え、リボーンの背後に回っていた。

「随分会わないうちに弱くなったんじゃない？」

リボーンの首に忍者刀を突きつけていた。

「それはこっちの台詞だぞ。」

後ろからリボーンがセティットに銃を突きつけ、セティットが忍者

刀を突きつけていたりボーンがレオンになった。

「私の負けね。」

そして、両手を上に挙げていた。

「クルースも久しぶりだな。」

そして、三人で会話を始めていた。

「ちよつとりボーン！その二人は誰だよ！」

ツナがそう言うのと、三人ともツナの方を向いた。

「この子どもがボンゴレ十代目？全然そんな風に見えないけど…。」

（赤ん坊に子ども扱いされたー！）

「こいつがボンゴレ十代目だぞ。試練のときは殺す気でやっていいからな。」

そして、セティットとクルースは家を出て行った。

「あんなやつらが九人もいるんだ、試練はそう甘くはねえから覚悟しておけよ。」

そしてリボーンは、寝た。

「ちよつ、寝るなよりボーン！」

「とりあえず僕らは帰るよ。」

椿と楓も家に帰っていった。

標的57 謎の赤ん坊！（後書き）

今回はここまでです。

次回あたりから試練が始まります。

感想等お待ちしております！

標的58 第一の試練“戦闘力”!

次の日

いつも通りに沢田家に向かっていた。

「椿くーん！」

誰かが椿の所に走ってきた。

「おはよう、京子ちゃん。」

走ってきたのは京子だった。

「一緒に学校に行かない？」

「別にいいけど、ツナ君とも一緒に行くよ?」

「うん。」

そして、二人で沢田家に向かった。

そして沢田家

インターホンを鳴らすとツナが頭にリボーンを乗せて出てきた。

「おはよう椿君。って、京子ちゃん!？」

「おはよう、ツナ君。」

そして三人で学校に向かっていた。

「椿さーん！」

ハルが走ってきて、椿に飛びつこうとした。すると、椿は京子に手を引っ張られて、ハルは見事に地面に激突した。

「痛いすー。」

そしてハルは起き上がり、椿の方を見た。

「毎回避けるなんて酷いですよー。」

そしてハルは頬を膨らませた。

「毎回？えっと、今までされたことすら覚えてないんだけど、今は京子ちゃんが手を引っ張ったから…。」

「京子ちゃんか？」

そしてハルは京子を見た。

そして、視線を手に移すと、京子が椿の手を握っていた。

（もしかして、京子ちゃん…。）

「とりあえずさあ、学校に行かない？」

ツナの一言によって、四人で学校に向かった。

そして学校

学校で獄寺や他の守護者達に会い、いろいろな話をした後、それぞれのクラスに入っていた。

「今日は転校生を紹介する。」

授業が始まり、教師がそう言うのと、二人の男女が入ってきた。

「針山姫子、姫って呼んでね。」

「針山紋太。」

「二人は親の都合で転校してきたんだ。」

そして二人は自分の席に向かった。

そして昼休み

屋上でコロネロ、ラル・ミルチ、リボーンと会い、今日の試練のことを言われた。

そして並盛山

守護者はクローム、ランボ、雲雀以外全員来ていた。

リボーンとラル・ミルチは崖の上にいた。

そして、コロネロの試練、“戦闘力”の試練を始めることになった。

「この試練に参加するのは、大空のリングの所持者と、守護者二人だ。」

「今回、大空のリングの所持者と一緒に試練を受けるのは、嵐の守護者、獄寺隼人と、オーロラの守護者、虹影圭斗だ。」

「よっしゃー！」

「ツナ君よろしくね。」

そして、他の守護者は崖の上に登った。

「よし！」

獄寺はSYSTEM A.C.I. を装着し、コロネロに突っ込んでいった。

「ちょっと獄寺君！」

圭斗も棒を取りだし、エパルトを出した。

「エパルト！オーロラの散弾！」
バレット・ネディアウローラ

エパルトが体を広げて宙に舞うと、回転して、針のようになったオーロラの炎をコロネロに飛ばした。

「甘いぜ！マキシマムバースト！」

コロネロが銃から青い炎の鳥のようなものを発射し、オーロラの炎とぶつかった。

「それはこっちの台詞だぜ！赤炎の雷」
フレイムサンダー

獄寺がフレイムアローから雷の炎を纏った、嵐の炎を発射すると、コロネロに飛んでいった。

「その程度の攻撃、避けられないと思うか！ コラ！」

コロネロが赤炎の雷を避けると、マキシマムバーストが敗れ、オーロラの炎が飛んできた。
そしてコロネロに当たり、岩にぶつかった。

「オペレーションX。」

ツナがX BURNERの構えをとっていた。

「まだまだだぜ！」

コロネロは岩にぶつかっていたが、すぐにそこから離れ、圭斗の所に向かっていた。
そして、圭斗と戦い始めた。

「さすがアルコバレーノ、俺一人じゃ手も足も出せない。」

圭斗は棒でコロネロの攻撃を防御するのが精一杯だった。

「当たり前だ！ コラ！」

「でも、俺は一人じゃない。」

「何だと？」

コロネロの後ろから雲の炎によって拡散された嵐の炎が飛んできた。

「フレイムインフレーション！」

その攻撃をコロネロがガードしようとする、圭斗の前にSISTEMA C・A・Iの防御の輪が現れ、圭斗がコロネロを先ほどの岩場にとばし、圭斗はフレイムインフレーションを防いだ。

「X BURNER AIR！」

ツナがX BURNERをコロネロに放った。

「マキシマムバースト！」

二つの炎がぶつかり、二つの炎は消え去り、ツナはコロネロの前にいた。

そして、コロネロの頭にあったバッジをとった。

「そこまでだ！」

「アルコバレーノの試練その一“戦闘力”合格だ！コラ！ボンゴレリングを出せ！」

そしてツナはボンゴレリングをコロネロに向けた。

「アルコバレーノの印だ。受け取れ、コラ！」

そして、おしゃぶりから青い光が出てきて、ボンゴレリングに当たった。

そして、守護者は全員家に帰っていった。

標的58 第一の試練“戦闘力”！（後書き）

試練一つ目、終わりました！

これからもどんどん試練を続けていきます！

感想等お待ちしております！

標的59 霧の中のデート!?

次の日、学校が休みのため、椿は朝から霧の出ていた町をぶらぶらしていた。

「昨日のうちにスカルの試練も合格してたなんて…残念だなあ。まだ試練に参加してないよ。はあ…。」

すると、後ろから声をかけられた。

「椿君!」

振り返るとそこには京子がいた。

「おはよう、京子ちゃん。」

先ほどとは違い、笑顔で京子に接した。

「椿さん!」

すると、前からハルが歩いてきた。

「ハルもおはよう。」

「椿君、暇だったら今日ショッピングにでも行かない?」

「ハルたちがいいお店、紹介しますよ!」

そして、三人のデート?が始まった。

「今からどこに行くの？」

椿は京子に右腕、ハルに左腕を組まれながら歩いていた。

「椿君、朝ごはんはもう食べた？」

「そういえばまだ…食べていないような…。」

椿のお腹がなった。

「じゃあ、私に来て何か食べない？」

「ありがとう。」

京子は椿を連れて行こうと腕を引っ張った。

「ダメです。ハルの家に来てください！」

ハルは逆方向に椿を引っ張った。

そして、京子とハルは椿を引っ張り合っていた。

「ちょっと！それなら僕の家に行くのはダメ？」

「「え？」」

そして、二人を連れて、森に行った。

そして椿の家に着いた。

「ここが椿君の家？」

「大きい家ですね。」

そして、中に入りキッチンへと向かった。

「さて、料理するか。」

そして椿は食材をとり、包丁を握った。

「待って！」

京子が椿を止めた。

「私が作る。」

京子が包丁を取った。

「ハルも作ります。」

そして、二人で料理を作り始め、椿は椅子に座って待っていた。

「出来た！」

二人が料理を運んできた。

ご飯、焼き魚、味噌汁、漬物といった、メニューだった。椿はそれを食べて、三人でまた町に向かった。

すると途中で、走っていくツナ、良平、山本を見つけた。

「何やってるんだろう？二人ともごめん、ちょっと見てくるよ。」

そして椿は三人を追いかけていった。

そして並盛神社

椿は三人を追いかけていくと、ツナがマーモンからアルコバレーノの印を貰っていた。

「また終わっちゃったの？」

椿がツナに駆け寄っていった。

「椿君！また終わっちゃったんだよ。」

そして、家に帰ろうとした。

「待ちなよ。」

神社の階段をトラに乗った赤ん坊、クルースが歩いてきた。

「続けて僕の試練も始めるよ。」

そして、トラから降りた。

標的59 霧の中のデート!? (後書き)

今回はここまでです。

次は雪の試練。

今まで活躍できなかった椿と楓を活躍させたいところです。
感想等お待ちしております！

標的60 第四の試練“死力”！

並盛神社でマーモンの試練をクリアした後、クロースがやってきた。

「続けて僕の試練も受けてもらおうよ。」

「君は！クルース！？」

「よく覚えててくれたね。僕の試練は“死力”、内容は君の仲間の救出だよ。」

クルースがそう言うのと、身に着けていた水色のおしゃぶりが光りだした。

「アッピッコ！」

クルースは雪の炎の矢を何本も創り出し、一気に山本と良平の方へ放った。

すると、山本と良平のボンゴリングが凍りつき、二人の周りには氷の壁ができ、脱出できなくなった。

「おい、何だよこれ！」

「こんな氷、俺の拳で砕いてくれるぞ！」

二人は氷を砕こうと頑張っていた。

「無駄だよ。その氷は死ぬ気の炎でないと溶けない雪の炎の水。それも、僕がこの氷を出したときの炎圧以上の炎圧でないと溶けない。」

」

「何してるんだよ！二人を解放しろ！」

ツナがクルースに叫んだ。

「僕はさっき言ったよ。試練の内容は仲間の救出だって。参加者はここにいる守護者全員。もう始めていいよ。」

すると、ツナが超死ぬ気モードになり、氷の壁を殴り始めた。

「くそっ！」

「ツナ君でもダメか、なら。」

椿が雲、晴れのリングをつけ、風のボンゴレリングに炎を灯して匣を開け、チェーラとミーマを出した。

「チェーラ、ミーマ、同時に行くよ。」

そして獅子風・刃無刀を抜き、三つの属性の炎全てを灯した。

そしてチェーラとミーマと同時に氷に突き刺した。

しかし、獅子風もチェーラとミーマも弾かれてしまった。

「それでもダメか。ツナ君、X BURNERでも無理？」

「やってみる、オペレーションX！」

そして、X BURNERの構えをとった。

「X BURNER 超爆発！」
ハイパーイクスプロージョン

そして炎圧30万FV程のX BURNERを放ったが、氷が溶けることはなかった。

「ダメか。炎を大きくするのに必要なものは…そう、覚悟！覚悟が足りなかったってことなのかなあ？」

「やってみる！」

そして、ツナはしばらくの沈黙の後、X BURNERの構えをとった。

「オペレーションX！」

「あ、ちなみに氷の中の気温は一十度。早くしないと二人が凍え死んじやうよ。」

クロースが言った。

「X BURNER！」

ツナは涙目になりながらX BURNERを放った。
その炎を次第に大きくなり、氷の壁を少しずつ溶かしていった。

「あと少し！」

しかし、氷が溶けきる一步前で力尽きてしまった。

「マキシマムキャノン
「極限太陽！」」

氷の中から大きな声がし、氷が砕けていった。

「笹川先輩!？」

「お兄…さん…。」

普通の状態のツナが何とか起き上がった。

「合格だね死力とは必死の力のこと、つまり覚悟のことでもある。そのことによく気がついたね。さ、ボンゴレリングを出して。」

「その前に、真神風流!」

椿は獅子風・刃無刀に晴れの炎を灯した。

「癒し風!」

晴れの炎をツナに飛ばし、体の疲労を回復させた。

「ありがとう、椿君。」

そして、ツナはクルースにボンゴレリングを向けた。

クルースのおしゃぶりから水色の光が出てきて、ボンゴレリングに当たり、ボンゴレリングが水色に光った。

そして、全員家に帰っていった。

標的60 第四の試練“死力”！（後書き）

雪の試練が終わりました。

死力、死ぬ力みたいに思うかもしれませんが本当の意味は違います。少し、クルースが酷い奴に見えたかもしれませんね。感想等お待ちしております！

標的61 アリアとの出会い！

クルースの試練を受けてから、家に帰る途中、椿は京子とハルに捕まり、シヨッピンングにつき合わされた。

「レディーをほったらかしにした罰です。」

「ハルちゃん、とりあえずケーキでも買いに行かない？」

「いいですね。早く行きましょう！」

（この二人、将来太るだろうなあ。）

そして、二人に腕を引かれて歩いていった。

しばらく歩いていると、オレンジ色のおしゃぶりを首につけた女性とすれ違った。

（あの人…！）

「ちょっとすみません！」

椿が後ろを振り返って女性を呼んだ。

「何か用かしら？」

女性は優しく微笑んで振り返った。

「京子ちゃん、ハル、ちよつとごめん。」

椿は二人の腕から離れて、女性に近づいていった。

「あの、あなたが首につけているおしゃぶりって…。」

「大人がおしゃぶりを持ってたら変？」

「そういうことじゃなくて、あなた…アルコバレーノの一人ですか？」

最後は声を少し小さくして言った。

「そう、私は大空のアルコバレーノのアリア。はじめまして、ボンゴレファミリーの風の守護者さん。」

（何でこの人、僕が風の守護者って分かったんだろう？）

アリアに風の守護者といわれて少し驚いた。

「何で風の守護者って分かったのか不思議に思ってるでしょ。あなたの指に風のボンゴレリングが嵌めてあったから分かったのよ。」

「何故ボンゴレリングのことを？」

「それは、アルコバレーノだったら当然なんじゃない？」

「なるほど。」

「椿さん！」

突然ハルに呼ばれて後ろを振り返ると、起こった顔の二人がいた。

「またほったらかしにして、酷いです!」

「あら、あなたの彼女?」

「ただの友達ですよ、じゃあアリアさんさようなら。」

「ちょっと待って。」

そして椿が二人の所に戻ろうとしたとき、突然アリアに呼び止められた。

「どうかしましたか?」

「私もついていっていいかしら。この町やあなたたちのことを知りたいの。」

「いいですよ。」

そして、アリアを含めた四人で町を歩いていった。

そして、歩くこと十分

「着きました!ここがハルたちのお気に入りのお店、“ラ・ナミモリ―ヌ”です!」

「ここのケーキ、すごくおいしいんです。」

いつの間にか打ち解けあっていたアリアと京子とハルは仲良く店に入っていた。
椿も一緒に入っていた。

標的61 アリアとの出会い！（後書き）

感想等お待ちしております！

標的62 アリアが椿家に泊まる!

ラ・ナミモリーヌでケーキを買い終え、椿たちは町をぶらぶらしていた。

「そうだ、私今泊まるところなくて困ってるのよね。」

ふいにアリアが口を開いた。

「そうなんですか? なら、僕の家とかどうですか?」

「いいの?」

「別にいいですよ。僕の家広いんで。」

椿は笑顔で言った。

「ならお言葉に甘えて:」「ダメです!」「」

アリアが喋っている途中にハルと京子が割り込んできた。

「男女が一つ屋根の下で一緒に住むというのはいかなものかと:。」

「そうだよ。それに、+&a m p; % ~# + > % < @ ; &a m p; \$! 「」

「何言ってるか分からないよ、京子ちゃん。それに、ハルだって:。」

椿は言葉を途中で止め、ハルの近くまで来た。

「最近まで未来のアジトと一緒に住んでたんだよ？」

そうハルの耳元で囁いた。

「それは…。」

「じゃあ決定だね。アリアさんは僕の家泊まるってことで。」

そして、日が暮れてきて、椿たちはそれぞれ家に帰っていった。

そして、椿の家

「広いのね。」

「さっき言ったじゃないですか。」

そして、楓も帰ってきて、一緒にご飯を食べた。

そしてそれぞれお風呂に入ってから寝た。

標的62 アリアが椿家に泊まる！(後書き)

今回はここまでです。

この話に意味はあったんでしょうか？

とりあえず、アリアが椿の家に数日の間泊まる事になりました。
感想等お待ちしております！

標的63 第五の試練“指導力”！

アリアが椿の家に來た次の日

椿は風紀委員の仕事で、学校に向かっていた。

「三日分の書類仕事をさせられるのかなあ？それはさすがに…。」

そして、並中に着き、応接室へ向かった。

「この書類の山は…どうやって部屋に入れたんだろう？」

部屋の中には人が入れるスペースがないほど紙が詰まっていた。

「とりあえず片付けていくか。」

椿は応接室の前に長机を出して書類を片付けていった。

そして一時後

「終わったー！ー！！前よりも多かったのに前よりも早く終わったな
ー。」

ドカァン！

ボォォン！

ドゴォォン！

椿が喜びに浸っていると、爆発音が三回連続で鳴った。

「何だろう？体育館のあたりから音がしたみたいだけど…。」

そして体育館に急いだ。

そして体育館前

「何…これ…。」

体育館は所々に穴が開いていて、その穴からは冷気が漂っていた。

「とりあえず、中に入ってみよう。」

そして椿は体育館のドアを開けた。

体育館の中には煙が漂っていて、数人の声がした。

「絶対逃がさねえ！」

「おとなしく捕まってよ！」

「ランボさん、もう怒ったもんね！」

「椿さんに喜んでもらうために頑張ります！」

「この声は…。」

そして、椿はボンゴレリングに風の炎をともした。

そして獅子風で風の炎を飛ばし、煙を吹き飛ばした。

「やっぱり…。」

煙が吹き飛ぶと、楓が銃を持っていて、獄寺はボム、ランボは手榴弾、ハルがただ駆け回って、赤いおしゃぶりをつけた赤ん坊がこちらに飛んできていた。

そして、綺麗に椿の手の中におさまった。

「そこまで！」

ラル・ミルチが来た。

「風は飛川椿に捕まった。第五の試練“指導力”、合格だ。」

「やったもんね！キラキラのピカピカだもんね！」

「さすがです！椿さん！」

ランボとハルが椿に駆け寄ってきた。

「でも、椿君はメンバーにいなかったから、ルール違反じゃ…。」

「いや、椿は最初からいたぞ。」

リボーンがどこからか出てきた。

「応接室の前で書類を片付けていたから、お前達は気づかなかったようだな。」

「さあ、リングを出してください。」

そして、ツナはリングを風に向け、アルコバレーノの印を貰った。

「どこだ！あの野郎！」

「ちょっと獄寺君！危ないじゃない！」

獄寺と楓がいつの間にか戦っていて、獄寺のボムが爆発した瞬間、体育館が崩れ、椿とリボン、ラル・ミルチ、風以外は瓦礫の中に埋まってしまった。

そして、瓦礫の中からツナが出てきた。

「じゃあ、ツナ君。持ち前の指導力で、あの二人を止めて、この崩れかけの体育館を完全に修復させてね。」

「そんなー！！」

その後、他の四人も出てきて、体育館の修復を始めた。
そして、椿も一応手伝った。

標的63 第五の試練“指導力”！（後書き）

感想等お待ちしております！

標的64 第六の試練“包容力”！

ツナたちが体育館を壊した次の日
椿は学校から帰り、家にいた。

「ねえ、椿君。これから私の試練を始めるんだけど、ついてきてくれない？」

アリアがそう言ってきた。

「いいですよ。参加者は誰なんですか？」

「ボンゴレの天空のリングの所持者一人。君は付き添いで来てほしいの。」

そして、二人で沢田家に向かった。

そして沢田家に向かう途中

「あ、椿さんとアリアさん！」

「偶然だね、二人とも。」

京子とハルに出会った。

「今、ツナ君の家に行くところなんだよ。」

「そうなんですか？じゃあハルたちもついていきます！」

そして、四人で沢田家に向かった。

そして、沢田家

椿はインターホンを押して、ツナが出てくるのを待った。

「はい、椿君！一体何をしに…。」

「この人を連れてきたんだよ。」

そして、アリアが椿の隣に来た。

「あの…どちら様ですか？」

「私はアリア、あなたに試練を与えに来たの。」

そして、アリアは京子とハルを連れて家とは逆方向に歩き始めた。

「椿君と綱吉君、エスコートよろしくね。」

アリアがそう言うと、ツナがりボーンを蹴り、ツナはアリアについていった。

そして歩くこと十分

ツナたちは商店街を歩いていた

「おい！そこのお前達！ボスと一緒にいるが何者だ？」

後ろから声をかけられて振り返ると、この時代のVがいた。

「あらV。もう見つかったか。じゃあ椿君、しばらくVの相手をしていた。」

そして、椿を残して歩いていった。

「ちょっとアリアさん！」

「おいお前！始めるぞ。」

Vを見ると、キューを構えていた。

「始めるってまさか…。」

「そうだ、戦い《殺し合い》だ。」

「何でこんなことに…。」

椿は獅子風・刃無刀を抜いた。

「ほう、珍しいもん持ってるじゃねえか、獅子風か。是非、あいつにプレゼントしてやりてえな。」

「じゃあ始めますよ。」

そして、二人は戦いを始めた。

戦い続けること三十分

二人がいつの間にか森の中で戦っていると、ツナとアリアが男達に囲まれているのを見つけた。

「一時休戦だね、二人を助けよう。」

「はあ、はあ、そうだな。早くボスを助けるぞ。」

Yは息を切らせていた。

そして、ツナたちの所まで走っていった。

「椿君！」

「真神風流！ハリケーン！」

獅子風・伸縮刀を抜いて、衝撃波で男達の武器を壊していった。そして、Yが男達を次々と倒していった。

「まだだあ！」

残った一人の男がロケットランチャーを使った。そして、飛んできたロケットを、超モードのツナが止めた。

「これは返してやる。」

ツナはロケットを男のほうへ返した。

男はロケットの爆風で池の中に落ちていった。

そして、ツナは普通の状態に戻った。

「ありがとう綱吉君。包容力の試験は合格よ。」

そしてアリアはアルコバレーノの印をツナに渡した。

「これで六つ…。」

そして、京子とハルが来て、全員で家に帰っていった。

Yもアリアと同じく椿たちの家に泊まっていくことになった。

標的64 第六の試練“包容力”！（後書き）

今回はここまでです。

短いのか長いのか普通なのか自分で分からない長さでした。
感想等お待ちしております！

標的65 失格と合格!

次の日の朝

椿と楓はリボーンに呼ばれて並盛島へと向かった。

そして、アリアもついてきた。

「ここで試練をやるのか。」

そして、クロームやランボも含めた他の守護者も全員来た。

しばらく話をした後、リボーンがツナを蹴り飛ばし、試練が開始された。

「手出しはしないよ。」

雲雀がリボーンに突っ込んでいき、リボーンがすぐに倒した。

「僕も行くよ!」

「俺も!」

椿と圭斗が同時に突っ込んで行った。

「全員で来い!」

リボーンの一言で他の守護者も全員臨戦態勢に入った。

「神風一刀流! 神風!」

椿が、獅子風・刃無刀を抜刀して、リボーンを攻撃した。

「甘いな。」

リボーンがレオンを盾に変え、神風を防いだ。

「どうかな？オーロラの散弾！」
パレット・ネディアウローラ

圭斗が棒を回転させて、針のようなオーロラの炎をリボーンに飛ばした。

リボーンは盾のレオンを使って防いだ。

「フレイムインフレーション！」

「貫く吹雪！」
ペネトランテトルメンタ

楓の攻撃で盾のレオンが砕け散り、獄寺の攻撃は直撃し、煙が出てきた。

「やるな。カオスショット！」

煙の中から帽子の取れたりボーンが出てきて、レオンが中に変形してから、必殺技を椿と圭斗に放った。

しかし、SYSTEMA C・A・I.の防御の輪によって防がれ、二人は無事だった。

「守護者は及第点だな。しかし、ツナ！お前もさっさと戦いやがれ！」

そして、リボーンはツナに弾丸を放ち、すぐに消えて、椿と圭斗を岩に蹴り飛ばした。

そして、銃から弾丸を放ち、他の守護者達を倒した。

「リボーン。」

弾丸は超死ぬ気モードのツナによって防がれ、高速でリボーンのもとまで移動し、岩に殴り飛ばした。

「オペレーションX！」

そして、リボーンにX BURNERを放とうとした。

「やはり出来ない。」

ツナはX BURNERを放たなかった。

「失格だな。カオスショット！」

リボーンの必殺技でツナは倒れた。

「いや、合格よ。」

どこからかセティットが出てきて、ツナにアルコバレーの印を渡した。

「セティット！何してやがる。今は俺の試練の途中だ。」

「まあいいじゃない。私の試練は“抑止力”。今を見て合格を決めたのよ。」

そして、椿と圭斗は岩から離れ、ツナの所に駆け寄って行った。

「早く…皆を治療しないと…。」

そして、二人は全員船に乗せて、並盛島を離れていった。

標的65 失格と合格！（後書き）

今回はここまでです。

セティットの印を渡してしまいました。

抑止力の試練をどうすればいいのか分からず、こんな結果になってしまいました。

感想等お待ちしております！

標的66 最後の試練“直感力”!

リボーンの試練で怪我をした雲雀、ランボ以外の守護者達は、並盛町の海岸の灯台の中の部屋にあるベッドで休んでいた。

「みんな、ご飯もって来たよ。」

椿と圭斗の怪我はたいしたことがなく、みんなの世話をしていた。

「いつまでもこんなところにいないで、外の空気でも吸ってリラックスしてみたら？」

圭斗の提案で、クローム以外は全員外に出て行った。

守護者が外に出てくると、海から戦車などの兵器や、白いチェスのポーンのようなもの、ソードを持ったロボット、死ぬ気の炎を纏った海星が出てきた。

「ヴェルデの試練はもう始まってんだ。さっさと行きやがれ、このダメツナが。」

いつの間にかリボーン、コロネロ、ラル・ミルチも来ていた。

「行くよ、皆。」

ツナはそう言って死ぬ気丸を吞んだ。

「真神風流!」

椿が獅子風・伸縮刀を抜き、人差し指に雲のリングを嵌め、獅子風

に雲の炎を灯した。

「斬風！」

椿が回転し、雲の炎の“増殖”で、どんどん獅子風が伸びていき、椿の周りを蔽ってしまった。

そして、衝撃波がいくつも出てきて、白いポーンのようなものをどんどん切り裂いていった。

「俺たちも行くぜ！」

獄寺が兵器が出てきている方向に走っていき、その後ろに他の守護者もついていった。

「フレイムランチャー！」

スコントロディローンディネ
「燕特攻！」

マキシマムキャノン
「極限太陽！」

獄寺、山本、良平はロボットを壊していった。

「粉雪！」

楓がそう言って匣からロントとメータを出し、空に向かって雪の炎を吐き出した。

そして、楓も銃から雪の炎を空に飛ばすと、空から雪が降ってきた。その雪に当たった戦車は、雪が当たった部分から氷が出来て、次第に全体が氷りついた。

「オーロラの散弾！」
パレット―ネディアウローラ

圭斗も戦車を壊していった。

「X BURNER AIR！」

ツナは海星を倒していった。

そして、海から、円盤状の機械が出てきて、その中には緑のおしゃぶりを持った赤ん坊がいた。

「お前がヴェルデか。」

ツナが砂浜に下りた。

そして、クロームを含めた他の守護者達もツナの周りに集まってきた。

「ボンゴレリング所持者の諸君、楽しんでもらえているかな？この世の全ては私の実験材料、ボンゴレリングが必要なんだ。提供してもらう。」

「これはもう試練じゃねえ。ヴェルデは掟を破りやがった。俺たちも動くぞ。」

リボンたち三人も、それぞれの武器を構えた。

「真神風流！真神風！」

椿が晴れの炎をリングに灯し、“活性”によって恐ろしい速さでヴェルデの近くに来た。

そして、ヴェルデを攻撃しようとしたが、周りにあったガラスに弾

かれてしまった。

「無駄だ。これはそう簡単には壊れない、私の作ったものだからな。ところで、雷と雲の守護者がいないようだが……まあいい、君たちの相手はこれに任せよう。」

ヴェルデがそう言うのと、海から雷の炎を纏ったザリガニとエイとサメと海星が出てきて、そして、白いポーンが、並盛町の方角に飛んでいった。

そして、ヴェルデが機械の中に入っていた。

「あれは僕に任せてよ。」

どこからか出てきたマーモンは白いポーンを追いかけていった。

「フレイムインフレーション！」

マキシマムキャノン
「極限太陽！」

獄寺と良平はザリガニの相手をしていた。

「時雨蒼燕流、攻式九の型、雷雨！」

ペネトランテトルメンタ
「貫く吹雪！」

山本と楓はエイの相手をしていた。

パレットローネディアウローラ
「オーロラの散弾！」

「負けない！」

クロームは幻覚でサメを焼き、圭斗も攻撃をしていた。
ツナは、海星の相手をしていた。

「君たち、何やってるの？」

雲雀が来て、トンファーに雲の炎を灯していた。

そして、巨大鎧ダコがヴェルデの乗っていた機械を締め付け始めた。

「あれは、スカルか。」

リボーンがそう言うと、船が海岸に近づいてきた。

そして、ヴェルデの兵器により、船が沈没した。

スカルの部下たちも何とか生きていた。

「サバイバルブラスト！」

ラル・ミルチがザリガニの下に滑り込みながら、弾丸を連射した。

「カオスショット！」

リボーンも銃から弾丸を放ってエイを倒した。

「マキシマムバースト！」

コロネロもサメを倒した。

「爆龍拳！」

赤い炎の龍が飛んできて、ツナの周りの海星を全て倒した。

「風か。」

リボーンがそう言うと、森の中から風とマーモンとアリアとクルースとセティット、イーピンとランボが出てきた。

「揃ったな。」

リボーンがそう言った瞬間、ヴェルデの乗っていた機械から、緑の粉のようなものを撒き散らす緑の球体と、白いポーンが八つ出てきた。

「動けねえ。」

そして、アリア以外の八人のアルコバレーノは捕らえられ、六人を捕らえた白いポーンは、緑の球体と共にヴェルデの機械の上まで飛んでいった。

「僕を忘れないでよ!」

椿が緑の球体を壊し、アルコバレーノたちを解放した。

「ありがとな。椿。」

リボーンがそう言った後、椿は海岸まで戻り、アルコバレーノがヴェルデの乗っていた機械を完全に壊した。

「何だこれ。ロボットじゃねえか。」

リボーンはそう言ってツナたちの所に戻ってきた。

「あの岩：何かおかしい。」

そして、ツナたちはたんこぶ岩と呼ばれる岩に向かった。

そして、たんこぶ岩内部

ツナたちが中に入ると、本物のヴェルデがいた。

そして、ツナは印を貰い、外へ出て行った。

そして、海岸

リボーンからも印を貰い、全員家に帰った。

標的66 最後の試練“直感力”！（後書き）

最後はアニメとまったく同じになるので飛ばしていきました。
感想等お待ちしております！

登場人物紹介7 未来チョイス編オリキャラプロフィール

デラスト・レイド

性別 男性

年齢 23歳

誕生日 12月21日

身長 174cm

体重 56kg

性格 元気な青年

容姿 目は普通の大きさで、色は群青色

顔は全体が包帯で被われている

髪は少し長めで、黒色

雪の真八弔花

ケリス・レイドの兄で、七年前に不慮の事故で死んだとされていた。

セリスト・クラスト

性別 男性

年齢 26歳

誕生日 2月29日

身長 168cm

体重 51kg

性格 普通の性格の青年

容姿 髪は短く、黒色

目は鋭く、灰色

顔は普通の顔

風の真八弔花
真八弔花の中で一番強い

登場人物紹介7 未来チヨイス編オリキャラプロフィール（後書き）

真八弔花のメンバーでした。

標的67 真八弔花！

次の日の早朝

椿と楓は早めに並盛神社に来ていた。

「あれって、雲雀さんと圭斗君？」

「すごい戦いだね。」

二人が見ていた先には雲の炎を纏ったトンファーとオーロラの炎を纏った鉄製の棒をぶつけ合っている雲雀と圭斗がいた。

「君、強いね。」

「あなたほどではないですよ…。」

そして、二人は戦いをやめた。

「そろそろ未来に行きませんか？」

二人に近づきながら椿が言った。

「椿、今来たのかい？遅いよ。」

「まあまあ。」

そして、四人で神社に落ちていた十年バズーカで未来に行った。

そして未来の入江の研究所

「やあ、君たち。アルコバレーノの印は全部揃ったのかい？」

入江が声をかけてきた。

「そうだ！入江さん！」

「正一でいいよ。」

「じゃあ正一君、今すぐこの基地にいる八弔花、それも幻騎士のように百蘭への忠誠を誓っているような奴以外をここに呼んで！」

椿が焦って言った。

（原作をあんまり覚えてないけど、これから嫌な事があった気がする…。）

「そ、そんなことしたら、君たちが襲われちゃうよ！」

「大丈夫。僕が何とかしてみせる。」

椿の目は、決して嘘をついているような目ではなかった。

「そうなのかい？分かったよ。とりあえずここに来てもらうけど、その後は君たちに任せるよ？」

そして、入江が無線機を出し、何かを話していた。
そして、十年前のツナたちがやってきた。

「椿君と楓ちゃん！？それに雲雀さんや圭斗君まで…先に来てたんだ…。そうだ、京子ちゃんたちは先にアジトに行って、ご飯作ってよ。今おなか空いてるんだ。」

「分かりました。先に行って朝ごはん作っていますね。」

そして、その場にいたこの時代のビアンキとフウ太が京子とハルとイーピンを連れて行った。

『イタリアの主力戦も、日本のメローネ基地も、すんごい楽しかった。』

そして、百蘭のホログラムが出てきた。

「おい、何事だ、入江正一。」

「わざわざ兄貴を呼び出すなんて…お前ら！ボンゴレのガキども！」

Vと野猿と太猿、カリメルとキレイアが来た。

「誰がガキだ！テメェらなんざ、一分で片付けてやる。」

『まず人の話を聞きなよ。』

ホログラムの百蘭に喧嘩を止められた。

「何で百蘭のホログラムがいるんだ？」

『それは後で正ちゃんに聞きなよ。それでね、これからミルフィオーレファミリーとボンゴレファミリーの正式な力比べをしようと思

うんだ。もちろん9?を賭けてね。あと、そのマーレリングは偽者だよ?』

すると、入江とカリメルとYのマーレリングが壊れた。

『紹介するよ、僕の本当の守護者達。真八弔花だ。』

すると、百蘭の後ろに、一人の少女と七人の男が映し出された。

『そして、力比べの方法はチョイスをしようと思うんだ。』

「あれを現実でやるつもりですか!?!」

入江が叫んだ。

『そうだよ。細かいことは十日後に発表するからね。』

すると、百蘭は消え、その場にいた全員が光に包まれていった。

標的67 真八弔花！（後書き）

今回はここまでです。

チヨイスにはブラックスペルの皆さんにも参加してもらおうつもりです。

感想等お待ちしております！

標的68 新たな戦力！

ツナたちを包んでいた光が消え、入江の研究所の部分のみが、残っていた。

「基地が、メローネ基地が消えた！」

ツナが周りを見てびっくりしていた。

「ボンゴリングが全てあったから、ここだけが無事に残ったんだ。そして、僕たちからこれを君たちに託す。君たち守護者の、ボンゴレ匣だ。」

白くて丸い装置から、九つのボンゴレ匣が出てきて、それぞれの守護者達のもとに飛んできた。

「俺たちは何故ここに呼ばれた？」

突然Vが口を開いた。

「僕が頼んだんだよ。なんか嫌な予感がしてね。それで：「お前ら、ボンゴレ側につかねえか？百蘭はお前達を信用せずに別の奴らに本物のマールリングを渡していたんだ。奴を見返してやりたいとはおもわねえのか？」：僕の台詞を：。」

椿はリボーンに台詞をとられ、残念そうにしていた。

「だが俺たちのリングはもうねえんだぜ？」

「それなら僕に考えがある。明日ぐらいに彼らが来てくれるはずなんだ。十年後の綱吉君がボンゴレの仲間にした、彼らがね。すぐにAランク以上のリングが用意できるよ。」

そして、いろいろな話をした後、Yたちも一緒にアジトに戻っていた。

そしてアジト

京子やハルが用意していたご飯を食べていると、突然警報が鳴った。

『非常事態発生です！並盛町に二つのリング反応！場所は沢田家！』

「俺の家!?!」

「さっさといきな。俺たちは今リングを持ってねえんだからよ。」

Yに言われて沢田家に向かった。

その頃の沢田家

「おい、ミルフィオーレのいる気配はない、とりあえずリングの反応を出しておいて、ボンゴレたちに俺たちの居場所を伝えたらどうだ？」

「そうですね。とりあえずここで待機しましょう。拙者は周りを見えます。」

「俺も行く。」

そして、一人の少年と大人の男性が沢田家の玄関の前に来た。

「バジル君！？それにランチアさん！？」

玄関の前にツナたちが来た。

「沢田殿！やはりあなたの言うとおりにして良かったです。」

「そうだな。ボンゴレ、久しぶりだな。」

そして、全員でアジトに戻っていった。

そしてアジト

バジルとランチアがものすごい量のご飯を食べ、完全に回復した。

「おい、こいつら俺たちの分まで飯食いやがったぞ…。」

「V兄貴！腹へって死にそうだよー！」

「京子さんにハルさん、またご飯を作ってもらっていいですか？」

キレイアが二人に頼み、もう一度ご飯を作り直してもらった。

「ところでボンゴレ、この男、Vは元ジッリョネロファミリーだろ？ミルフィオーレファミリーのブラックスペルのやつらが何故ここにいるんだ？」

「それは…「こいつらもボンゴレに入ってもらった。」」

ツナが言いかけたときにリボーンが割り込んできた。

「ちょっと待てよ。俺たちはボンゴレに入った覚えはねえぜ。あくまでジッリョネロの立場でボンゴレに加勢するつもりだ。」

「どっち道仲間になることに変わりねえじゃねえか。」

「とりあえず百蘭を倒すための心強い仲間、ということですね。」

そして、全員それぞれの部屋で休み、夜になってから寝た。

標的68 新たな戦力！（後書き）

今回はここまでです。

ブラックスペルの五人が仲間に加わり、さらにバジルとランチアも加わりました。

チョイスが楽しみです。

感想等お待ちしております！

標的69 newリング！

次の日

いつもより早く起きた椿は、食堂にいた。

「久しぶりだなあ。このアジト。」

「そうだな。ちょうど三ヶ月ほど前だったか？一番最近来たのは。」

二人の男が入ってきた。

一人は赤茶色の髪 of 小さな少年で、もう一人は少年の髪よりすこし黒っぽい髪の大人の男だった。

「あなた方、誰？」

地味に寝ぼけている椿が二人に言った。

「あなたは、ボンゴレ風の守護者の椿さん！でも、小さくないですか？」

少年が椿に近づいてきた。

「ソルテ、報告にあった。十年前の椿だ。」

「そうなの？兄さん。」

「すまない、俺はブリガンテス。こっちはソルテだ。この時代のお前達には世話になったんだ。」

そして、椿は二人と握手をした。

その後、雲雀とクローム以外のボンゴレの守護者やブラックスペル、バジルやランチアも来て、ソルテとブリガンテスの紹介が終わった後、京子とハルとイーピンが朝食を運んできた。

「それで、二人はどうしてここに来たんですか？」

朝食を食べながらツナが聞いた。

「入江から聞いていないか？ マーレリングを失ったそのやつらのリングを作りに来たんだ。原料となるストーンも精製する機械もアジトの倉庫に置かせてもらっている。」

「ちょっと待てよ。リングが簡単に作れるのか？」

Ⅴが疑いの目でブリガンテスに聞いた。

「俺たちはリング職人だからな。しかし、俺よりもソルテの技術の方がすごいんだ。ソルテ、早速作りに行くか。」

「そうだね。兄さん。」

そして、二人が倉庫に向かっていった。

他のものも二人の後を追って倉庫に向かった。

そして倉庫

倉庫の中は明るく、道を作り出している棚にいろいろな色の宝石が置かれていて、置くには机があった。

二人が机の上で謎の機械を使って緑色の宝石のついたリングを作っ

ていた。

「それは俺のリングか？」

Yが二人に聞いた。

「ああ、偽のマーレリングの石を黄色いおしゃぶりをつけたアルコバレーノが持って帰っていたようだな、それを使わせてもらっている。元のリングよりすごいものが出来るだろうぜ。」

「リボーンが…」

（非9？でただでさえ体調最悪なのに…）

ツナはそんなことを考えながらリボーンに感謝していた。

「出来た！」

突然ソルテがそう言うと、雷のリングをYに渡した。

「このリング…いいリングだな。精度Aランクよりももう少し上だな。ありがとよ、ソルテ。」

そして、Yが作ったリングを中指に嵌めた。

「ソルテ、後七つ作るぞ。風と雲と雨のリングが一つずつ、嵐のリングが三つだ。」

「それって、拙者とランチア殿、それに他のブラックスペルのリングですか？」

「そうだ。とりあえず今指に嵌めているリングはここに置いていてくれ、もっといいものに作り直しておく。午後五時になったら取りに来てくれ。」

そして、ブリガンテスとソルテは他のリングを作り始めた。
そして、他のメンバーはこの時代の並盛町を見に行った。

標的69 newリング! (後書き)

今回はここまでです。

ソルテとブリガンテスは、REBORN!のゲームのキャラクターです。

感想等お待ちしております!

標的70 エアーバイク！跳ね馬来る！

並盛町から帰ってきたツナたちは、ソルテとブリガンテスからブラックスペルとバジルとランチアのリングを受け取り、普通の日を過ごしてから寝た。

そして次の日

ツナたちが起き、朝食を食べてからリボーンの呼び出しでトレーニングルームに向かった。

「ねえ、何の用？」

キレイアがトレーニングルームにいたりリボーンに聞いた。

「これからお前らにはエアーバイクの練習をしてもらう。チョイスは広範囲で戦うゲームらしいからな、機動力が必要になるんだ。このバイクは金属反応も死ぬ気の炎の反応も出さずに移動できる。敵に見つからずに移動することが出来るんだ。」

リボーンからの説明が終わり、それぞれが自分のバイクに乗った。

「極限！」

良平がいきなりスピードを出して走り、トレーニングルームの壁に激突した。

「あいつ、本当に守護者の一人か？」

「Vたちブラックスペルは簡単にバイクを乗りこなし、練習を終えて部屋に戻っていった。」

「俺もやってみるかな。」

圭斗がエンジンを出すと、思った以上のスピードが出て、バイクから落ちてしまった。

「痛いなあ。やっぱり何かを運転するのは苦手だ。」

「それってどういうこと？」

他の守護者やバジルたちがバイクを乗りこなしている中、二人だけが取り残されていた。

「実は俺、まだ自転車にも乗れない運転音痴なんだよ…。」

「俺と似てるね。」

そして、ツナと圭斗は他の皆に教えてもらいながらも、三時間かけて何とかバイクに乗れるようになって来た。

それでも二人ともまだ人が歩く程度の早さ、みんなと同じようなスピードが出せるほどにはならなかった。

「みんな、ありがとう。とりあえず皆は休んでてよ。後は俺たちだけで頑張ってみるから。」

ツナが皆に向かって笑顔で言った。

「でも…もう少し手伝った方がいいんじゃないの？」

「皆に教えてもらったから大丈夫だよ。」

そして、楓の好意も無駄に終わり、ツナと圭斗は二人で練習し始めた。

ピー ピー ピー

『ただいま、ディーノさんがアジトに到着しました。皆さん作戦室に集まってください。』

「とりあえず、ツナ君と圭斗君はここで練習しててね。何か大切なことは後で伝えてあげるから。」

椿がそう言い残して、全員で作戦室に向かった。

そして作戦室

ブラックスペルはすでに来ていて、椅子に座っていた。

「よお、久しぶりだな。ツナはいねえのか？」

十年経って成長したディーノが椿たちに言った。

「二人はエアークバイクを乗りこなすためにトレーニングルームで練習中です。」

椿が答えて、全員椅子に座った。

「それで、跳ね馬。何しに来たんだ？」

＼がディーノに聞いた。

「ボンゴレ匣の修行を手伝うためだ。百蘭を倒すために必要なんだろう？」

「俺たちはどうすればいい。まさか、何もせずに待たされる訳じゃねえよな。」

太猿がディーノに言った。

「お前達にも修行を手伝ってもらおう。そのついでにお前達のパワーアップもする段取りになっている。」

「なるほどな。」

「どんな修行をするのか、修行相手が誰なのか決まってるんですか？」

椿が授業中の発言のように手を挙げて言った。

「一応な。だが、ブラックスペルのやつらをどう振り分けるかは決まってねえんだ。」

「あのよお、もうブラックスペルって言い方はやめてくれねえか？ ジッリヨネロファミリーとしての立場で動いてんだ。」

＼がため息をついてから言った。

「すまない。とりあえず今日は休んでくれ。詳しいことは明日伝える。そして、修行も開始するからな。」

そして、全員それぞれの部屋に帰っていった。

標的70 エアーバイク! 跳ね馬来る! (後書き)

今回はここまでです。

ディーノが来るタイミングもエアーバイクの上達の早さも変わって
きました。

ゝたちも新しいリングで活躍する予定です。

感想等お待ちしております!

標的71 それぞれのボンゴレ匪修行!

次の日、雲雀以外の守護者とジツリヨネロ、バジルとランチア等、京子とハル以外の人物が、ディーノに呼ばれて集まってきた。

「お、来たな。じゃあ始めるぜ。」

そして、守護者はディーノと向かい合って一列に並び、他のものはディーノの後ろにいた。

「俺は今回、全体を仕切る家庭教師になった。今回はランボも修行させるからな? じゃあ修行内容を説明していく。まずツナ、お前は一人だ。匣兵器のことを理解してやれ。」

「一人ですか。匣を理解して…。」

「次に獄寺隼人、お前はYと野猿、太猿を相手にして、一人で勝てるほどになれ。お前はYと二度も戦ったんだ、弱点とか指摘してくれるだろう。」

「よろしくな。」

Yと軽く握手をした。

獄寺は躊躇していたが、Yは当たり前前の様子だった。

「次に山本、お前はパスだ。つーかお前には手え出せねえんだ。」

「つまんねーなあ。」

「次にクローム・髑髏、お前はマーモンが残していった幻覚強化プログラムと格闘能力アップに専念してくれ。毒サソリとイーピンに手伝ってもらえ。」

そして、三人でトレーニングルームを出て行った。

「次にランボと笹川良平、お前達はバジルとランチアに匣について教えてもらってくれ。あいつらとは顔見知りだからやりやすいだろ。」

「よろしくお願いします。」

「よろしくな。」

「分かったもんね！」

ランボはランチアの肩に飛びついた。

「雲雀恭弥は俺との修行を開始している。次に篠村楓、お前は俺と一緒に恭弥の相手だ。ほとんどお前に任せるからな。」

「そんなぁ…。」

楓は残念そうに座り込んでしまった。

「次に飛川椿と虹影圭斗、お前達は組み手だ。ボンゴレ匣を使いなから戦ってくれ。ソルテやブリガンテスも手伝ってくれるからな。」

「分かったよ。」

「キレイアとカリメルには全体の修行を見てもらう。以上だ、それぞれ修行場所は好きにしてくれ。」

そして、それぞれトレーニングルームを出て行った。

「行ったね。」

「はい。」

トレーニングルームには京子とハルが隠れていて、壁と同化して張り付いていた。

そして、全ての話を盗み聞きしていた。

そして、ツナの部屋。

「よし、開けてみるか。」

ツナはボンゴレリングに大空の炎を灯し、ボンゴレ匣を開匣した。すると、中からは鬣が死ぬ気の炎の小さなライオンが出てきて、ツナを攻撃してきた。

「いてっ！何するんだよ！」

「ガウ！」

そして、ライオンと激闘を繰り広げ始めた。

一方第二トレーニングルーム

「じゃあ始めるぜ。まずは野猿と太猿相手に戦ってもらおうか。」

「分かったぜY兄貴！」

「手加減はしねえぜ。」

野猿と太猿が匣から鎌を出した。

「望むところだ！」

獄寺がSYSTEM C・A・Iを出した。

「によおーん！」

瓜が獄寺に反抗し、顔を引っかき始めた。

「やめろ瓜！」

「こんなので大丈夫なのか？」

Yが椅子に座り、足を組んで昼寝を始めた。

一方道場

「時雨蒼燕流、特式十の型、スコントロデイローンディネ燕特攻！」

山本が藁人形を斬っていた。

「今はこんなところか。」

一方図書室

「リングと匣の使い方は以上です。やってみてください。」

バジルはリングから雨の炎を、ランチアは嵐の炎を出しながら言った。

「極限にやってみるぞ！」

そして、良平はボンゴレリングに晴れの死ぬ気の炎を灯し、匣に入した。

匣からは漢我流が出てきた。

「おお！本当に出てきたぞ！」

「さすがだな。こいつも出してやるか。」

ランチアは持っていた匣に炎を注入した。

匣からはトラが出てきた。

「カッコいいもんね！」

ランボがトラに近づくと、トラはランボを振り払った。
ランボは机に頭をぶつけて泣いてしまった。

「痛いもんねー！うえーん！」

ランボのリングからは雷の炎が出てきて、匣に注入した。

「なんと！」

「牛…ですね。」

匣から出てきたのは雷の炎を纏った牛だった。

「愚か者ども！死んじゃえー！」

ランボの一言で牛が突進して来て、全員をボロボロにした。

一方ストームルーム

「クローム、始めるわよ。」

ビアンキがそう言うのと、マーモンが残していった幻覚強化プログラ
ムが始まった。

一方地下一階

椿と圭斗は二人で戦っていた。

「この二人をどうすればいいんだろうな、ソルテ。」

「分からないよ、兄さん。」

ソルテとブリガンテスはただ啞然としていた。

標的71 それぞれのボンゴレ匣修行！（後書き）

アクセス数30000突破です！

皆さんこの小説を読んでいたいてありがとうございます！
感想等お待ちしております！

標的72 ツナvs良平!

修行を始めて三日、チョイスの日も着実に近づいていた。

「疲れたなあ。」

ツナはナッツと呼ぶライオンを肩に乗せていた。

「よおツナ、スクアール見なかったか？」

ツナが歩いていると、山本に出会った。

「スクアール？あの人来てたの!？」

「ああ、だけどさあ、トイレに行ったり戻ってこねえんだよ。」

「このアジトの構造が複雑だから迷ってるんじゃないのか？」

いつの間にか後ろに獄寺が来ていた。

「獄寺君！」

「あの、ツナ君。」

ツナたち三人の前に、京子とハルがいた。

「突然ですが、ハルたちにもツナさんたちがいるボンゴレや、ミルフィオーレのことを教えてください。」

「ボンゴレ？ミルフィオーレ？何だそりゃ。」

ツナは冷や汗をたらしながら嘘をついた。

「みんな何してるの？」

京子とハルの後ろから椿と圭斗がきた。

「椿さん。ボンゴレファミリーやミルフィオーレファミリーのことを教えてください！」

「ボンゴレって言うのは僕らやツナ君たちが所属している大規模のマフィアのこと。この時代ではミルフィオーレファミリーのせいで勢力を失いかけてるんだ。それで、ミルフィオーレファミリーって言うのは、僕らの敵。百蘭ってやつがボスで、今そいつらと戦うために修行してるんだ。」

圭斗がすらすらと言い、ツナたちはびっくりしていた。

椿は圭斗の隣で普通の顔をしていた。

「どうせ黙ってたってしょうがないじゃん。それともツナ君はこのままぎこちない空気で京子ちゃんやハルたちと接していたかったの？」

椿の一言でツナは俯いた。

「それもそうだよね。」

「十代目…。」

「ツナ…。」

「お兄さんには俺が説明しておくよ。」

そして、ツナが歩いていった。

そしてトレーニングルーム

良平はトレーニングルームで筋トレをしていた。

「あの、お兄さん。」

「何だ？ 沢田。」

「少しお話が…」

そして、ツナは正座、良平は胡坐をかいて座った。

「話とは何だ？」

「それがですね、京子ちゃんとハルにミルフィオーレやボンゴレのことをばらしてしまいました。ごめんなさい！」

ツナが土下座すると、良平は沈黙状態だった。

「…沢田、許さんぞ！」

良平が匣からセレーノグローブを出した。

「勝負しろ。そうでないと俺の気がすまん！」

そして、地面を殴り、地面にはひびが入った。

「分かった。」

死ぬ気丸を呑み、超モードになったツナが言った。

「極限ラッシュュ！」

良平がツナに突っ込み、連続でパンチを繰り出した。
それをツナは避け続けていた。

「避けてばかりでは勝負にならんぞ！」

「死ぬ気の零地点突破・初代エディション！」

ツナのグローブの甲に？のマークが出てき、良平のグローブを凍らせた。

「何？」

「Xショット！」

ツナは手の中で、大空の炎の“調和”で打製石器のような形の石を作り、炎を纏わせて良平に飛ばした。
その石は見事に良平を地面に倒して、服に刺さって良平の動きを封じた。

「俺の勝ちだ。」

「そうだな。」

ツナは良平の服に刺さっていた石を割り、良平を解放した。
そして、良平はグローブを匣に戻した。

「沢田、最後に一発殴らせろ。」

良平はツナの返事を聞く前にツナの顔を殴った。
それと同時にツナは普通の状態に戻った。

「あの、お兄「極限に修行再開だー!」」

そして良平はどこかに行ってしまった。

「∴そろそろ昼ごはんの時間かな?」

時計を見ると時刻は12時、ツナは食堂へ向かった。

それから数日の間は、それぞれの修行も絶好調で、ボンゴレ匣も徐々に使いこなせるようになっていった、

標的72 ツナvs良平! (後書き)

今回はここまでです。

ツナと良平が戦いました。

Xショットっていう新技もしました。

次くらいにいチョイス本番だと思っています。

感想等お待ちしております!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0121x/>

家庭教師ヒットマンREBORN! ～二人の転生者～

2011年10月21日12時01分発行